岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第472集

高木古館遺跡・長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書

国道4号花巻東バイパス建設工事関連遺跡発掘調査

2006

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

高木古館遺跡・長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書

国道４号花巻東バイパス建設工事関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、「国道4号花巻東バイパス建設工事」に関連して、平成15・16年度に実施された高木古館遺跡と平成16年度に実施された長根Ⅰ遺跡の調査成果をまとめたものです。高木古館遺跡の調査から、縄文時代の狩猟や集落としての場が確認され、また、中世の小規模な城館跡の一部であったことが明らかになりました。

長根Ⅰ遺跡では近世の墓地であったことが明らかになり、当時の様子をうかがい知る貴重な資料を得ることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、花巻市教育委員会をはじめとする関係各位に対しまして、深く感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　合田　武

例　　言

1　本報告書は、岩手県花巻市高木第20地割88－10ほかに所在する高木古館遺跡および岩手県花巻市東十二丁目第1地割65－1ほかに所在する長根Ⅰ遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2　岩手県遺跡登録台帳における遺跡番号・調査略号は次のとおりである。

高木古館遺跡　遺跡番号：ＭＥ 26 － 2089　遺跡略号ＴＧＫＤ－ 03・04

長根Ⅰ遺跡　遺跡番号：ＭＥ 36 － 1213　遺跡略号ＮＮＩ－ 04

3　本遺跡の発掘調査は、国道4号花巻東バイパス建設工事に伴い、岩手県教育委員会の調整を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

4　野外調査及び室内整理期間（調査面積）担当者は次のとおりである。

高木古館遺跡	野外調査	第1次	平成15. 6. 9～10.24（7,890 ㎡）	阿部徳幸・小山内透
		第2次	平成16. 4.13～6.30（4,072 ㎡）	阿部徳幸・西澤正晴
	室内整理	第1次	平成15.11. 4～平成16. 3.31	阿部徳幸
		第2次	平成16.11. 1～平成17. 3.31	阿部徳幸
長根Ⅰ遺跡	野外調査		平成16. 8.19～9. 3（931 ㎡）	中村絵美
	室内整理		平成16.11. 1～3.31	中村絵美

5　基準点測量、現況地形測量は株式会社株式会社ハイマーテック、航空写真撮影は東邦航空株式会社に委託した（高木古館遺跡）。基準点測量は樺平測量設計に委託した（長根Ⅰ遺跡）。

6　本報告書の執筆の担当は次のとおりである。

高木古館遺跡　阿部徳幸

長根Ⅰ遺跡　中村絵美（編）

7　分析・鑑定・委託業務は次の機関に委託した（順不同・敬称略）。

火山灰分析　パリノ・サーヴェイ株式会社

炭化材樹種同定　パリノ・サーヴェイ株式会社

石質鑑定　花崗岩研究会

金属製品保存処理　㈱ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石文化財保存センター

人骨鑑定　国際医療福祉大学リハビリテーション学部　奈良貴史

8　野外調査では、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所・花巻市教育委員会ならびに遺跡周辺住民の方々より多大なるご協力を得た。

9　発掘調査及び報告書作成にあたり、以下の方々のご指導・ご協力をいただいた。

鎌田勉・日下和寿（岩手県教育委員会）、酒井宗孝（花巻市教育委員会）、井上雅孝（滝沢村教育委員会）、及川真紀（前沢町教育委員会）、押切健吾

10　本遺跡の調査結果は、先に、『高木古館跡現地公開資料』（平成15年10月17日）、『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』第455集及び平成16年の『高木古館跡現地公開資料』（平成16年6月19日）、『平成16年度発掘調査報告書』第469集（平成17年3月31日）において発表しているが、本書の内容が優先するものである。

11　本遺跡の出土遺物及び諸記録類は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　遺跡の位置 …… 1
2　地理的環境 …… 3
3　歴史的環境 …… 3

Ⅲ　高木古館遺跡

1　遺跡の立地 …… 11
2　基本層序 …… 11
3　野外調査と室内整理 …… 14
4　検出遺構と出土遺物 …… 18
5　総　　括 …… 62
付　編　自然科学分析 …… 77
写　真　図　版 …… 83

Ⅳ　長根Ⅰ遺跡

1　遺跡の立地 …… 107
2　基本層序 …… 108
3　野外調査と室内整理 …… 108
4　検出遺構と出土遺物 …… 111
5　ま　と　め …… 147
付　編　出土人骨について …… 152
写　真　図　版 …… 157
報告書抄録 …… 173

図版目次

＜第Ⅰ・Ⅱ章＞

第 1 図　遺跡位置図
第 2 図　遺跡の位置図 …… 2
第 3 図　周辺の地形分類図 …… 4
第 4 図　周辺の遺跡分布図 …… 5

＜高木古館遺跡＞

第 5 図　基本土層柱状図 …… 11
第 6 図　遺跡周辺の地形図 …… 12
第 7 図　現況地形図 …… 13
第 8 図　グリッド配置図 …… 14
第 9 図　遺構配置図 …… 19
第 10 図　遺構配置図（縄文時代～古代）…… 20
第 11 図　第 1 号竪穴住居跡(1) …… 22
第 12 図　第 1 号竪穴住居跡(2) …… 23
第 13 図　1 ～ 3 号陥し穴状遺構 …… 25
第 14 図　4 ～ 6 号陥し穴状遺構、4 号土坑 …… 26
第 15 図　7 ～ 10 号陥し穴状遺構 …… 28
第 16 図　11 号陥し穴状遺構、
　　1 号竪穴状遺構 …… 30
第 17 図　1 ～ 7 号土坑 …… 31
第 18 図　柱穴 …… 32
第 19 図　遺構配置図（中世）…… 35
第 20 図　テラス状遺構 01・犬走り 01 …… 37
第 21 図　テラス状遺構 02 …… 38
第 22 図　犬走り 02・1 号溝跡 …… 40
第 23 図　1 号堀跡(1) …… 41
第 24 図　1 号堀跡(2) …… 42
第 25 図　2・3 号堀跡 …… 43
第 26 図　1 号炭窯跡 …… 44
第 27 図　遺構内出土土器 …… 46
第 28 図　遺構外出土土器 1 …… 47
第 29 図　遺構外出土土器 2 …… 48
第 30 図　遺構外出土土器 3 …… 49
第 31 図　遺構外出土土器 4 …… 50
第 32 図　遺構外出土土器 5 …… 51
第 33 図　遺構外出土土器 6 …… 52
第 34 図　遺構内出土石器 …… 53
第 35 図　遺構外出土石器 1 …… 54
第 36 図　遺構外出土石器 2 …… 55
第 37 図　遺構外出土石器 3 …… 56
第 38 図　遺構外出土石器 4 …… 57
第 39 図　遺構外出土石器 5 …… 58
第 40 図　遺構外出土石器 6 …… 59
第 41 図　遺構外出土石器 7 …… 60
第 42 図　金属製品・銭貨 …… 61
第 43 図　周辺の城館跡分布図 …… 63
第 44 図　高木古館遺跡推定縄張図 …… 65

＜長根Ⅰ遺跡＞

第 45 図　遺跡範囲図 …… 107
第 46 図　基本層序 …… 109
第 47 図　調査区全体図 …… 111
第 48 図　柱穴列 …… 112
第 49 図　墓壙全体図 …… 114
第 50 図　墓壙断面図 …… 115
第 51 図　1 号墓壙 …… 116
第 52 図　1 号墓壙出土遺物 …… 117
第 53 図　2・3 号墓壙(1) …… 117
第 54 図　2・3 号墓壙(2) …… 118
第 55 図　2 号墓壙出土遺物 …… 118
第 56 図　2・4 号墓壙出土遺物 …… 119
第 57 図　3 号墓壙出土遺物 …… 119
第 58 図　4 号墓壙 …… 120
第 59 図　4 号墓壙出土遺物 …… 121
第 60 図　5 号墓壙(1) …… 122
第 61 図　5 号墓壙(2) …… 123
第 62 図　5 号墓壙出土遺物 …… 123
第 63 図　6 ～ 8 号墓壙(1) …… 124
第 64 図　6 ～ 8 号墓壙(2) …… 125
第 65 図　6 号墓壙出土遺物 …… 125
第 66 図　7 号墓壙出土遺物 …… 126
第 67 図　8 号墓壙出土遺物 …… 127
第 68 図　9 号墓壙出土遺物 …… 127
第 69 図　9・10 号墓壙(1) …… 128
第 70 図　9・10 号墓壙(2) …… 128
第 71 図　11 号墓壙 …… 129
第 72 図　11 号墓壙出土遺物 …… 129
第 73 図　12 号墓壙 …… 130
第 74 図　12 号墓壙出土遺物 …… 131
第 75 図　13 号墓壙(1) …… 131
第 76 図　13 号墓壙(2)・出土遺物 …… 132
第 77 図　14 号墓壙出土遺物 …… 133

第 78 図　14・15 号墓壙 …… 133
第 79 図　15 号墓壙出土遺物 …… 135
第 80 図　16 号墓壙・出土遺物 …… 136
第 81 図　遺構外出土遺物 …… 136
第 82 図　墓標 …… 147
第 83 図　釘分類図 …… 148

写真図版目次

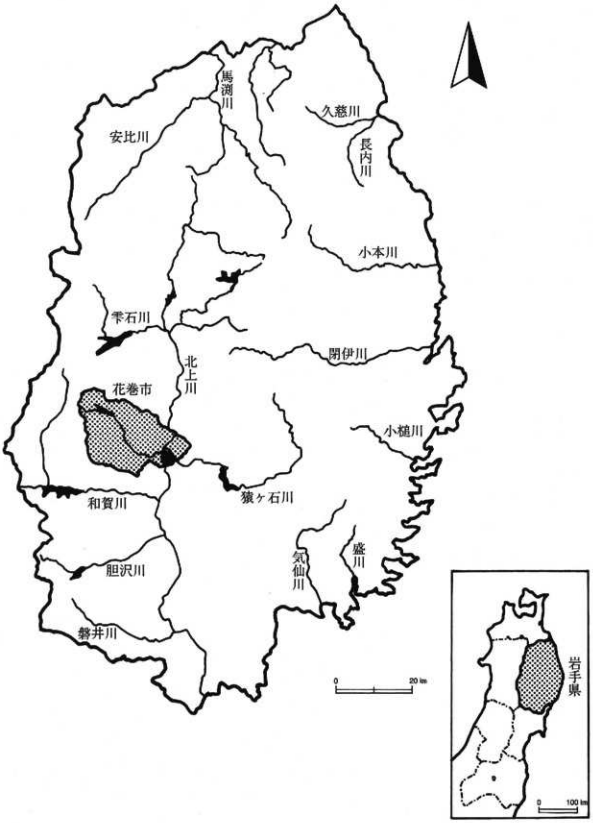
<高木古館遺跡>
写真図版 1　調査区全景航空写真(平成 15 年度) 83
写真図版 2　調査区全景航空写真(平成 16 年度) 84
写真図版 3　調査区全景、調査前現況、基本土層 85
写真図版 4　1 号竪穴住居跡 …… 86
写真図版 5　1 ～ 4 号陥し穴状遺構、4 号土坑 87
写真図版 6　5 ～ 8 号陥し穴状遺構 …… 88
写真図版 7　9 ～ 11 号陥し穴状遺構、
1 号竪穴状遺構 …… 89
写真図版 8　1 ～ 3・5・6 号土坑 …… 90
写真図版 9　7 号土坑、テラス状遺構 01
・テラス状遺構 02(1)…… 91
写真図版 10　テラス状遺構 02(2)・犬走り 01・02・
1 号堀跡(1)・1 号溝跡 …… 92
写真図版 11　1 号堀跡(2)・2・3 号堀跡(1) …… 93
写真図版 12　2・3 号堀跡(2)、1 号炭窯跡 …… 94
写真図版 13　出土土器 1 …… 95
写真図版 14　出土土器 2 …… 96
写真図版 15　出土土器 3 …… 97
写真図版 16　出土土器 4 …… 98
写真図版 17　出土土器 5 …… 99
写真図版 18　出土土器 6 …… 100
写真図版 19　出土石器 1 …… 101
写真図版 20　出土石器 2 …… 102
写真図版 21　出土石器 3 …… 103
写真図版 22　出土石器 4 …… 104
写真図版 23　出土石器 5、出土金属器 1 …… 105
写真図版 24　出土金属器 2、銭貨 …… 106

<長根 I 遺跡>
写真図版 25　遺跡・調査区全景 …… 157
写真図版 26　調査風景、基本層序 …… 158
写真図版 27　柱穴列、墓壙群 …… 159
写真図版 28　墓壙断面 …… 160
写真図版 29　1 ～ 6 号墓壙 …… 161
写真図版 30　5 ～ 10 号墓壙 …… 162
写真図版 31　1・11 ～ 16 号墓壙…… 163
写真図版 32　7・8・11 ～ 16 号墓壙、墓標
…… 164
写真図版 33　出土遺物(1) …… 165
写真図版 34　出土遺物(2) …… 166
写真図版 35　出土遺物(3) …… 167
写真図版 36　出土人骨(1) …… 168
写真図版 37　出土人骨(2) …… 169
写真図版 38　出土人骨(3) …… 170
写真図版 39　出土人骨(4) …… 171
写真図版 40　出土人骨(5) …… 172

表 目 次

<高木古館遺跡>
第 1 表　周辺の遺跡一覧表 …… 6
第 2 表　基準杭・区画制付杭 一覧表 …… 15
第 3 表　遺構名称変更表 …… 17
第 4 表　陥し穴状遺構一覧表 …… 29
第 5 表　土坑一覧表 …… 33
第 6 表　周辺の城館跡一覧表 …… 64
第 7 表　土器観察表(1) …… 68
第 8 表　土器観察表(2) …… 72
第 9 表　陶磁器観察表 …… 72
第 10 表　石器観察表 …… 73
第 11 表　金属製品・銭貨観察表 …… 76

<長根 I 遺跡>
第 12 表　柱穴 一覧表 …… 113
第 13 表　墓壙一覧表 …… 137
第 14 表　出土遺物一覧表 …… 138
第 15 表　遺構別釘出土量一覧表 …… 146
第 16 表　遺構別出土遺物一覧表 …… 150



第１図　岩手県における遺跡位置図

Ⅰ　調査に至る経過

「高木古館遺跡」及び「長根Ⅰ遺跡」は、国道4号花巻東バイパス建設工事の施工に伴い、その事業区域内に存することから、発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道4号は、東京都中央区日本橋を起点として、青森県青森市に至る延長約858㎞のわが国最長の国道で、東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。

国道4号花巻東バイパスは、花巻市山の神と同市西宮野目区間、約8.3㎞（花巻空港インター取付道路500ｍ含む）で計画されている。現国道は、ほぼ市街地の中心を南北に縦貫し、全幅員10～12ｍと狭く、近年の交通量の増大と車両の大型化により、交通混雑、沿道環境の悪化が顕著になってきている。このため、市内を通過する国道4号の交通混雑の解消と東北自動車道、東北新幹線新花巻駅への交通アクセス機能を高めるため、昭和62年度に事業着手し、平成元年度に用地買収着手、平成4年度に工事着手、平成14年度に国道283号線ら終点側約4.2㎞（花巻空港インター取付道路500ｍを含む）を暫定供用している。また、起点から国道283号間約4.1㎞について工事着手した。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が、平成12年度分布調査を実施し、「高木古館遺跡」及び「長根Ⅰ遺跡」も確認されている。「高木古館遺跡」については、平成12年度に試掘調査を終了している。その結果に基づいて岩手県教育委員会は、国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所（現国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）に対し、事業を照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は、国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、平成15年5月30日付けで国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所長と財団法人岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約を締結し、「高木古館遺跡」の発掘調査に着手した。但し、事業用地未買収範囲については、用地買収完了後に継続調査を実施することとした。

その結果、平成16年4月1日付けで再度受託契約を締結し、発掘調査に着手した。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　遺跡の位置（第1・2図）

高木古館遺跡は、花巻市高木第20地割88-10他に所在する。花巻市の市街地から東南東へ約2.3㎞付近の同地点は、北上川と猿ヶ石川との合流地点付近にあり、北緯39度22分57秒、東経141度08分34秒付近に位置する。また、長根Ⅰ遺跡は高木古館遺跡よりも西に約1.5㎞、花巻市東十二丁目第1地割65-1他に所在し、北緯39度22分13秒、東経141度08分04秒付近に位置する。いずれの遺跡も国土地理院発行の5万分の1地形図「花巻」の図幅に属する。

第２図　遺跡の位置図

2　地理的環境（第2・3図）

花巻市の地形は、市域東半の中央を北上川が大きく蛇行しながら南流し、それに沿って南北に河谷平野が発達するが、北上川の東西では地形様相が若干異なっている。市域の西半には、松倉山や円森山など標高 200 ～ 900 m級の山地が連なる急峻で起伏の大きい奥羽山脈の東縁部が広く横たわり、市域の約半分を占めている。ここから瀬川や豊沢川などの河川が比較的急勾配で東流し、北上川に注いでいる。こうした支流による砂礫の堆積により北上川は流路を東方へ押しやられ、また、扇状地性の台地が広く発達する。この台地は新旧３段以上に分類されるが、とくに中位・低位段丘が多く分布している。

いっぽう市域東半には比較的勾配の緩やかな標高 150 ～ 250 m前後の北上高地西縁の丘陵や山地が張り出し、その間を猿ヶ石川などの河川が緩い勾配で西流し、北上川と合流する。これらの周囲には局地的に小規模な河岸段丘が存在するが、一般に段丘の発達は不良である。

地質的には、西側の奥羽山系には、主に新第三紀中新世のグリーンタフ活動による安山岩質～流紋岩質岩が砂岩や礫岩・頁岩を伴い分布するほか、更新世や第四紀の岩盤層が分布する。東側の北上山系には泥岩及びチャートよりなる古生代二畳紀の地層や中生代の花崗岩、斑レイ岩、蛇紋岩類、さらには中新世の安山岩類と鮮新世の炭層をはさむ砂岩や頁岩層が分布する。

高木古館遺跡は上記のような市域東半の地形状況のなかにあり、北上高地から北方向に張り出している丘陵先端上に立地する。これに対し長根Ⅰ遺跡は、高木古館遺跡と同様に市域東半にあるが、北上川あるいはその支流によって形成された河岸段丘上に立地する。段丘下は現況から判断する限り旧河道となっている。

このように、高木古館遺跡と長根Ⅰ遺跡は対照的な立地環境にあり、それによって両遺跡の性格あるいは機能が決定される要因にもなっていると考えられる。

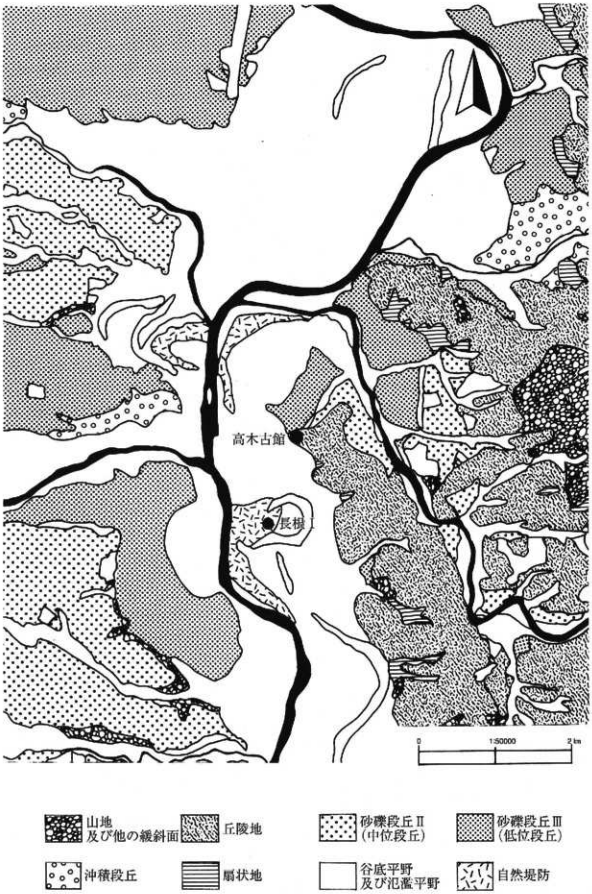
3　歴史的環境（第4図）

花巻市内で確認されている遺跡は、312ヶ所（平成15年1月1日現在。旧石器1ヶ所、縄文165ヶ所、弥生4ヶ所、古代171ヶ所、中世42ヶ所、時期不明10ヶ所）である。

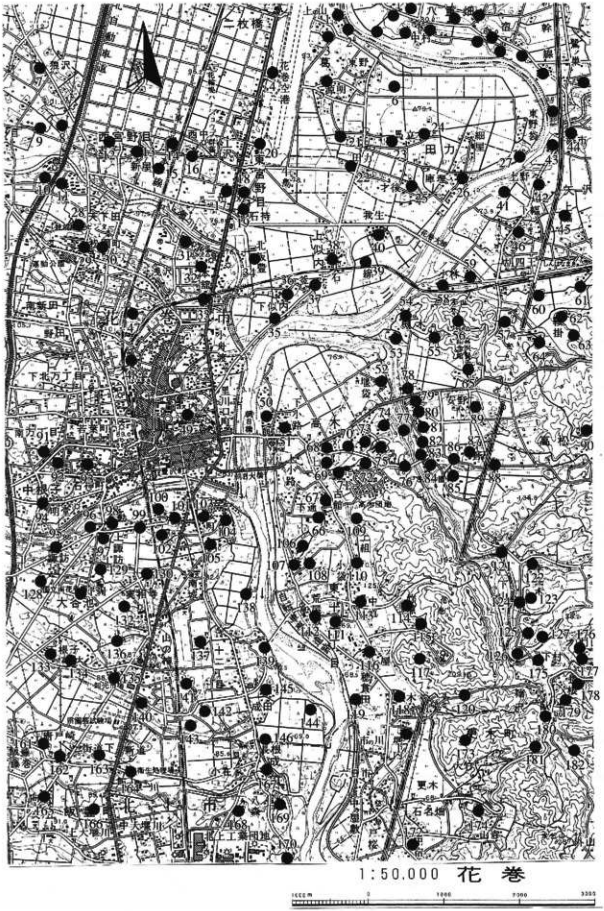
遺跡の分布状況は、縄文時代の遺跡について見ると、ほとんどが散布地だが、特に猿ヶ石川の段丘と北上高地の谷底平野部を中心に遺跡が集中している。猿ヶ石川左岸の河岸段丘上に位置する久田野Ⅱ遺跡は、20棟以上の竪穴住居跡や広場を有する市内最大級の縄文時代中期集落跡である。猿ヶ石川を挟んだ段丘上には中野Ｄ遺跡が位置し、北に流路を変える付近の段丘上には、横欠遺跡があり、大木８ｂ～ 10式期の集落跡が発掘されている。また、添市川段丘上には、複式炉を持った竪穴住居跡が検出された高畑遺跡や埋設炉を持った竪穴住居跡が発掘された安堵屋遺跡がある。他には豊沢川河岸段丘に位置する万丁目遺跡や北上川の氾濫平野には石持Ⅰ遺跡、似内遺跡などがある。

弥生時代の遺跡は少なく、主に猿ヶ石川の低位段丘上に集中している。谷起島式土器が、高松Ⅱ、安野Ⅱ、成田の各遺跡から出土している。付近には、弥生中期と特定される土器が出土した中野Ｄ遺跡や後期の土器が出土した添市遺跡等がある。遺跡の分布状況から、北上川や猿ヶ石川の低位段丘上を中心に弥生時代の集落が形成されていたことも推定できるが、いずれの遺跡も散布地で、弥生時代の遺構はまだ確認されておらず、今後の発掘調査が待たれる。

古代の遺跡としては、猿沢Ⅱ、古館Ⅱ、高松寺、胡四王山館遺跡等がある。猿沢Ⅱ遺跡は、瀬川の



第3図　周辺の地形分類図



第４図　周辺の遺跡分布図

第１表　周辺の遺跡一覧表

No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物・備考
1	方八丁	城館跡	古代	竪穴住居跡、土師器、須恵器、鉄器、銅、
2	上ノ山館	城館跡・散布地	縄文・古代～中世	縄文土器、石器、土師器、須恵器、銅
3	上ノ山	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
4	山の神	散布地	縄文	縄文土器、石器、土偶
5	海明Ⅰ	散布地	平安	土師器
6	鶴	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
7	狼沢Ⅰ	散布地	古代	土師器
8	狼沢Ⅱ	集落跡	古代	竪穴住居跡、土師器、土錘
9	碧ノ目	城館跡	中世	土器、銅
10	薄沢	包蔵地	古代	土師器
11	下二階	包蔵地	弥生	弥生土器
12	遊子	包蔵地	縄文	縄文土器、石器
13	新屋	包蔵地	縄文・古代	石器、土師器
14	西宮野目	集落跡	縄文	縄文土器、スクレイパー、フレーク
15	先屋	散布地・建物跡	縄文・近世	縄文土器、石臼、コア
16	西中	集落跡	縄文・古代・近世	縄文土器、土師器、須恵器
17	三沼	散布地	古代	土師器
18	石持Ⅱ	散布地	古代	土師器
19	石持Ⅰ	散布地	古代	土師器
20	十二屋	祭祀跡		堀、古銭
21	海明Ⅱ	散布地	古代	土師器
22	柏崎城	散布地・城館跡	近世	
23	馬立Ⅰ	散布地	古代	土師器
24	馬立Ⅱ	散布地	古代	土師器
25	田力中野	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
26	座敷	集落跡	縄文・古代	縄文土器、竪穴住居跡、土師器
27	東野袋	散布地	古代	土師器
28	天下田Ⅰ	城館跡	中世	土塁
29	天下田Ⅱ	包蔵地	縄文	石器
30	松園	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、縄文土器、土師器、須恵器
31	本館Ⅱ	包蔵地	縄文・中世	焼土穴、掘立柱建物跡、郭、堀、溝、陶磁器
32	本館Ⅰ	城館跡・集落跡	縄文・中世	縄文土器、石器、竪穴住居跡、堀
33	本館Ⅲ	集落跡	縄文	焼土穴状遺構、縄文土器、石器
34	沢出	集落跡	縄文・弥生	焼土穴、ピット
35	下東	散布地	古代	土師器、須恵器
36	下西	散布地	古代	土師器、須恵器
37	下仙内	散布地	古代	土師器、須恵器
38	仙内	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、縄文土器、土師器、須恵器
39	上仙内	集落跡・包蔵地	古代	竪穴住居跡、土師器、須恵器
40	我生	集落跡	古代	竪穴住居跡、土師器
41	矢沢古金	集落跡	古代	土師器、須恵器、鉄製鏃
42	上野々	散布地	縄文	石器、石斧
43	添市館	城館跡	中世	堀
44	添市古墳群	古墳群	古墳	
45	上幅	集落跡	縄文・古代	縄文土器、石器、竪穴住居跡、土師器
46	下幅	集落跡	古代	竪穴住居跡、土師器、須恵器
47	十八ヶ城跡	城館跡	中世～近世	堀
48	八幡寺跡	寺社跡	不明	
49	花巻城（馬谷ヶ崎城）	城館跡	中世～近世	堀
50	下小路Ⅱ	包蔵地	古代	土師器
51	下小路Ⅰ	包蔵地	古代	土師器、須恵器
52	東袋Ⅱ	集落跡	古代	土師器、須恵器、土錘
53	梶ノ木Ⅰ	散布地	縄文・弥生	縄文土器、弥生土器
54	梶ノ木Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、石器
55	梶ノ木Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器、須恵器
56	胡四王山館	城館跡・集落跡	古代・中世	竪穴状遺構、郭、土師器、須恵器、砥石
57	火の山	散布地・集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、縄文土器、弥生土器、石器
58	矢沢館Ⅱ	城館跡	中世	堀
59	矢沢館Ⅰ	城館跡	中世	堀、土塁
60	矢沢八幡（古館、矢沢館）	城館跡・集落跡	古代・近世	竪穴住居跡、土師器、須恵器、溝、陶磁器

No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物・備考
61	小松原	散布地	古代	土師器、須恵器
62	経塚森	経塚	古代	土師器、塚
63	寺場	集落跡	古代	竪穴住居跡、土師器、須恵器
64	高松寺跡	廃寺跡	中世	土塔、礎状遺構、弥生土器、古碑
65	鍛ノ本Ⅳ	包蔵地	縄文・古代	縄文土器
66	下通	集落跡	古代、近世	柱穴、土師器、須恵器、近世磁器
67	高木中館	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
68	薬師堂	散布地	縄文	縄文土器
69	上台Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器、竪穴住居跡、土師器
70	上台Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
71	高木古館	城館跡	中世～近世	堀
72	高木岡神社	経塚	不明	塚、白磁瓶
73	上台Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器
74	サイノ神	散布地	縄文	縄文土器
75	久田野Ⅰ	集落跡	縄文	竪穴住居跡、縄文土器、スクレイパー
76	久田野Ⅱ	集落跡	縄文	竪穴住居跡、縄文土器、磨石
77	堀袋Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器
78	高松Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
79	高松Ⅱ	集落跡	縄文・弥生・古代	縄文土器、弥生土器、土師器、竪穴状遺構
80	高松Ⅲ	集落跡	縄文・弥生	縄文土器、弥生土器、石器
81	宮野Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器
82	宮野Ⅱ	集落跡	弥生	弥生土器、石斧
83	宮野Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器
84	中野Ｂ	散布地	縄文	縄文土器、弥生土器、石器
85	中野Ａ	散布地	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器、須恵器
86	中野一里塚	一里塚	近世	塚
87	中野Ｃ	集落跡	縄文・古代	縄文土器、石器、石鏃、土製耳飾、土師器
88	中野Ｄ	散布地	縄文～古代	縄文土器、弥生土器、石器、土師器
89	明ヶ沢	散布地	縄文	縄文土器、石器
90	高松山経塚	経塚・廃寺跡	古代・中世・近世	経塚、竪穴状遺構、土師器、常滑壺、
91	南万ノ目Ⅲ	散布地	古代	土師器、須恵器
92	石神	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器
93	藤沢	散布地	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器
94	拾田屋	包蔵地	縄文	縄文土器
95	下館	城館跡・集落跡	古代・中世	縄文土器、土師器、堀、礫石
96	上諏訪Ⅱ	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、土師器、須恵器
97	上諏訪Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器、須恵器
98	不動Ⅰ	集落跡	縄文・古代	縄文土器、石器、竪穴住居跡、土師器
99	不動Ⅱ	城館跡・集落跡	縄文・古代・中世	竪穴住居跡、土師器、須恵器、堀、土錘
100	桜町Ⅲ	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、土師器
101	桜町Ⅰ	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、土師器
102	桜町窯跡	窯跡	近世	陶磁器、瓦片
103	桜町Ⅱ	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、土師器
104	遠浦水神社	集落跡	縄文	縄文土器
105	上館	城館跡	中世・近世	堀
106	長根Ⅲ	散布地	古代	土師器
107	長根Ⅱ	散布地	古代	土師器
108	長根Ⅰ	散布地	古代	土師器
109	八ツ窪	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、縄文土器、石器、土師器
110	小袋	集落跡	古代	竪穴住居跡、土師器
111	荒屋敷Ⅱ	包蔵地	古代	土師器
112	荒屋敷Ⅰ	集落跡	古代	竪穴住居跡、土師器
113	中道	集落跡・包蔵地	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器、須恵器
114	大沢Ⅱ	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器
115	大沢Ⅰ	集落跡	古代	土師器、須恵器
116	徳興田	集落跡	古代	竪穴住居跡、土師器
117	薬師前	城館跡	中世	郭、堀
118	大木	包蔵地	縄文・古代	縄文土器、石器
119	鵜板	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、縄文土器、土師器、須恵器、石鏃
120	民志田	散布地	縄文	縄文土器
121	長根坂	散布地	縄文	縄文土器、石器
122	中	散布地	古代	土師器

No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物・備考
123	平良木館	城館跡？	不明	堀
124	明戸Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器、石器
125	明戸Ⅱ	集落跡	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器
126	明戸Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器
127	明戸Ⅳ	散布地	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器
128	大谷地Ⅱ	集落跡	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器
129	諏訪Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器、石鏃、石匙
130	実相寺Ⅰ	包蔵地	縄文・古代	縄文土器、土師器
131	諏訪Ⅱ	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、縄文土器、石器
132	実相寺Ⅱ	包蔵地	縄文	縄文土器
133	大谷地Ⅲ	包蔵地	古代	土師器、須恵器
134	富士大学グランド	散布地	縄文	縄文土器
135	山の神Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
136	山の神Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
137	十二丁目中村	散布地	古代	土師器
138	外谷川原	散布地	古代	土師器
139	十二丁目城跡	城館跡	縄文・中世	縄文土器、堀、土塁
140	宿内	散布地	旧石器・縄文	ハンマーストーン、縄文土器、陥し穴、台石
141	神Ⅰ	散布地	古代	土師器
142	神Ⅱ	集落地	古代	竪穴住居跡、土師器
143	小中野	包蔵地	縄文	石匙
144	成田Ⅰ	散布地	古代	土師器、須恵器
145	成田Ⅱ	包蔵地	古代	土師器、須恵器
146	成田Ⅲ	散布地	古代	
147	看和場	流し場跡	近世	
148	大西Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
149	中村	散布地	縄文	縄文土器
150	大西	散布地	縄文	縄文土器
151	馬場田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
152	馬場田	散布地	縄文	縄文土器
153	舘前	集落跡	縄文	縄文土器
154	大西橋Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
155	大西橋	散布地	縄文	縄文土器
156	宿館（八重堀館）	城館跡	中世	土塁、堀
157	宿	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器
158	鮫鳴畑	散布地	平安	土師器
159	高畑Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
160	安場屋敷Ⅱ	散布地	縄文	剥片
161	唐戸崎Ⅲ	散布地	平安	土師器
162	唐戸崎	散布地	縄文	縄文土器
163	唐戸崎Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、土師器
164	飯豊	散布地	縄文	
165	向	散布地	縄文	
166	月館	散布地	平安	
167	下成田	散布地	平安	縄文土器、須恵器
168	成田	散布地	古代	
169	八森館	散布地	古代	
170	二子城	城館跡	中世	堀、空堀
171	堀ノ内	散布地	平安	土師器
172	中宿	散布地	縄文	縄文土器、石鏃、石斧
173	大竹廃寺	寺院跡	平安	土師器、須恵器
174	横山	散布地	中世	
175	風下	散布地	縄文？	縄文土器、土偶、須恵器
176	北成島下西Ⅰ	散布地	縄文？平安	縄文土器、ロクロ使用土師器
177	北成島下西Ⅱ	散布地	縄文？平安	縄文土器、ロクロ使用土師器
178	馬場館（柳岡館）	散布地	中世	帯状遺構、堀
179	長横	散布地	縄文	縄文土器、石器
180	横欠	散布地	縄文	縄文土器、竪穴住居跡、石器
181	高畑	集落跡	縄文	縄文土器
182	坊主	散布地	縄文	縄文土器、竪穴住居跡、石器

参考文献　・岩手県教育委員会　2000.4　『II 12 遺跡台帳』
・花巻市教育委員会　平成16年度版　『花巻市埋蔵文化財包蔵地分布図』

中位段丘上に形成された平安時代の集落跡である。また、ほぼ同時期の古館Ⅱ遺跡は1985年の発掘調査で古代の竪穴住居跡29棟が検出され、似内遺跡からは県内最大級の竪穴住居跡（隅丸方形8.9×8.3m）や東山本では出土例がほとんどない置きカマドが出土している。豊沢川の沖積段丘上には7～9世紀に作られた熊堂古墳群があり、近辺に大規模な集落が存在していたと予想される。

近世の遺跡については、矢沢八幡遺跡から掘立柱建物跡4棟と溝跡1条が検出されている。また、19世紀の窯跡である桜町窯跡があり、陶磁器が焼成されていたという報告がある。

参考・引用文献

岩手県 1976『北上山系開発地域　土地分類基本調査　花巻』

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000『猿沢Ⅱ・高松寺・上駒板遺跡発掘調査報告書』岩文振埋319集

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000『似内遺跡発掘調査報告書』岩文振埋344集

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002『上似内遺跡発掘調査報告書』岩文振埋379集

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003『宮野目方八丁遺跡発掘調査報告書』岩文振埋404集

花巻市教育委員会 2000『花巻市内遺跡発掘調査報告書』

花巻市教育委員会 2001『花巻市内遺跡発掘調査報告書』

花巻市教育委員会 2002『花巻市内遺跡発掘調査報告書』

花巻市教育委員会 2003『花巻市内遺跡発掘調査報告書』

Ⅲ 高木古館遺跡

1 遺跡の立地（第2図）

高木古館遺跡は、遺跡西側を南流する北上川と西側を北流する猿ケ石川に囲まれた標高約 90m の丘陵地に立地し、面積は約 15,000 ㎡余に及ぶ。調査区は、国道 4 号花巻東バイパス建設工事に伴う建設道路路線部分で、東西約 70 m（一部約 180m）、南北約 180m、面積 11,962 ㎡である。

2 基本層序（第4図、写真図版3）

調査区が広範囲であることから数地点で基本土層の確認を行った。後世の削平や盛土等の改変を受けており、また、堆積状況に差異が見られ、場所によって様相は若干異なるが、調査区中央部の尾根付近（Ⅲ B3j）及び西側南斜面（Ⅱ C4a）、北側斜面（Ⅲ B10f）付近の断面を基本土層とした。

Ⅰ層　10YR3/4 暗褐色土　層厚 5 ～ 25 cm　現表土（腐葉土）

Ⅱ層　10YR2/1 黒色土～ 10YR2/3 黒褐色土　層厚　35 cm　旧表土（中世面）

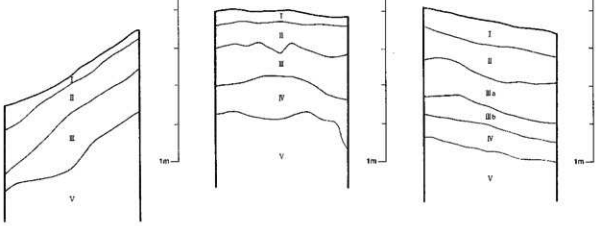
Ⅲ層 a　10YR1.7/3 黒色土～ 10YR2/2 黒褐色土　層厚　40 cm　旧表土（古代面）

Ⅲ層 b　10YR2/1 黒色土　層厚　20 cm　旧表土（古代面）

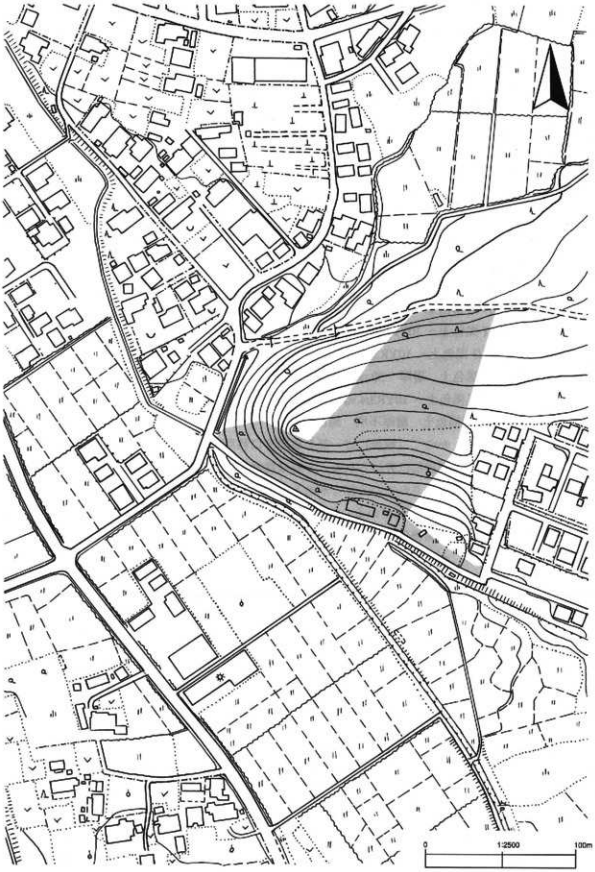
Ⅳ層　10YR2/2 黒褐色土～ 10YR3/4 暗褐色土　層厚　20 cm

Ⅴ層　7.5YR5/8 明褐色土　層厚不明　地山土

遺跡の現況は山林で、かつて（戦後）は一部果樹園等に利用された時期がある。調査区は、大きく北側斜面と南側斜面、尾根頂部に分けられる。Ⅰ層は腐葉土主体の現表土で、尾根頂部付近では削平や盛土等の人為的な作事がなされている部分がある。Ⅱ層は黒褐色土で南北斜面では黒色土で構成される。一部に盛土の作事がなされている。Ⅲ層の黒色土も南北斜面に見られ、火山灰（To － a）の混入がある。Ⅳ層は主に北側緩斜面に観察される。Ⅴ層の層厚は不明であるが、さらにその下部には礫主体の岩盤（稲瀬層）が存在する。基盤層を呈するこの岩盤は、西側南斜面では一部Ⅳ層直下に表出する地点もあり堆積状況も場所により大きく異なる。



第5図　基本土層柱状図



第6図　遺跡周辺の地形図

第７図　現況地形図

3　野外調査と室内整理

（1）野　外　調　査

調査区

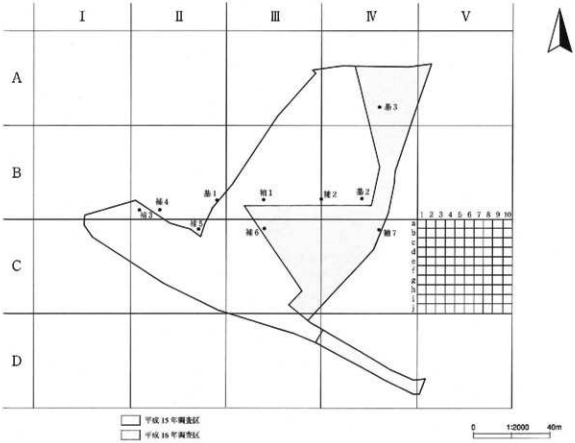
登録されている高木古館遺跡の範囲は、南北約 220 m・東西約 250 m、面積約 1.5 万㎡である。今回調査対象となったのは、国道 4 号花巻東バイパス建設工事によって削平を受ける範囲である。平成 15 年は、当初 10,597 ㎡が対象区域であったが、用地未買収区域を除いた 7,890 ㎡を調査した。翌平成 16 年は、前年度未調査の範囲に東側部分を若干追加した 4,072 ㎡が対象範囲となり、2 ヵ年の合計面積は 11,962 ㎡である。現況は山林と一部の雑居地である。

グリッド設定と基準点（第 8 図、第 2 表）

検出される各種遺構・遺物の座標値を記録するため、調査区を覆う基盤目状のグリッドを設定した。地区割りにあたっては、平面直角座標（第Ⅹ系）に合わせ基準点 3 点、補点 7 点を設定し、これを基準として、調査区に直交するメッシュがかかるようにグリッドを設定した。グリッドの設定に際しては、原点（ⅠA）を北西側隅にして、50 m四方のグリッドに分割した。グリッド名は西から東に向かってⅠ・Ⅱ・Ⅲ…(ローマ数字)、北から南に向かってA・B・C…(アルファベット）とし、それぞれの組み合わせでⅠA、ⅡB…と区画名を付し、区画北西の杭をもってその区画のグリッド名称を表した。また、小グリッドは北西隅を起点に大グリッドを 100 に分割し、東西ラインを算用数字 1 ～ 10、南北ラインをアルファベット小文字 a ～ j とした。

粗掘り・遺構検出

平成 15・16 年度とも事前調査を参考に適宜試掘を行い層序の確認を行ったところ、遺物包含層は



第 8 図　グリッド配置図

第２表　基準杭・区画割付杭一覧表

	X（日本測地系）	Y（日本測地系）	H（標高）	グリッド	X（世界測地系）	Y（世界測地系）
基　1	-68790.000	26895.000	95.924	Ⅱ B10 i	-68481.882	26595.012
基　2	-68790.000	26970.000	94.768	Ⅳ B6 i	-68481.883	26670.011
基　3	-68740.000	26980.000	88.702	Ⅳ A7 i	-68431.883	26680.011
補　1	-68790.000	26920.000	93.261	Ⅲ B5 i	-	-
補　2	-68790.000	26950.000	94.537	Ⅳ B1 i	-	-
補　3	-68795.000	26855.000	91.128	Ⅱ B2 j	-	-
補　4	-68795.000	26865.000	93.742	Ⅱ B4 j	-	-
補　5	-68805.000	26885.000	93.700	Ⅱ C8 b	-	-
補　6	-68805.000	26920.000	94.102	Ⅲ C6 c	-	-
補　7	-68805.000	26980.000	95.488	Ⅳ C7 b	-	-

認められなかった。また、中世面が黒色土もしくは黒褐色土のため遺構の検出が困難を極める状況が判明し、地山層の黄褐色土まで掘り下げて遺構検出作業を進めることにした。調査範囲が広大であることと層序が比較的単純なことから、基本的には重機（バックホー）を使用することとし、比較的平坦な調査区北側の粗掘りを行った。急斜面が多い南側調査区は、人力で粗掘りを行った。両年度とも表土除去後、鋤簾・両刃鎌・移植鏝を用いて遺構検出作業を行った。

遺構の名称（第３表）

検出された遺構の名称は、堀跡、曲輪等の数グリッドにまたがる大型遺構を除いた遺構：竪穴住居跡、陥し穴状遺構、土坑、溝状遺構、炭窯跡については、グリッド毎に検出順に名称を付した。なお、報告に際して遺構毎に連番で名称を変更している。旧遺構名と本報告での遺構名の対応関係は、第３表のとおりである。

遺構精査と遺物の取り上げ

遺構精査は、基本的には竪穴住居跡は、４分法、土坑類は２分法、堀・溝跡は適宜ベルトあるいはトレンチを設定し、覆土の観察を行った。柱穴状ピットは検出面で埋土の土色と土性を記録することとし、掘り下げ中に認められた特記事項を併せて記録した。

遺物の取り上げは、原則として遺構内出土は遺構名と埋土層位を記入し、遺構外出土の遺物については、調査区東側区域・北側斜面等の大まかな区分で行い、出土した層位を記して取り上げ、それぞれ適宜写真撮影・図面作成をしている。

実測・写真撮影

遺構の記録は、主に実測図作成と写真撮影により、作図に表現できないことはフィールドカードに記録している。図面は遺構の平面形、焼土等を記録した平面図、及び、断面形や覆土の堆積状態を記録した断面図を作成した。作図は主に簡易造り方測量を準用し、堀・土塁等の長大な普請的遺構については、光波トランシットを併用した平板測量で行った。現況地形図については写真測量を委託した。作図の縮尺は原則的には１/20とし、堀跡・溝跡は１/40とした。レベルは、基準点をもとに絶対高で測った。写真撮影は、遺構検出時の確認状況、埋土堆積状況、遺物出土状況、完掘状態というように精査の段階ごとに必要に応じて行った。写真撮影は35㎜判のモノクロームとカラーリバーサル各１台、モノクローム６×７㎝判１台を使用した。撮影にあたっては、撮影内容を記載した「撮影カード」を事前に写し、整理時の混乱を防止した。また、遺跡遠景、調査終了全景はラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。

野外調査の経過

（平成15年度）

調査期間は、平成15年度は6月9日～10月24日であり、以下に調査経過を簡単に記す。

6月 9 日(月)　午前10時　資材搬入、現場設営。作業員登録13名。
6月10日(火)　雑物撤去開始(～6月30日)
6月17日(水)　南側急斜面に防護フェンス設置(国土交通省委託　浅母建設)
6月19日(金)　上台Ⅱ遺跡の作業員の7名が合流し、作業員登録20名。
6月23日(月)　上台Ⅱ遺跡終了に伴い、小田内透調査員と作業員7名が合流。作業員登録27名。
6月24日(火)　南側急斜面に防護フェンス設置。
6月30日(月)　写真測量・空撮(株式会社株式会社ハイマーテック)。
7月 1 日(火)　排土捨て場現地立会、試掘・掘削開始。
7月 7 日(月)　重機導入(バックホー1台)～8月8日
7月11日(金)　花巻市教育委員会博物館建設推進室による発掘現場のビデオ撮影
7月14日(月)　キャリアダンプ1台導入
7月22日(火)　基準点測量(株式会社ハイマーテック)、花巻市教委博物館建設推進室ビデオ撮影。
9月10日(水)　花巻市教育委員会博物館建設推進室による発掘現場のビデオ撮影。
10月 1 日(水)　花巻市教育委員会博物館建設推進室による発掘現場のビデオ撮影。
10月 9 日(木)　重機導入～排土捨て場通行路(私道部分)の修復作業。
10月14日(火)　写真測量・空撮(株式会社ハイマーテック)。
10月17日(金)　現地公開(13:00～)見学者12名。花巻市教委博物館建設推進室ビデオ撮影。
10月23日(木)　終了確認(13:30～)。
10月24日(金)　調査終了。14:00資材搬出、撤収。

(平成16年度)

調査の期間は、平成16年度は4月13日～6月30日で、以下に調査経過を簡単に記す。

4月13日(水)　午後1時　資材搬入、現場設営。西澤正晴・阿部徳幸調査員、作業員登録17名。
4月19日(月)　作業員2名増員し、作業員登録19名。
4月21日(水)　重機導入(バックホー・キャリーダンプ各1台　～5/10)。
5月18日(火)　基準杭打設(株式会社ハイマーテック)。
5月25日(火)　高木中館遺跡へ作業員8名移動し、登録作業員11名。
5月26日(水)　防塵ネット取り付け。
6月19日(土)　現地公開(午後1時30分～)　参加者50名。
6月21日(月)　重機導入(バックホー1台　～6/25)。
6月23日(水)　空撮(東邦航空)。
6月28日(月)　終了確認(15:30～)。
6月29日(火)　資材搬出。
6月30日(水)　調査終了。

(2)室内整理

室内整理の期間は、平成15年度が平成15年11月4日～平成16年3月31日、平成16年度が平成16年11月1日～平成17年3月31日である。また、整理に従事した作業員は、平成15年度が11月1名、12月から2名である。平成16年度が1名である。野外作業で得られた遺物、実測図、写真などの各

種資料は、室内整理の段階で次のように処理し、整理を行い、報告書作成とともに資料化を図った。

遺構に関わる記録

実測図は、遺構種別に分類し、図面は点検の上、必要なものについては第二原図を作成し、トレースを行った。撮影されたフイルムはネガアルバムに密着写真と一組にして収納した。カラースライドフイルムはスライドファイルに撮影順に収納した。

遺物の整理

遺物は野外及び当センター整理室で水洗した後、土器や陶磁器、金属製品については、細片は別として遺跡略号・出土地点・層位等を注記した。その後、出土地点・層位ごとに仕分けを行い、接合・復元作業を実施した。石器は製品と未製品、使用痕跡等から仕分け、選別を行い、注記したものはすべて登録した。遺物の実測図は実物大とし、トレースは遺物の状況に応じて実物大あるいは縮小して図化した。石材、火山灰・炭化材の鑑定、金属製品の保存処理は外部の専門家に委託した。遺物の写真撮影は当センターの専門技師２名（福士昭夫・岩間和幸）が撮影を行った。

遺物の選別・図化の基準

遺物の整理・報告に当たっての作業・記録作成は次の方針で進めた。報告書に掲載された遺物は出土したすべてではなく、整理の中で設定した基準を基に選別した一部の資料である。資料の選別基準は以下の通りである。また、資料化は図化・写真がすべてではなく、不掲載資料についても可能な限り数的処理を行い、出土資料全体の傾向を把握するためのデータとした。

土器（縄文土器・弥生土器）　接合と並行して、遺物の選別を進め、接合した土器については、少量

第３表　遺構名称変更表

No	新遺構名	旧遺構名	No	新遺構名	旧遺構名
1	1号竪穴住居跡	03 － SI02	31	1号竪穴住居跡内柱穴01	03 － P15
2	1号陥し穴状遺構	03 － SKT04	32	1号竪穴住居跡内柱穴02	03 － P22
3	2号陥し穴状遺構	04 － SK01	33	1号竪穴住居跡内柱穴03	03 － P35
4	3号陥し穴状遺構	03 － SKT01	34	1号竪穴住居跡内柱穴04	03 － P34
5	4号陥し穴状遺構	04 － SK07	35	1号竪穴住居跡内柱穴05	03 － P25
6	5号陥し穴状遺構	04　SK06	36	1号竪穴住居跡内柱穴06	03 － P33
7	6号陥し穴状遺構	04 － SK05	37	1号竪穴住居跡内柱穴07	03 － P31
8	7号陥し穴状遺構	04 － SK04	38	1号竪穴住居跡内柱穴08	03 － P13
9	8号陥し穴状遺構	03 － SKT02	39	2号堀跡内柱穴01	03 － P07
10	9号陥し穴状遺構	03 － SKT05	40	3号堀跡内柱穴02	03 － P09
11	10号陥し穴状遺構	03 － SKT06	41	2号堀跡内柱穴03	03 － P08
12	11号陥し穴状遺構	04 － SK17	42	3号堀跡内柱穴04	03　P10
13	1号竪穴状遺構	03　SKI01	43	曲輪01	曲輪1
14	1号十坑	03 － SK03	44	曲輪02	曲輪5
15	2号土坑	03 － SK06	45	テラス状遺構01	テラス状平場1
16	3号土坑	04 － SK28	46	テラス状遺構02	テラス状平場2
17	4号土坑	04 － SK29	47	犬走り01	犬走り1
18	5号土坑	04 － SK27	48	犬走り02	犬走り2
19	6号土坑	04 － SK26	49	1号堀跡	SD01（N・S）
20	7号土坑	04　SK25	50	2号堀跡	SD02A（旧）
21	柱穴01	03 － P03	51	3号堀跡	SD02B（新）・SD04
22	柱穴02	03 － P05	52	1号溝跡	SD03
23	柱穴03	03　P23	53	1号炭窯跡	SW01
24	柱穴04	03 － P26	54		
25	柱穴05	03 － P24	55		
26	柱穴06	03 － P16	56		
27	柱穴07	03　P17	57		
28	柱穴08	03 － P29	58		
29	柱穴09	03 － P30	59		
30	柱穴10	03 － P19	60		

であること、復元率が悪かったことから、径3cm以上の破片を図化することを基本とし掲載した。
石器　個々に仕分け・登録・計測・分類を行い、一部の製品については図化を行った。
陶磁器　陶磁器については、近世・近代を除くものを登録した。破片資料が多いことから、残存率を無視して、中世に属する破片はすべてについて実測図・写真・観察表を付し、掲載した。
金属製品　全点登録、図化し掲載した。資料については保存処理を行った。
銭貨　全点計測・登録し、拓影図・写真・観察表を掲載した。
炭化材　一部について樹種同定を行い、樹種名を掲載した。

4　検出遺構と出土遺物

(1) 調 査 の 概 要

発掘調査は平成12年度の試掘調査の結果を受け、2ヵ年にわたるものであった。当初予想していたよりも遺構の規模も小さく密度も少ないものであったが、縄文時代・弥生時代・中世の各遺構と遺物が発見されたことは重要な成果となる。これら遺構の時期については、出土遺物や形態などから時期を判断したものであり、統一された明確な根拠にもとづくものではない。

時代ごとの遺構とその数は次のとおりである。

縄文時代　竪穴住居跡1棟、陥し穴状遺構11基
弥生時代　竪穴状遺構1棟
中世　曲輪2ヶ所、テラス状遺構2ヶ所、犬走り2ヵ所、堀跡3条、溝跡1条
近現代　炭窯跡1基
時期不明　土坑7基、柱穴10個

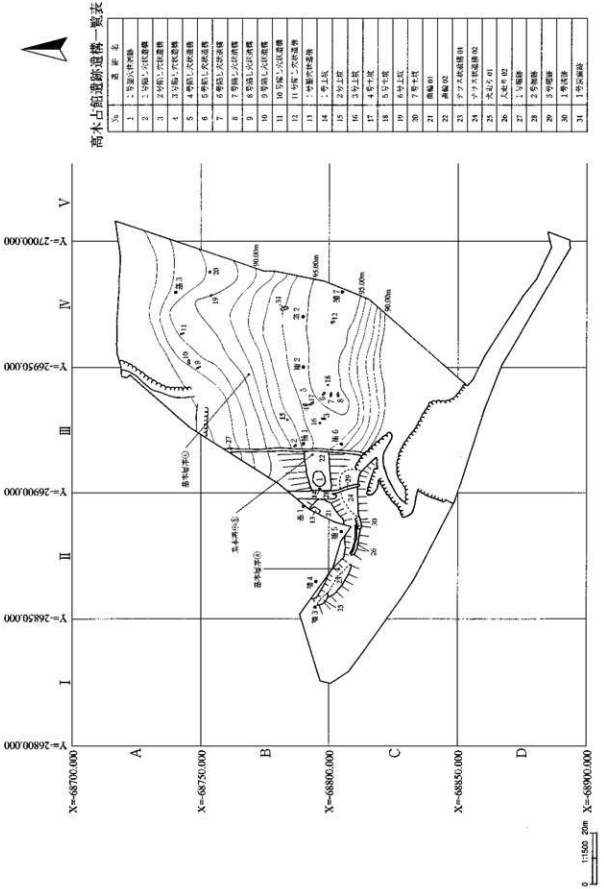
以下では、時代ごとに検出した遺構・遺物について概要を記す。

(2) 縄 文 時 代

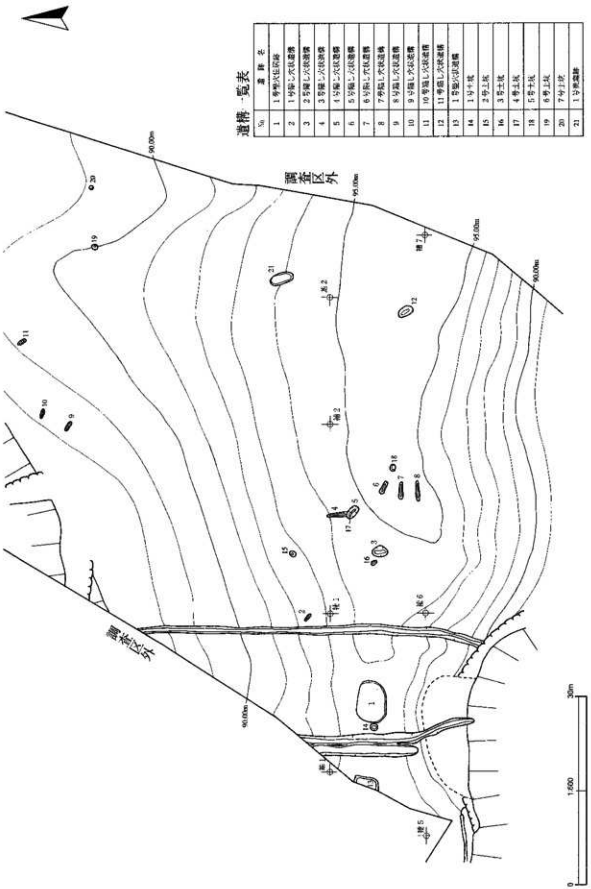
縄文時代に位置づけられる遺構は、竪穴住居跡1棟、陥し穴状遺構11基である。竪穴住居跡は調査区の中央部の尾根頂部で検出された。出土遺物から時期的に縄文時代中期前後と推定される。また、陥し穴状遺構は、調査区中央から東側部分の尾根頂部付近の平坦面から8基、北側緩斜面下の緩斜面から3基の計11基検出した。出土遺物はほとんどないので、詳細な時期決定はできないが、遺構の形状から、他の縄文時代遺跡の調査で多数検出されている陥し穴状遺構に類似するものと判断した。なお、個々の陥し穴状遺構の規模・形状や特長などについては、第4表陥し穴状遺構一覧表に示した。さらに、大部分が調査区外のため時期を想定することが難しいが、出土遺物から縄文～弥生時代のものと思われる竪穴状遺構1棟と時期を特定できなかった土坑7基、柱穴10個についても、この項で報告する。

1) 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（第11・12図、写真図版4）
＜位置・検出状況＞調査区中央部のⅢB～ⅢCグリッドに位置し、検出面はⅤ層面である。本遺構は、Ⅳ層の漸移層を一段（約3cm）掘り下げたところに暗褐色土の落ち込みを確認したが、床面の北側部分、および壁面は大部分が消失している。
＜規模・平面形＞長軸7.15m、短軸4.66m、面積約27㎡で楕円状を呈する。


高木古館遺構一覧表
遺構名
1 竪穴状遺構
2 竪穴状遺構
3 竪穴状遺構
4 竪穴状遺構
5 竪穴状遺構
6 竪穴状遺構
7 竪穴状遺構
8 竪穴状遺構
9 竪穴状遺構
10 竪穴状遺構
11 竪穴状遺構
12 竪穴状遺構
13 竪穴状遺構
14 竪穴状
15 竪穴状
16 竪穴状
17 竪穴状
18 竪穴状
19 竪穴状
20 竪穴状
21 掘立柱
22 掘立柱
23 ピット状遺構
24 ピット状遺構
25 炭化物
26 人造物
27 土坑
28 土坑
29 土坑
30 土坑
31 土坑
X=-68700,000
X=-68750,000
X=-68800,000
X=-68850,000
X=-68900,000
Y=-26800,000
Y=-26850,000
Y=-26900,000
Y=-26950,000
Y=-27000,000
A
B
C
D
I
II
III
IV
V
0 1:500 20m

第９図　遺構配置図



遺構一覧表

No.	遺構名
1	1号竪穴住居跡
2	1号竪穴式住居跡
3	2号竪穴式住居跡
4	3号竪穴式住居跡
5	4号竪穴式住居跡
6	5号竪穴式住居跡
7	6号竪穴式住居跡
8	7号竪穴式住居跡
9	8号竪穴式住居跡
10	9号竪穴式住居跡
11	10号竪穴式住居跡
12	11号竪穴式住居跡
13	1号竪穴式建物
14	1号ピット
15	2号ピット
16	3号ピット
17	4号ピット
18	5号ピット
19	6号ピット
20	7号ピット
21	1号炉跡群

第 10 図　遺構配置図（縄文～古代）

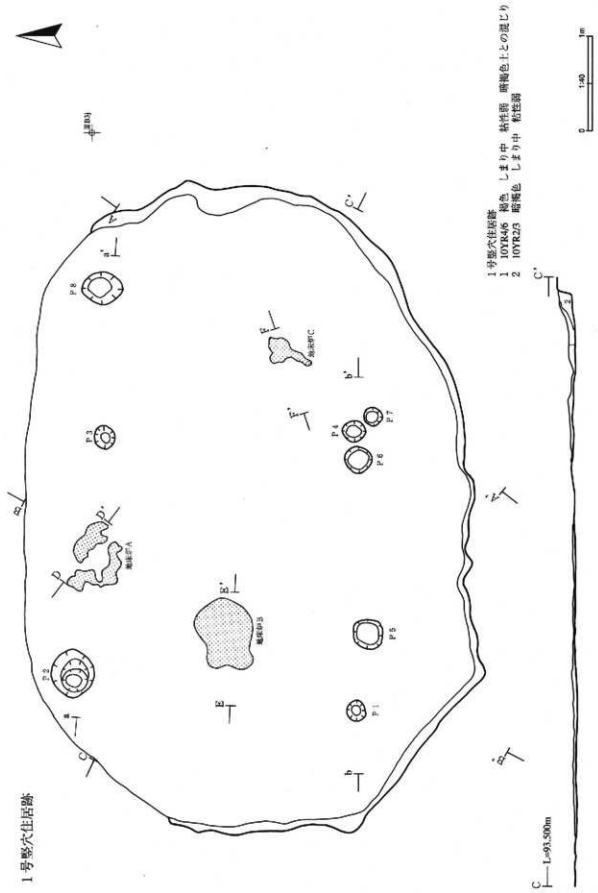
<埋土・堆積状況>埋土は暗褐色土中心で南東側の一部に風倒木による攪乱が見られる。全体的に人為的な削平が見られる。
<壁・床面>壁は削平され、南東側に一部残存しているのみである。形状は外傾して立ち上がり、南側の現存する最大壁高は約 0.17 m、平均は約 0.08 m程度である。床面はⅤ層を掘り込んでつくられ、小さな凹凸が多い。
<柱穴>柱穴は、8 基検出されたが、配置や深さに規則性はないと思われる。
<炉>住居内に 3 基の炉跡を検出した。いずれも不整形で地床炉Aは、75 × 62 ㎝、厚さ 4 ㎝、地床炉Bは、79 × 55 ㎝、厚さ 12 ㎝、地床炉Cは、51 × 27 ㎝、厚さ 6 ㎝である。
<その他の施設>柱穴 05 は重複関係から本遺構よりも新しいと考えられる。
<遺物>住居跡の覆土と炉跡Bの埋土から縄文土器片が出土。また、住居に重複している柱穴 05(P05)の埋土から土師器が出土している。縄文土器（1 ～ 6）はおもに覆土や炉跡から出土し、土師器はP05 埋土から出土している（第 23 図、写真図版 13)。
<時期>出土遺物や遺構形態から縄文時代中期に想定される。

2）陥し穴状遺構

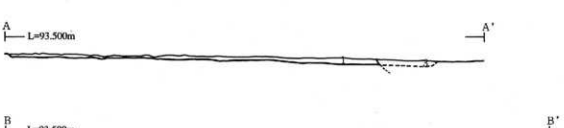
1 号陥し穴状遺構（第 13 図、写真図版 12）
<位置・検出状況>調査区中央からやや北側の緩斜面上位のⅣ A1j に位置し、Ⅳ層で検出された。
<規模・平面形>大きさは、開口部の長軸 1.58 m、幅 0.42 mで、平面形は溝状である。
<埋土・堆積状況>上位は黒褐色土、下位は黄褐色土が主体で、自然堆積の様相を呈する。
<壁・底面>壁はほぼ垂直に立ち上がるが一部フラスコ状を呈する。深さは 0.64 mで底面は西方向に緩く傾斜する。
<重複関係>なし
<出土遺物>なし
<時期>遺構の形状から縄文時代と推定される。

2 号陥し穴状遺構（第 13 図、写真図版 5）
<位置・検出状況>調査区東側の尾根頂部Ⅲ B6i ～ 7i に位置し、Ⅳ層で検出された。
<規模・平面形>大きさは、開口部の長軸 2.74 m、幅 1.62 mで、平面形は溝状である。
<埋土・堆積状況>上位は暗褐色土、下位は暗褐色土から黄褐色土が主体で、自然堆積の様相を呈する。
<壁・底面>壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは 1.66 mで西方向に緩く傾斜する。
<重複関係>なし
<出土遺物>なし
<時期>遺構の形態から縄文時代と思われる。

3 号陥し穴状遺構（第 13 図、写真図版 5）
<位置・検出状況>調査区東側の尾根頂部の北側のⅢ B8h ～ 8i に位置し、Ⅳ層で検出された。
<規模・平面形>大きさは、開口部の長軸 3.64 m、幅 0.56 mで、平面形は溝状である。
<埋土・堆積状況>上位は黒褐色土から暗褐色土、下位は明褐色土が主体で、自然堆積の様相を呈する。
<壁・底面>壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは 0.89 mで北方向に緩く傾斜する。
<重複関係>4 号陥し穴状遺構（4 号土坑）と一部重複する。



第 11 図　1 号竪穴住居跡(1)

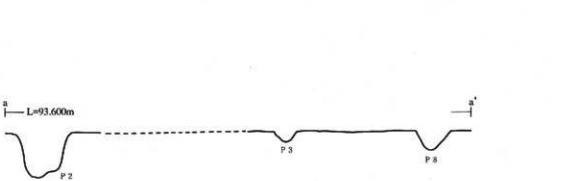


1号竪穴住居跡
1　10YR4/6　褐色　しまり中　粘性弱　暗褐色土との混じり
2　10YR2/3　暗褐色　しまり中　粘性弱
3　10YR2/2　黒褐色　しまり中　粘性弱　風倒木との攪乱

炉跡－A
1　5YR3/6　暗赤褐色　しまり極めて強　粘性弱
2　5YR3/6　暗褐色　しまり極めて強　粘性弱

炉跡－B
1　5YR3/6　暗赤褐色　しまり極めて強　粘性弱
2　5YR3/6　暗褐色　しまり極めて強　粘性弱

炉跡－C
1　5YR3/6　暗赤褐色　しまり極めて強　粘性弱



新番号	旧番号	種　別	位置	形状	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	色　調	備考
P 1	P 13	竪穴住居跡 01	Ⅲ C2a	円	17.0×21.0	9.0×10.0	33.3	92.88	10YR3/4　暗褐色	
P 2	P 15	竪穴住居跡 01	Ⅲ B2j	楕円	44.0×50.0	16.0×14.0	48.0	92.71	10YR2/3　黒褐色	
P 3	P 22	竪穴住居跡 01	Ⅲ B2j	円	21.0×23.0	9.0×10.0	13.7	93.07	10YR3/4　暗褐色	
P 4	P 25	竪穴住居跡 01	Ⅲ C2a	円	29.0×27.0	21.0×19.0	20.8	92.98	10YR2/3　黒褐色	
P 5	P 31	竪穴住居跡 01	Ⅲ C2a	円	31.0×30.0	22.0×22.0	29.1	92.88	10YR3/3　暗褐色	
P 6	P 33	竪穴住居跡 01	Ⅲ C2a	円	25.0×21.0	15.0×　8.0	21.5	92.98	7.5YR4/6　オリーブ褐色	
P 7	P 34	竪穴住居跡 01	Ⅲ C2a	円	19.0×19.0	12.0×11.0	27.8	92.91	7.5YR4/6　オリーブ褐色	
P 8	P 35	竪穴住居跡 01	Ⅲ B3j	楕円	42.0×33.0	24.0×19.0	32.8	92.90	10YR4/6　褐色	

0　1:40　1m

第 12 図　1 号竪穴住居跡(2)

＜出土遺物＞上器（10）が埋土から出土している（第 27 図、写真図版 13）。
＜時期＞出土遺物と形状から縄文時代中期の遺構と思われる。

4 号陥し穴状遺構（第 14 図、写真図版 5）
＜位置・検出状況＞調査区東側の尾根頂部の北側のⅢ B8i に位置し、Ⅳ層で検出された。
＜規模・平面形＞大きさは、開口部の長軸 2.15 m、幅 1.22 mで、平面形は溝状である。
＜埋土・堆積状況＞上位は黒褐色土から暗褐色土、下位は褐色土が主体で、自然堆積の様相を呈する。
＜壁・底面＞壁は緩く湾曲気味に立ち上がる。深さは 1.64 mである。
＜重複関係＞4 号土坑を切り、3 号陥し穴状遺構と一部重複する。
＜出土遺物＞なし
＜時期＞形状から縄文時代と思われる。

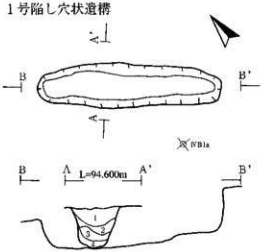
5 号陥し穴状遺構（第 14 図、写真図版 6）
＜位置・検出状況＞調査区東側の尾根頂部Ⅲ B8a ～ 9a に位置し、Ⅳ層で検出された。
＜規模・平面形＞大きさは、開口部の長軸 2.05 m、幅 0.64 mで、平面形は溝状である。
＜埋土・堆積状況＞上位は黒褐色土、下位はにぶい黄褐色土が主体で、自然堆積の様相を呈する。
＜壁・底面＞壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは 0.81 mで底面は西に緩く傾斜している。
＜重複関係＞なし
＜出土遺物＞なし
＜時期＞形状から縄文時代と思われる。

6 号陥し穴状遺構（第 14 図、写真図版 6）
＜位置・検出状況＞調査区東側の尾根頂部Ⅲ C8a ～ 9a に位置し、Ⅳ層で検出された。
＜規模・平面形＞大きさは、開口部の長軸 2.9 m、幅 0.6 mで、平面形は溝状である。
＜埋土・堆積状況＞上位は黒褐色土、下位は褐色土が主体で、自然堆積の様相を呈する。
＜壁・底面＞壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは 0.97 mで底面はやや西に傾斜する。
＜重複関係＞なし
＜出土遺物＞なし
＜時期＞形状から縄文時代と思われる。

7 号陥し穴状遺構（第 15 図、写真図版 6）
＜位置・検出状況＞調査区東側の尾根頂部Ⅲ C8a ～ 9a に位置し、Ⅳ層で検出された。
＜規模・平面形＞大きさは、開口部の長軸 3.45 m、幅 0.57 mで、平面形は溝状である。
＜埋土・堆積状況＞上位は黒褐色土、下位はにぶい黄褐色土が主体で、自然堆積の様相を呈する。
＜壁・底面＞壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは 0.96 mで凹凸は少ない。フラスコ状を呈する。
＜重複関係＞なし
＜出土遺物＞なし
＜時期＞形状から縄文時代と思われる。

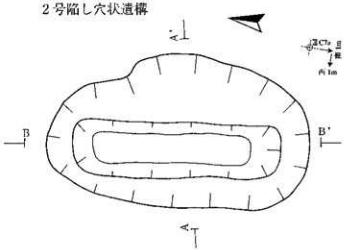
8 号陥し穴状遺構（第 15 図、写真図版 6）

1号陥し穴状遺構



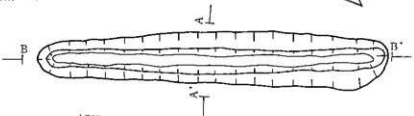
1号陥し穴状遺構
1　10YR2/2　黒褐色　しまりやや強　粘性弱
　　地山粒微量混じる
2　10YR3/3　暗褐色　しまりやや強　粘性弱
　　地山ブロック含む
3　10YR2/2　黒褐色　しまりやや強　粘性弱
4　10YR4/3　にぶい黄褐色　しまりやや強　粘性強

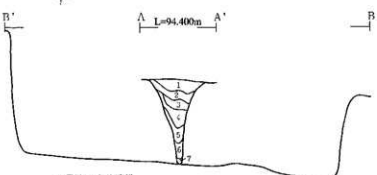
2号陥し穴状遺構



2号陥し穴状遺構
1　10YR3/4　暗褐色粘質　しまり中　粘性中　黄褐粒少量含む
2　10YR3/3　暗褐色粘質　しまりやや強　粘性中　黄褐粒含む
3　10YR5/4　にぶい黄褐色粘質　しまりやや強　粘性中
　　黄褐ブロック多く含む
4　10YR5/6　黄褐色粘質　しまりやや強　粘性やや高
　　暗褐粒・ブロック含む
5　10YR3/3　暗褐色粘質　しまり中　粘性やや強　上位に黄褐粒含む

3号陥し穴状遺構

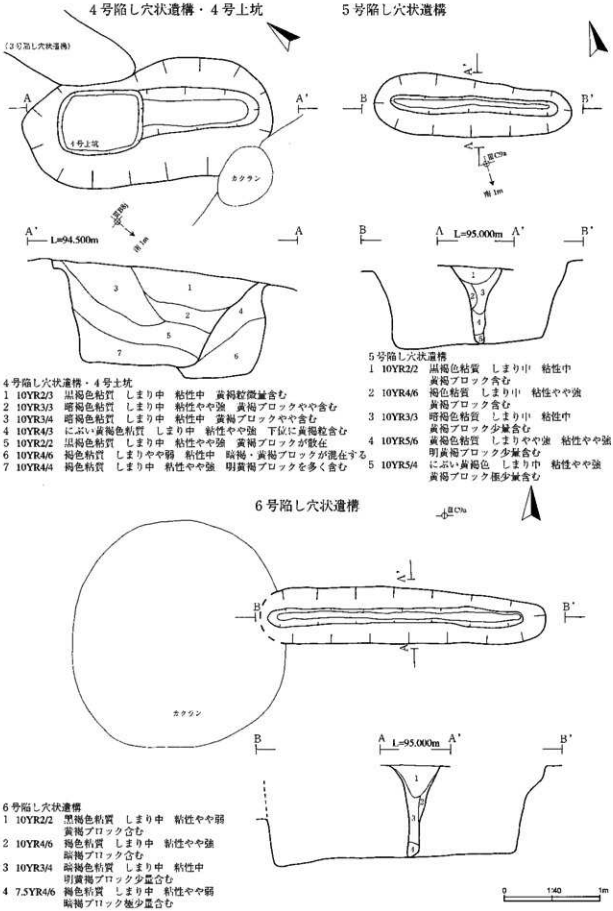




3号陥し穴状遺構
1　10YR2/3　黒褐色　しまり中　粘性高　木根含む
2　10YR3/3　暗褐色　しまり中　粘性高　木根含む
3　10YR3/4　暗褐色　しまり中　粘性高　地山ブロック含む
4　7.5YR4/4　褐色　しまり中　粘性高　暗褐色土混じる
5　7.5YR5/8　明褐色　しまり中　粘性中
6　7.5YR5/6　明褐色　しまり中　粘性中
7　7.5YR6/8　橙色　しまり中　粘性中

0　1:40　1m

第13図　1～3号陥し穴状遺構



第14図　4～6号陥し穴状遺構、4号土坑

＜位置・検出状況＞調査区側の緩斜面中位のⅢΛ 10j ～ⅣA 1j に位置し、Ⅳ層で検出された。
＜規模・平面形＞大きさは、開口部の長軸 1.92 m、幅 0.49 m で、平面形は溝状である。
＜埋土・堆積状況＞上位は黒褐色土、下位はにぶい黄褐色土が主体で、自然堆積の様相を呈する。
＜壁・底面＞壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは 0.42 m で北西に緩く傾斜している。
＜重複関係＞なし
＜出土遺物＞なし
＜時期＞形状から縄文時代と思われる。

9 号陥し穴状遺構（第 15 図、写真図版 7）
＜位置・検出状況＞調査区北側の緩斜面中位のⅣΛ 1j に位置し、Ⅳ層で検出された。
＜規模・平面形＞大きさは、開口部の長軸 1.77 m、幅 0.56 m で、平面形は溝状である。
＜埋土・堆積状況＞上位は黒色土、下位はにぶい黄褐色土が主体で、自然堆積の様相を呈する。
＜壁・底面＞壁はフラスコ状の様相を呈する。深さは 0.57 m で北西方向に緩く傾斜する。
＜重複関係＞なし
＜出土遺物＞なし
＜時期＞形状から縄文時代と思われる。

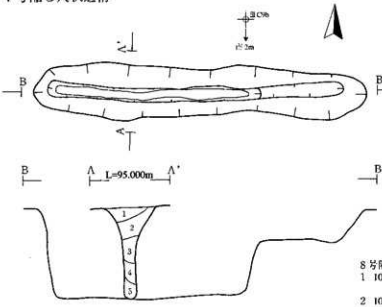
10 号陥し穴状遺構（第 15 図、写真図版 7）
＜位置・検出状況＞調査区北側の緩斜面中位のⅣ A3i に位置し、Ⅳ層で検出された。
＜規模・平面形＞大きさは、開口部の長軸 1.54 m、幅 0.52 m で、平面形は溝状である。
＜埋土・堆積状況＞上位は黒褐色土から暗褐色土、下位は黄褐色土が主体で、自然堆積の様相を呈する。
＜壁・底面＞壁は一部フラスコ状の様相が見られる。深さは 0.67 m で北方向へ緩く傾斜している。
＜重複関係＞なし
＜出土遺物＞なし
＜時期＞形状から縄文時代と思われる。

11 号陥し穴状遺構（第 16 図、写真図版 7）
＜位置・検出状況＞調査区東側の尾根頂部Ⅳ C4a に位置し、Ⅳ層で検出された。
＜規模・平面形＞大きさは、開口部の長軸 2.65 m、幅 1.36 m で、平面形は溝状である。
＜埋土・堆積状況＞上位は暗褐色土、下位は明黄褐色土が主体で、自然堆積の様相を呈する。
＜壁・底面＞壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは 1.64 m である。
＜重複関係＞なし
＜出土遺物＞石鏃（140・141）、スクレイパー（142 ～ 144）が出土している（第 34 図・写真図版 19）。
＜時期＞出土遺物と遺構の形状から縄文時代と思われる。

3）竪穴状遺構

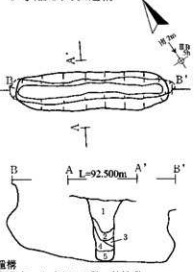
1 号竪穴状遺構（第 16 図、写真図版 7）
＜位置＞調査区中央尾根頂部のⅡ B 9 j グリッドに位置する。
＜規模・形態＞大半が未調査区域にあるためその全容は不明であるが、約 4 m 前後、深さ約 0. 4 m

7号陥し穴状遺構



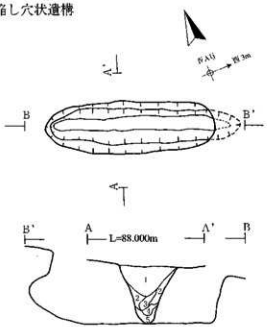
7号陥し穴状遺構
1　10YR3/1　黒褐色粘質　しまり中　粘性中　黄褐ブロック少量含む
2　10YR3/3　暗褐色粘質　しまり中　粘性やや強　下位に明黄褐ブロック含む
3　10YR6/8　明黄褐色粘質　しまり中　粘性中　明褐ブロック少量含む
4　7.5YR4/6　褐色粘質　しまり中　粘性やや強　明褐ブロック少量含む
5　10YR5/4　にぶい黄褐色　しまりやや強　粘性中　褐色ブロックを極少量含む

8号陥し穴状遺構



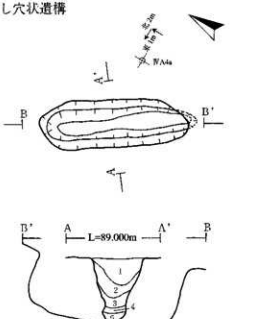
8号陥し穴状遺構
1　10YR2/2　黒褐色　しまりやや強　粘性弱
地山粒混じり　上位に地山ブロック混じる
2　10YR2/3　黒褐色　しまり中　粘性中　地山粒混じり
3　10YR4/6　褐色　しまりやや強　粘性中
4　10YR3/3　暗褐色　しまり中　粘性中
5　10YR5/6　黄褐色　しまりやや強　粘性中

9号陥し穴状遺構



9号陥し穴状遺構
1　10YR2/1　黒褐色　しまりやや強　粘性弱　木根含む
2　10YR3/3　暗褐色　しまり中　粘性弱　地山粒混じり
3　10YR2/3　黒褐色　しまりやや強　粘性弱　地山ブロック含む
4　10YR2/2　黒褐色　しまりやや強　粘性弱
5　10YR4/3　にぶい黄褐色　しまりやや強　粘性やや強

10号陥し穴状遺構



10号陥し穴状遺構
1　10YR2/1　黒色　しまりやや強　粘性弱　地山粒微量　木根含む
2　10YR4/4　褐色　しまり中　粘性弱　黒色土混じり
3　10YR5/6　黄褐色　しまりやや強　粘性やや強
4　10YR4/4　褐色　しまり中　粘性やや強　黒褐色土との混じり
5　10YR4/3　にぶい黄褐色　しまり中　粘性やや強

0　1:40　1m

第15図　7～10号陥し穴状遺構

の隅丸の方形状と推定される。炉跡は確認していない。
<埋土>黒褐色土を中心に6層に細分される。
<出土遺物>縄文時代晩期～弥生時代と考えられる土器片（8・9）が出土している（第27図、写真図版13）。
<時期>出土遺物や遺構の形状から、縄文～弥生時代と推定される。

第4表　陥し穴状遺構一覧表

遺構名	図版	写真	位置（グリッド）	検出層位	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	底部	平面形	断面形	埋土	重複関係	出土遺物
1号陥し穴状遺構	13	5	ⅢD4h	Ⅴ層	158	42	64	151×11	楕状	ピーカー形	4層	なし	なし
2号陥し穴状遺構	13	5	ⅢB6i～7i	Ⅴ層	274	162	166	161×30	楕状	ピーカ・形	5層	なし	なし
3号陥し穴状遺構	13	5	ⅢB8h	Ⅴ層	364	56	89	333×12	楕状	ピーカー形	7層	4号陥し穴状遺構	縄文土器片
4号陥し穴状遺構	14	5	ⅢB8i	Ⅴ層	215	122	164	120×22	楕状	ピ・カ・形	5層	3号陥し穴状遺構	なし
5号陥し穴状遺構	14	6	ⅢB8a～9a	Ⅴ層	205	64	81	161×8	楕状	擂鉢形	5層	なし	なし
6号陥し穴状遺構	14	6	ⅢC8a～9a	Ⅴ層	290	60	97	255×12	楕状	擂鉢形	4層	なし	なし
7号陥し穴状遺構	15	6	ⅢC8a～9a	Ⅴ層	345	57	96	400×10	楕状	擂鉢形	5層	なし	なし
8号陥し穴状遺構	15	6	ⅢA10j～ⅣA1j	Ⅴ層	192	49	42	180×29	楕状	ピーカー形	5層	なし	なし
9号陥し穴状遺構	15	7	ⅣA1j	Ⅴ層	177	56	57	185×14	楕状	擂鉢形	5層	なし	なし
10号陥し穴状遺構	15	7	ⅣA3i	Ⅴ層	154	52	67	139×19	楕状	擂鉢形	5層	なし	なし
11号陥し穴状遺構	16	7	ⅣC4k	Ⅴ層	265	136	164	210×52	楕状	擂鉢形	5層	なし	石器・スクレイパー

4）土坑

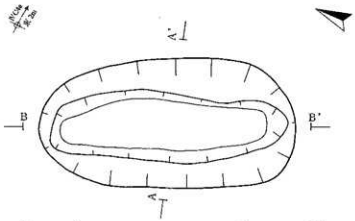
1号土坑（第17図、写真図版8）
<位置>Ⅲ B1g グリッドに位置する。
<規模・形態>長軸1.06 m、短軸0.89 m、深さ0.22 mを測る。形状は円形で椀状の断面を呈する。
<埋土>4層からなる。
<出土遺物>なし
<時期>出土遺物がないので時期を特定できない。

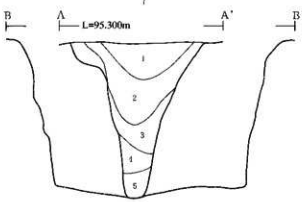
2号土坑（第17図、写真図版8）
<位置>Ⅲ B6g グリッドに位置する。
<規模・形態>長軸1.25 m、短軸0.92 m、深さ0.79 mを測る。形状は円形で擂鉢状の断面を呈する。
<埋土>3層からなる。
<出土遺物>なし
<時期>出土遺物が無く、時期を特定できない。

3号土坑（第17図、写真図版8）
<位置>Ⅲ B6j グリッドに位置する。
<規模・形態>長軸1.02 m、短軸0.83 m、深さ0.64 mを測り、円形を呈し、断面はピーカー状である。
<埋土>黒褐色土主体の3層からなる。
<出土遺物>なし
<時期>出土遺物や関連遺構がないので、時期を特定できない。

4号土坑（第14図、写真図版5）
<位置>Ⅲ B8i グリッドに位置する。
<規模・形態>長軸0.98 m、短軸0.58 mを測り、隅丸方形状を呈する。断面はピーカー状である。

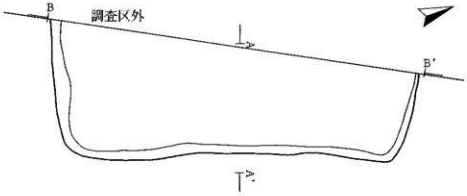
11 号陥し穴状遺構

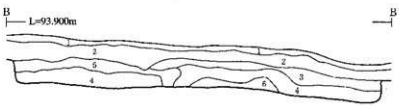




11 号陥し穴状遺構
1　10YR3/4　暗褐色粘質　しまり中　粘性やや弱
　　黒褐ブロック少量含む
2　10YR4/4　褐色粘質　しまり中　粘性中
　　黄褐ブロック少量含む
3　10YR5/6　黄褐色粘質　しまりやや弱　粘性中
　　褐色ブロック・粒含む
4　10YR6/9　にぶい黄褐色粘質　しまりやや弱
　　粘性中　黄褐ブロック少量含む
5　10YR7/6　明黄褐色粘質　しまり中　粘性やや強
　　黄褐ブロック少量含む

1 号竪穴状遺構

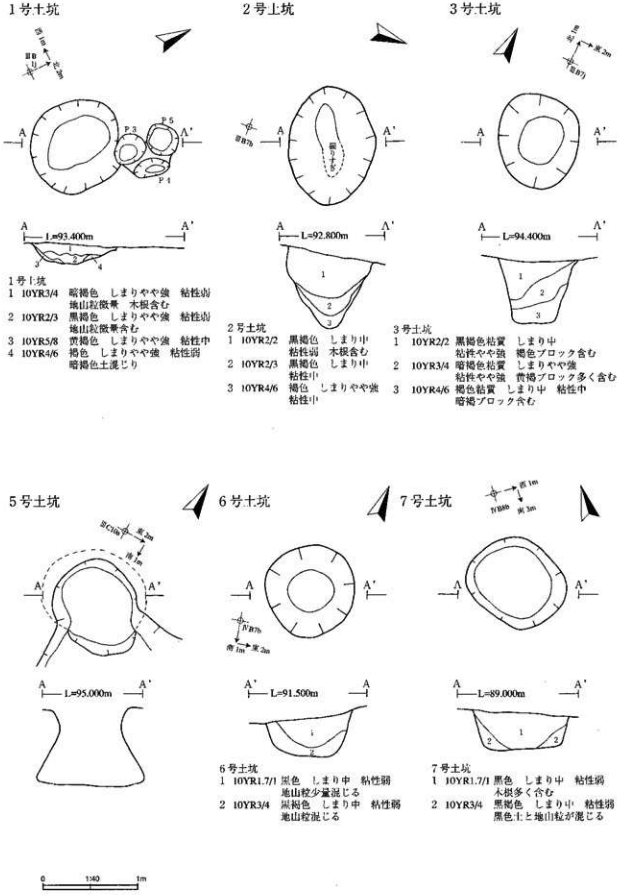




1 号竪穴状遺構
1　10YR3/3　暗褐色　しまりやや強　粘性弱　本根多く含む
2　10YR3/2　黒褐色　しまりやや強　粘性弱　本根含む
3　10YR2/2　黒褐色　しまり中　粘性弱　地山粒微量混じる
4　10YR3/4　暗褐色　しまり中　粘性弱　黒褐色土混じる
5　10YR2/3　黒褐色　しまり中　粘性弱　地山粒混じり
6　10YR2/3　黒褐色　しまりやや強　粘性弱　地山粒混じり

0　1:40　1m

第 16 図　11 号陥し穴状遺構、1 号竪穴状遺構



1号土坑
1　10YR3/4　暗褐色　しまりやや強　粘性弱
　　地山粒微量　木根含む
2　10YR2/3　黒褐色　しまりやや強　粘性弱
　　地山粒微量含む
3　10YR5/8　黄褐色　しまりやや強　粘性中
4　10YR4/6　褐色　しまりやや強　粘性弱
　　暗褐色土混じり

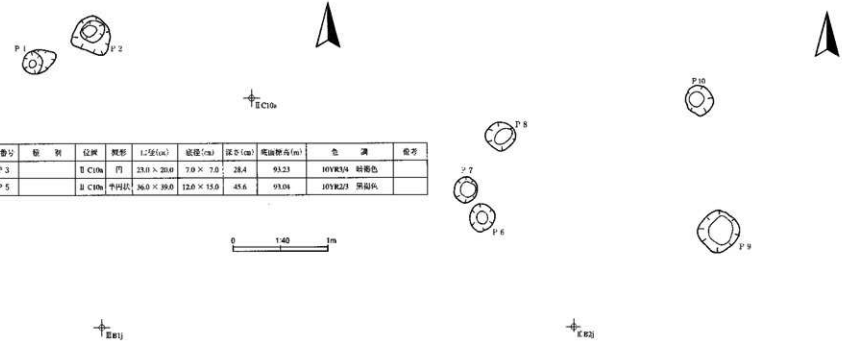
2号土坑
1　10YR2/2　黒褐色　しまり中　粘性弱　木根含む
2　10YR2/3　黒褐色　しまり中　粘性中
3　10YR4/6　褐色　しまりやや強　粘性中

3号土坑
1　10YR2/2　黒褐色粘質　しまり中　粘性やや強　褐色ブロック含む
2　10YR3/4　暗褐色粘質　しまりやや強　粘性やや強　黄褐ブロック多く含む
3　10YR4/6　褐色粘質　しまり中　粘性中　暗褐ブロック含む

6号土坑
1　10YR1.7/1　黒色　しまり中　粘性弱　地山粒少量混じる
2　10YR3/4　黒褐色　しまり中　粘性弱　地山粒混じる

7号土坑
1　10YR1.7/1　黒色　しまり中　粘性弱　木根多く含む
2　10YR3/4　黒褐色　しまり中　粘性弱　黒色土と地山粒が混じる

第 17 図　1～7 号土坑



新番号	旧番号	種　別	位置	平面形	上端径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	色　調	備考
P 1	P 3		Ⅱ C10a	円	23.0 × 20.0	7.0 × 7.0	28.4	93.23	10YR3/4 暗褐色	
P 2	P 5		Ⅱ C10a	半円状	36.0 × 39.0	12.0 × 15.0	45.6	93.04	10YR2/3 黒褐色	

新番号	旧番号	種　別	位置	平面形	上径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	色　調	備考
P 3	P 3		Ⅲ B2j	楕円	29.0 × 25.0	12.0 × 12.0	26.3	92.86	10YR2/3 黒褐色	
P 4	P 5		Ⅲ B2j	円	27.0 × 23.0	13.0 × 15.0	14.1	92.95	10YR2/3 黒褐色	
P 5	P 19		Ⅲ B2j	円	29.0 × 29.0	13.0 × 16.0	22.0	92.74	10YR2/3 黒褐色	
P 6	P 23		Ⅱ B1j	楕円	34.0 × 27.0	19.0 × 16.0	37.9	92.91	10YR2/3 黒褐色	
P 7	P 24		Ⅱ B1j	楕円	38.0 × 18.0	20.0 × 7.0	14.8	93.16	10YR2/3 黒褐色	
P 8	P 26		Ⅱ B1j	楕円	31.0 × 36.0	24.0 × 22.0	18.4	93.10	10YR2/3 黒褐色	
P 9	P 29		Ⅲ B2j	円	28.0 × 31.0	21.0 × 13.0	15.3	92.84	7.5YR4/6 オリーブ褐色	
P 10	P 30		Ⅲ B2j	円	42.0 × 46.0	28.0 × 7.0	43.8	92.72	10YR3/3 暗褐色	

第18図　柱穴

地山を掘り込んで構築される。4号陥し穴状遺構に切られている。逆茂木を立てたと思われるような痕跡らしきもの（副穴状の痕跡）もあるので、陥し穴状遺構の可能性も考えられる。
<埋土>黒褐色土主体の2層からなる。
<出土遺物>なし
<時期>出土遺物はないが、4号陥し穴状遺構との関連から縄文時代の可能性が考えられる。

5号土坑（第17図、写真図版8）
<位置>Ⅲ B9j～Ⅲ C1a グリッドに位置する。
<規模・形態>長軸 1.04 m、短軸 0.9 m、深さ 0.86 mである。フラスコ状を呈する。地山土を掘り込んで構築されている。
<出土遺物>縄文土器片（11・12）がある（第27図、写真図版13）。
<時期>出土遺物から縄文時代と思われる。

6号土坑（第17図、写真図版8）
<位置>Ⅳ B 6a グリッドに位置する。
<規模・形態>長軸が 1.01 m、短軸が 0.95 m、深さが 0.42 mであり、ほぼ円形を呈する。断面は椀状を呈している。
<埋土>黒色土主体の2層からなる。
<出土遺物>なし
<時期>出土遺物や関連遺構がないので、時期を特定できない。

7号土坑（第17図、写真図版9）
<位置>Ⅳ B8a グリッドに位置する。
<規模・形態>長軸 1.05 m、短軸 1.02 m、深さ 0.38 mのほぼ円形を呈する。断面は椀状である。
<埋土>黒色土主体の2層からなる。
<出土遺物>なし
<時期>出土遺物や関連遺構がないので、時期を特定できない。

第5表　土坑一覧表

遺構名	図版	写真	位置（グリッド）	検出層位	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	底部	平面形	断面形	埋土	重複関係	出土遺物
1号土坑	17	8	ⅢB1g	Ⅴ層	106	89	22	73×46	円形	皿形	4層	柱穴06	なし
2号土坑	17	8	ⅢB6g	Ⅴ層	125	92	79	120×79	円形	擂鉢形	3層	なし	なし
3号土坑	17	8	ⅢB6j	Ⅴ層	102	83	64	52×44	円形	ビーカー形	3層	なし	なし
4号土坑	14	5	ⅢD8i	Ⅴ層	98	58	102	98×58	方形	ビーカー形	2層	4号陥し穴状遺構	なし
5号土坑	17	8	ⅢB9i～ⅢC1a	Ⅴ層	104	90	86	110×105	円形	フラスコ形	―	なし	縄文土器片
6号土坑	17	8	ⅢC6a	Ⅴ層	101	95	42	50×46	円形	皿形	2層	なし	なし
7号土坑	17	9	ⅣB8a	Ⅴ層	105	102	38	80×75	円形	皿形	2層	なし	なし

5）柱穴群（第18図）
<位置>ⅡB 10 j Ⅲ～B 1 j グリッドを中心に位置する。
<規模・形態>径 25 ～ 40 cm前後、深さ 15 ～ 40 cm前後で、平面形は円形、断面形はU字形を呈する

ものが多い。
<埋土>黒褐色土主体で単層である。
<出土遺物>なし
<時期>出土遺物がなく、時期を特定できない。

（3）中　　世

1）概要

高木古館遺跡は、西に北上川、東に猿ヶ石川に挟まれた標高約 90 mの丘陵尾根の先端に立地している。館跡は、急斜面の自然地形を利用し、痩せ尾根に２ヶ所の空堀を切って館跡としている。城域の平面積は約 15,000 ㎡である。

遺構は、調査区西側に分布し、主要部分と考えられる曲輪は調査区外にあると予想される。検出された遺構は、曲輪２ヶ所、テラス状遺構２ヶ所、犬走り２ヶ所、堀跡２条、溝跡１条が検出した。尾根頂部の２ヶ所の曲輪は、普請の痕跡は最小限度にとどまり、南側の急斜面はトレンチ調査の結果、普請や作事を行った形跡は見られず、遺構は存在しないと考えられる。テラス状遺構等の配置から自然地形を利用した切岸とも考えられる。また、北側の緩斜面も、人工的な造作の形跡はなく、曲輪として利用された痕跡もなかった。堀跡２条は調査区外に延びている。

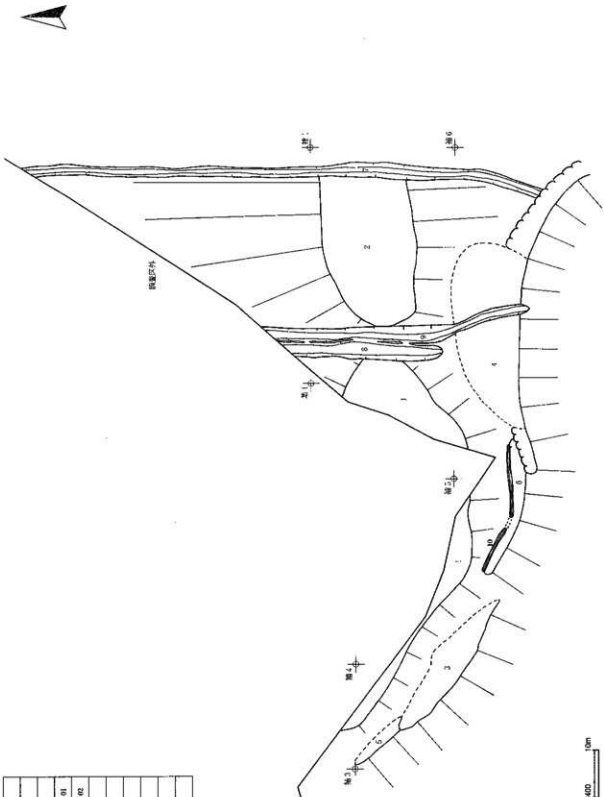
調査前に行われた伐採や搬出等により遺構の一部が攪乱されていることや中世面と古代面の層位の区別が難しいため、Ⅴ層面まで掘り下げて遺構の検出を行った。遺物や検出状況から館跡の時期を明確に 14 世紀以前に遡る資料が得られなかったため、遺構の時期については 15 世紀以降を前提として記載した。

2）曲輪

防備施設として、山の斜面を人工的に削り平坦にした面を曲輪とする。現地踏査や航空写真から推定復元した縄張り図を検討し、２つの曲輪についてその概況を述べる。また、小規模の削平地をテラス状遺構、幅２m前後の通路状の遺構を犬走りとして登録し、併記した。

曲輪 01（第 19 図）
<位置>調査区西側尾根頂部のⅡ B ～Ⅱ C グリッドに位置する。
<規模・形態>長軸約 38 m、短軸 16 m、面積約 455 ㎡で楕円状を呈する。ほぼ東西方向にひろがり、２号・３号堀跡と自然地形による急傾斜で防御される。
<普請>南側斜面が切土され、犬走り 01、テラス状遺構 01 等が普請されている。ほとんどが調査区域外であるため、その全容は不明であるが、丘陵の突端であり、周囲は自然地形を利用した急傾斜であり、尾根頂部下の斜面を切土した普請跡があり、館としての機能を備えていたものと思われる。
<作事>少数の柱穴が検出されたが、対応する柱穴もなく建物跡の可能性は低いと思われる。
<埋土>暗褐色土が主体となって構成される。
<出土遺物>東側のⅡ層（暗褐色土）から土器片（20 ～ 23）、錫杖の先端部分（198）や中国産青磁片（138・139）が出土しているが、本遺構に伴うかは不明である。

曲輪 02（第 19 図）
<位置>調査区中央、尾根頂部のⅢ B グリッドに位置する。



No	遺構名
1	曲輪01
2	曲輪02
3	テラス状遺構01
4	テラス状遺構02
5	大走り01
6	大走り02
7	1号堀跡
8	2号堀跡
9	3号堀跡
10	一号道跡

第19図　遺構配置図（中世）

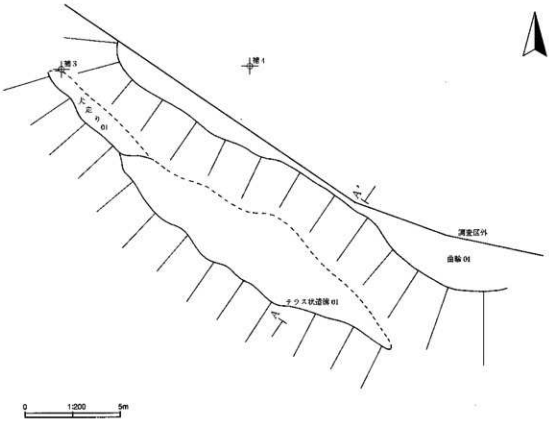
＜規模・形態＞長軸約 15 m、短軸 9 m、面積 147 ㎡で歪んだ隅丸の長方形状を呈する。方向はほぼ東西で、両端を堀切されて、南側斜面は切岸で防御されている。
＜普請＞尾根部分が削平され、南側斜面を切土し、テラス状遺構 02 の盛土に利用している。
＜作事＞少数の柱穴が検出されたが、対応する柱穴もなく建物跡の可能性は低いと思われる検出遺構の竪穴住居跡は縄文時代のものである。
＜埋土＞表土は薄く、削平されたⅡ層（暗褐色土）が主体である。
＜出土遺物＞敲磨器が 1 点（145）出土している。材質は奥羽山脈産の玄武岩質である（第 34 図、写真図版 19）。

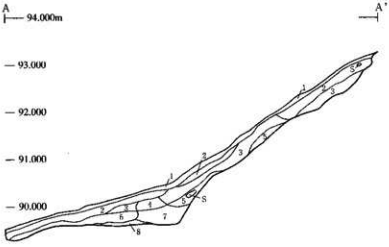
テラス状遺構 01（第 20 図、写真図版 9）
＜位置＞調査区西側ⅡＣに位置する。
＜規模・形態＞長軸 17.3 m、短軸 3.8 m、面積約 41 ㎡で細長い楕円状を呈し、ほぼ東西方向に延びる。曲輪 01 の南側に腰曲輪状に位置し、犬走り 01 と犬走り 02 との中間地点なので、通路としての機能も考えられる。
＜普請＞削平により構築されている。
＜埋土＞暗褐色土が主体である。一部に切岸の崩落土と思われる埋土が堆積している。
＜出土遺物＞なし

テラス状遺構 02（第 21 図、写真図版 9・10）
＜位置＞調査区中央部南側、ⅢＣグリッドに位置する。
＜規模・形態＞長軸 20.2 m、短軸 7.1 m、面積約 114 ㎡で歪んだ半月状を呈し、ほぼ東西方向に延びる。
＜普請＞曲輪 02 を切土したものを盛土して平場を普請した。
＜埋土＞盛土した黒褐色土を中心に 6 層からなる。
＜出土遺物＞覆土から縄文土器片（13 ～ 19）が出土している（第 27 図、写真図版 13）。

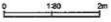
犬走り 01（第 20 図、写真図版 10）
＜位置＞調査区西側、ⅡＢグリッドに位置する。
＜規模・形態＞長軸 6.4 m、短軸 1.1 m、面積約 7 ㎡の長方形状でほぼ東西に延びる。テラス状遺構 01 の西側に位置し、通路等に利用されたと考えられる。
＜普請＞曲輪 01 の南側斜面を切土した平場である。
＜埋土＞暗褐色土主体である。
＜出土遺物＞なし

犬走り 02（第 22 図、写真図版 10）
＜位置＞調査区南側、ⅡＢグリッドに位置する。
＜規模・形態＞長軸 14 m、短軸 1.2 m、面積約 19 ㎡で三日月状を呈し、ほぼ東西に延びる。テラス状遺構 01 から同 02 を結ぶような形で位置し、山際に 1 号溝跡を伴っている。両端部分に攪乱が見られる。
＜普請＞曲輪 01 南側斜面を切土した平場である。
＜埋土＞褐色土主体である。

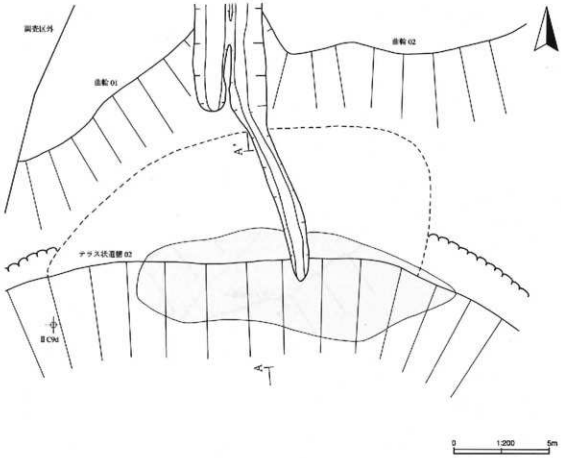


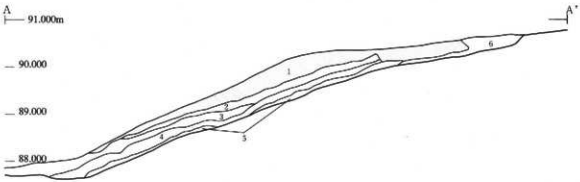


テラス状遺構01
1　10YR3/3　暗褐色　しまり中　粘性弱　現表土　木根混じる
2　10YR3/4　暗褐色　しまり中　粘性弱　木根、砂利混じる
3　10YR2/3　黒褐色　しまり中　粘性弱　砂利、礫混じる
4　10YR4/4　褐色　しまり中　粘性弱　砂利少量混じる
5　10YR4/6　褐色　しまり中　粘性弱　地山土混じる
6　10YR3/2　黒褐色　しまり中　粘性弱　砂利少量混じる
7　10YR3/4　暗褐色　しまり中　粘性弱　岩盤状（崩落し？）
8　10YR4/3　にぶい黄褐色　しまり中　粘性弱　地山土混じり



第20図　テラス状遺構01、犬走り01





テラス状遺構 02
1　10YR4/4　褐色　しまり中　粘性弱　礫・木根含む(盛土)
2　10YR3/1　黒褐色　しまりやや強　粘性弱　砂利微量混じる
3　10YR3/4　暗褐色　しまり中　粘性弱　砂利少量混じる
4　10YR2/3　黒褐色　しまり中　粘性弱
5　10YR3/3　暗褐色　しまり中　粘性弱　地山土混じる
6　10YR5/8　黄褐色　しまりやや強　粘性弱　礫混じる

0　1:80　2m

第 21 図　テラス状遺構 02

＜出土遺物＞なし

3）堀跡・溝跡

堀跡は3条、溝跡は1条を登録した。

1号堀跡（第23図、写真図版10・11）

＜位置＞調査区中央、尾根頂部を南北に延びるⅡB～ⅡCグリッドに位置する。

＜規模・形態＞調査区内での全長約54 m、堀幅1.3～1.5 m、深さ0.3 m前後である。両端は調査区外と後世の攪乱により明確ではないが、尾根を南北に掘り切る形に構築されている。上部が削平されている様子も伺えるが、箱形の空掘の様相を呈する。排水路としての機能を持っていたと思われる。

＜普請・埋土＞地山の褐色土を掘り込んで構築される。

＜出土遺物＞埋土から弥生土器片（24～26）が出土している（第27図、写真図版13）。いずれも周囲からの流れ込みと考えられる。

2号堀跡（第25図、写真図版11・12）

＜位置＞調査区中央、曲輪1と2を区切るⅡBグリッドに位置する。

＜規模・形態＞調査区内での全長約16 m、堀幅1.35 m、深さ0.68 mを測る。尾根を掘り切る形でほぼ南北に延びる。3号堀跡に切られる。時期としては2号の方が旧い。

＜普請・埋土＞地山の褐色土を掘り込んで構築される。箱形の空堀である。

＜出土遺物＞埋土から縄文土器片（27）が出土している（第27図、写真図版13）。

3号堀跡（第25図、写真図版11・12）

＜位置＞調査区中央、曲輪1と2を区切るⅡBグリッドに位置する。

＜規模・形態＞調査区内での全長約27 m、堀幅1.5～1.7 m、深さ0.3～0.7 mを測る。2号堀跡を切る形である。尾根を掘り切る形の箱形の空堀の形状を呈している。南側のテラス状遺構02に通じているので、排水路の役割も果たしていると思われる。

＜普請・埋土＞地山の褐色土を掘り込んで構築される。南側部分はテラス状遺構02の盛土を掘りこんだ暗褐色土2層に大別される。

＜出土遺物＞南側テラス状遺構02の埋土から縄文土器片（28）が出土している（第27図、写真図版13）が、流れ込みと考えられる。

1号溝跡（第22図、写真図版10）

＜位置＞調査区西側の犬走り02内、ⅡCグリッドに位置する。

＜規模・形態＞両端部が削平されるなど、後世の攪乱により残りがよくない。規模は全長約14 m、幅0.1 m、深さ0.1 mである。また、中間部分も約1.5 m埋没している。

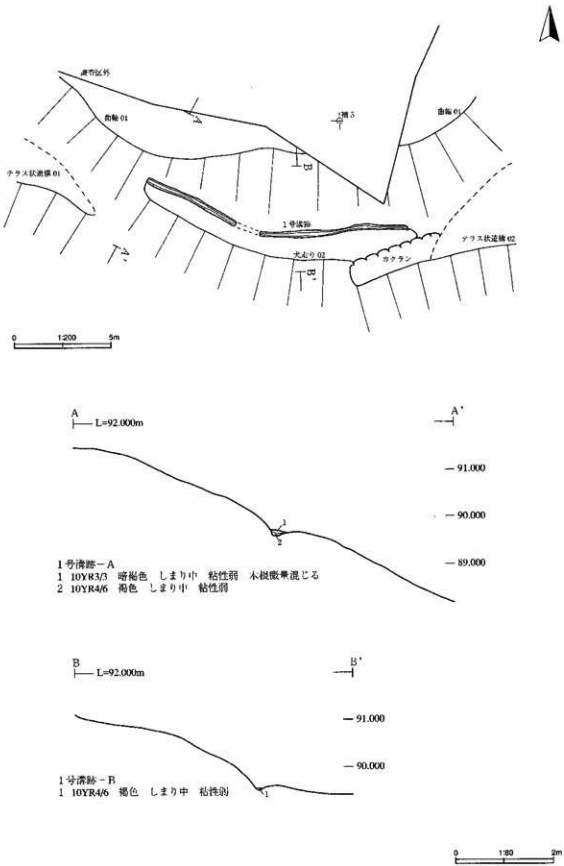
＜普請・埋土＞暗褐色土と褐色土の2層である。

＜出土遺物＞なし

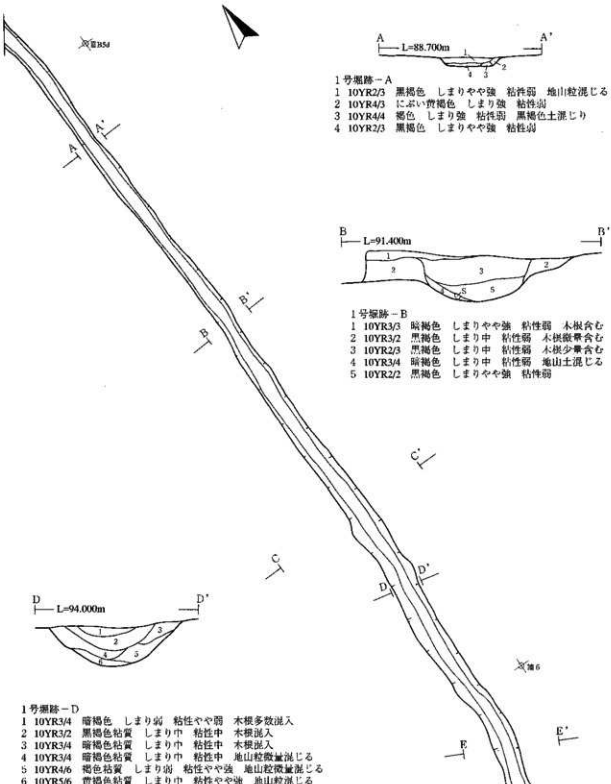
（4）近・現代

1）炭窯跡

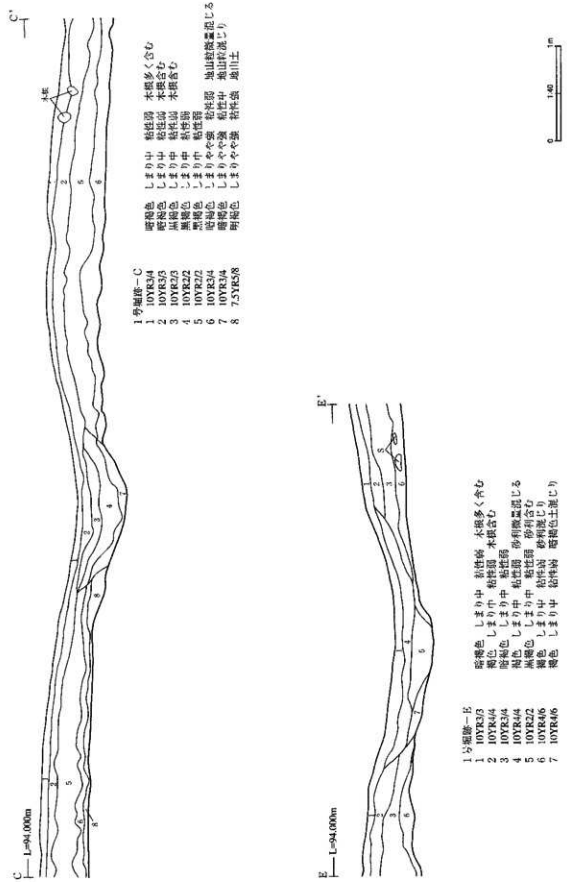
出土遺物もほとんどなく、形状などから近・現代のものと推定される炭窯跡1基を登録した。



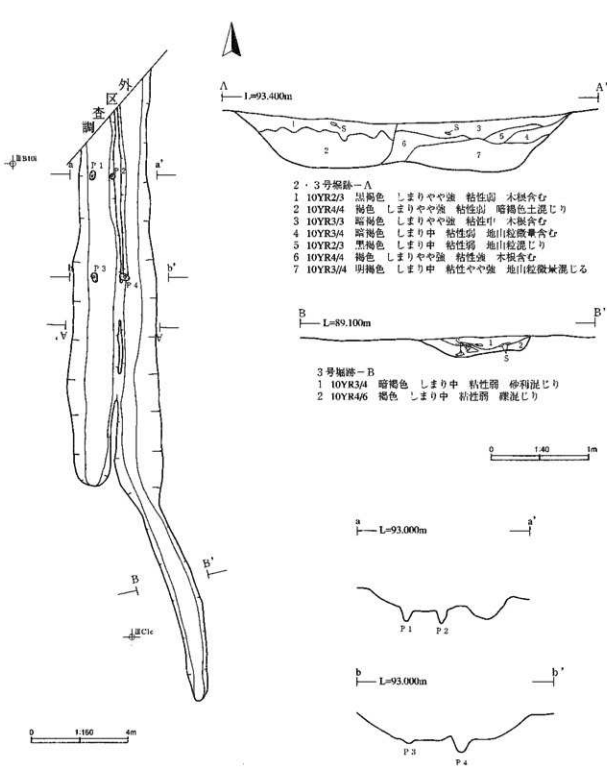
第22図　犬走り02、1号溝跡


A
L=88.700m
A'
1 号堀跡－A
1 10YR2/3 黒褐色 しまりやや強 粘性弱 地山粒混じる
2 10YR4/3 にぶい黄褐色 しまり強 粘性弱
3 10YR4/4 褐色 しまり強 粘性弱 黒褐色土混じり
4 10YR2/3 黒褐色 しまりやや強 粘性弱
B
L=91.400m
B'
1 号堀跡－B
1 10YR3/3 暗褐色 しまりやや強 粘性弱 木根含む
2 10YR3/2 黒褐色 しまり中 粘性弱 木根繊維含む
3 10YR2/3 黒褐色 しまり中 粘性弱 木根少量含む
4 10YR3/4 暗褐色 しまり中 粘性弱 地山土混じる
5 10YR2/2 黒褐色 しまりやや強 粘性弱
D
L=94.000m
D'
1 号堀跡－D
1 10YR3/4 暗褐色 しまり弱 粘性やや弱 木根多数混入
2 10YR3/2 黒褐色粘質 しまり中 粘性中 木根混入
3 10YR3/4 暗褐色粘質 しまり中 粘性中 木根混入
4 10YR3/4 暗褐色粘質 しまり中 粘性中 地山粒微量混じる
5 10YR4/6 褐色粘質 しまり弱 粘性やや強 地山粒微量混じる
6 10YR5/6 黄褐色粘質 しまり中 粘性やや強 地山粒混じる
0 1:40 1m
(断面)
0 1:200 5m
(平面)

第 23 図　1 号堀跡(1)

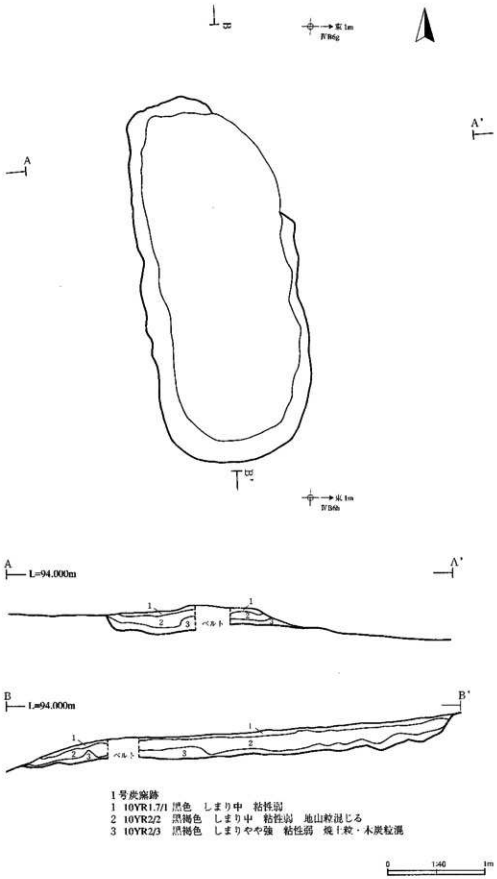

C
C'
L=94.000m
大木
1号堀跡—C
1 10YR3/4 暗褐色 しまり中 粘性弱 木根多く含む
2 10YR5/3 暗褐色 しまり中 粘性弱 木根含む
3 10YR2/3 黒褐色 しまり中 粘性弱 木根含む
4 10YR2/2 黒褐色 しまり中 粘性弱
5 10YR2/2 黒褐色 しまりやや 粘性弱
6 10YR3/4 暗褐色 しまりやや強 粘性弱 地山粒子混じる
7 10YR3/4 暗褐色 しまりやや強 粘性中 地山粒土混じり
8 7.5YR3/8 暗褐色 しまりやや強 粘性強 地山土
E
E'
L=94.000m
1号堀跡—E
1 10YR3/3 暗褐色 しまり中 粘性弱 木根多く含む
2 10YR4/4 褐色 しまりやや 粘性弱 木根含む
3 10YR3/4 暗褐色 しまり中 粘性弱
4 10YR4/4 褐色 しまりやや 粘性弱 砂利粒子混じる
5 10YR2/2 黒褐色 しまりやや 粘性弱
6 10YR4/6 黄褐色 しまりやや 粘性弱 砂利粒子
7 10YR4/6 黄褐色 しまり中 粘性弱 暗褐色土混じり
0
1:40
1m

第 24 図　1 号堀跡(2)



所蔵号	図番号	種　別	位置	概形	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	底部標高(m)	色　調	備考
P 1	P 8	堀跡 02	Ⅲ B8j	楕円	37.0 × 29.0	7.0 × 7.0	14.2	92.42	10YR2/3　黒褐色	
P 2	P 9	堀跡 03	Ⅲ B8j	楕円	29.0 × 43.0	10.0 × 10.0	41.2	92.13	10YR2/3　黒褐色	
P 3	P 10	堀跡 02	Ⅲ B8j	楕円	33.0 × 22.0	5.0 × 5.0	21.4	91.88	10YR2/3　黒褐色	
P 4	P 11	堀跡 03	Ⅲ B8j	楕円	24.0 × 21.0	8.0 × 7.0	28.2	91.85	10YR2/3　黒褐色	

第25図　2・3号堀跡



1号炭窯跡
1　10YR1.7/1 黒色　しまり中　粘性弱
2　10YR2/2　黒褐色　しまり中　粘性弱　地山粒混じる
3　10YR2/3　黒褐色　しまりやや強　粘性弱　焼土粒・木炭粒混

第26図　1号炭窯跡

1号炭窯跡（第26図、写真図版12）

<位置>調査区東側Ⅳ B 5 h グリッドに位置する。

<規模・形態>長軸3.91 m、短軸1.65 m、深さ0.37 m、面積5.7 ㎡で、ほぼ南北に延びる隅丸の方形状を呈する。

<普請>地山褐色土を掘り込んで構築されている。

<埋土>表面は黒色土、その下が黒褐色土2層、併せて3層からなる。

<時期>形状や出土炭化物の状況から近・現代ものと考えられる。

（5）出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物には、縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、陶磁器、金属製品、銭貨がある。いずれも量が少なく、総量は大コンテナ（40 × 30 × 30 ㎝）で2.5箱分程度である。登録点数は、土器が138点、石器56点、磁器2点、金属製品2点、銭貨2点の合計200点である。出土遺物の掲載方法であるが、遺構内出土と遺構外出土に分け、土器は時期ごとに分類した。石器については、器種ごとに分類し掲載した。取り上げ時の不備のため詳細な記録がないものもある。以下、種別ごとに概観する。

1）土器（第27～33図、写真図版13～18）

ほとんどの土器は遺構外から出土し、縄文土器・弥生土器が大コンテナ（40 × 30 × 30 ㎝）でおよそ1.5箱分（総重量13,836 g）出土した。完形個体に復元できたものはなく、接合率も悪く、破片資料が多いため、残存状況によらず特徴的なものを登録し掲載した。

出土状況　重量比でみると、遺構内1,584.4 g（11.4%）である。遺構種別では、住居跡455.9 g（3.3%）、陥し穴状遺構116.6 g（0.8%）、竪穴状遺構34.3 g（0.2%）、曲輪227.5 g（1.6%）、テラス状遺構528.1 g（3.8%）、堀跡213.7 g（1.5%）、炭窯跡8.3 g（0.05%）でテラス状遺構と住居跡の占める割合が高い。地点別では、縄文・弥生土器は調査区中央の尾根頂部付近から北側緩斜面での出土が多く、土師器・須恵器類はテラス状遺構02の斜面に出土のまとまりが見られる。

接合状況　調査精度と整理期間の問題もあり、一概にいえないが、ほとんどが出土した地点もしくは隣接の地点（グリッド）で接合している。

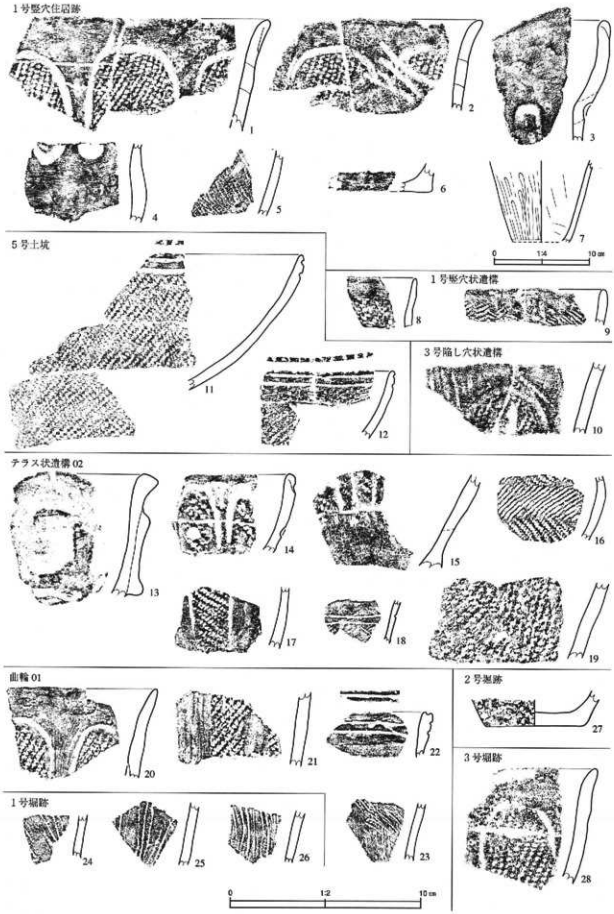
胎土　時期的に概観すると、縄文前期の土器の胎土には砂・礫や植物繊維の混入が見られるのに対し、縄文中期～晩期の土器になるにつれて砂・礫の混入が少なく、緻密になる。

遺構内出土土器は縄文中期から弥生後期のものが多い。縄文中期は大木10式（1・2・10・13・14・19・20・28）、縄文晩期は大洞C1式（11・12）、弥生土器の大部分（22～26）は、撚糸状文が縦位に施文されたものが多く、弥生後期のものと思われる。

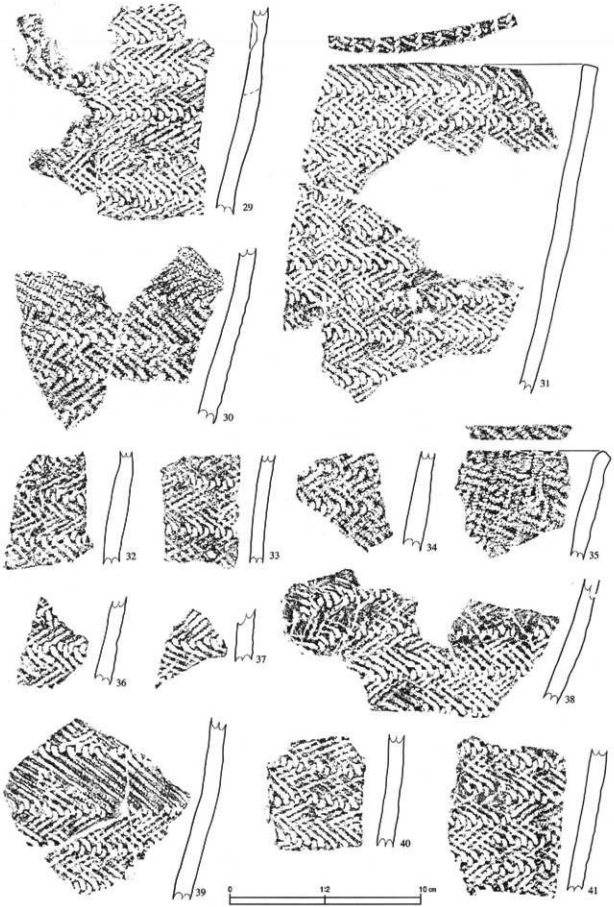
遺構外出土土器は、調査区中央から東側の尾根頂部の平坦地から北側緩斜面とテラス状遺構02付近に多く出土している。結束状の羽状縄文が見られる大木2 a式（29～31など）は調査区東側の北緩斜面に多く、縄文中期（54・55など）や縄文晩期（73）、土師器（125・128など）・須恵器（137）はテラス状遺構02付近に出土が多い傾向が見受けられる。

2）石器（第34～41図、写真図版19～23）

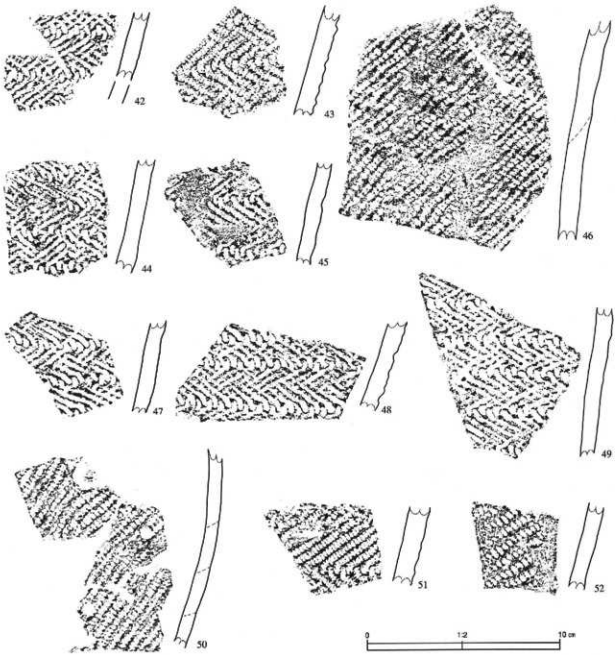
石器は、およそ大コンテナ（40 × 30 × 30 ㎝）1箱分（総重量19,797.35g）が出土している。出土地点は土器同様、調査区中央の尾根頂部から北側の緩斜面に広く分布している。出土地点からは同様



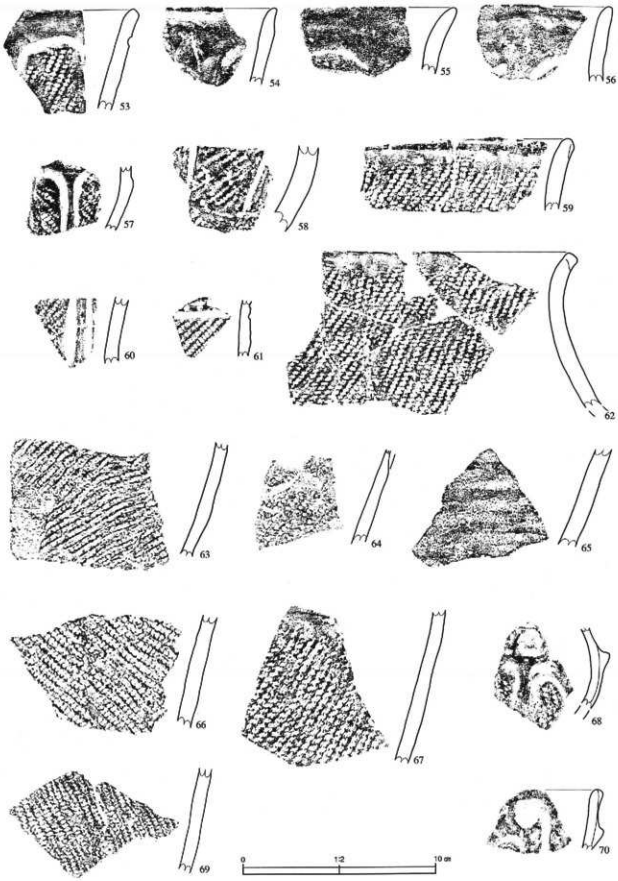
第27図　遺構内出土土器



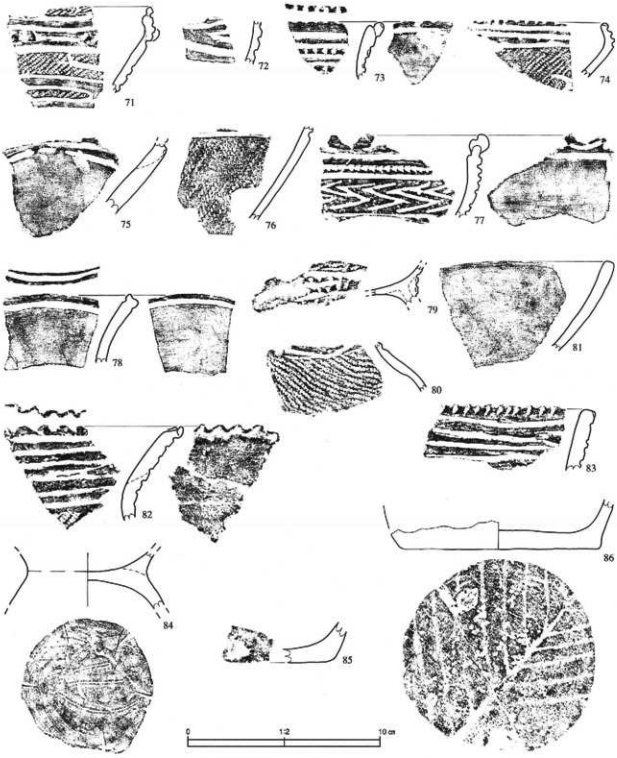
第28図　遺構外出土土器1（縄文前期）



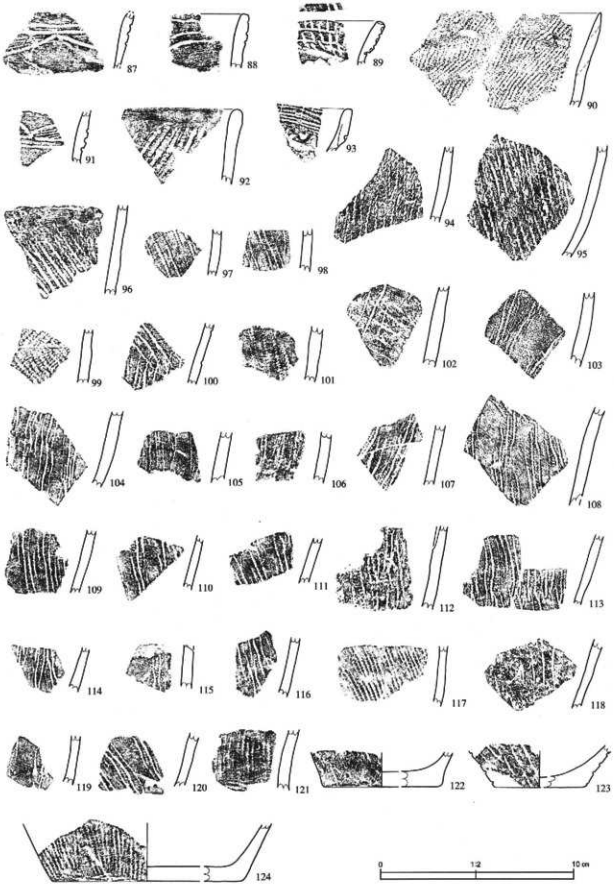
第 29 図　遺構外出土土器 2（縄文前期）



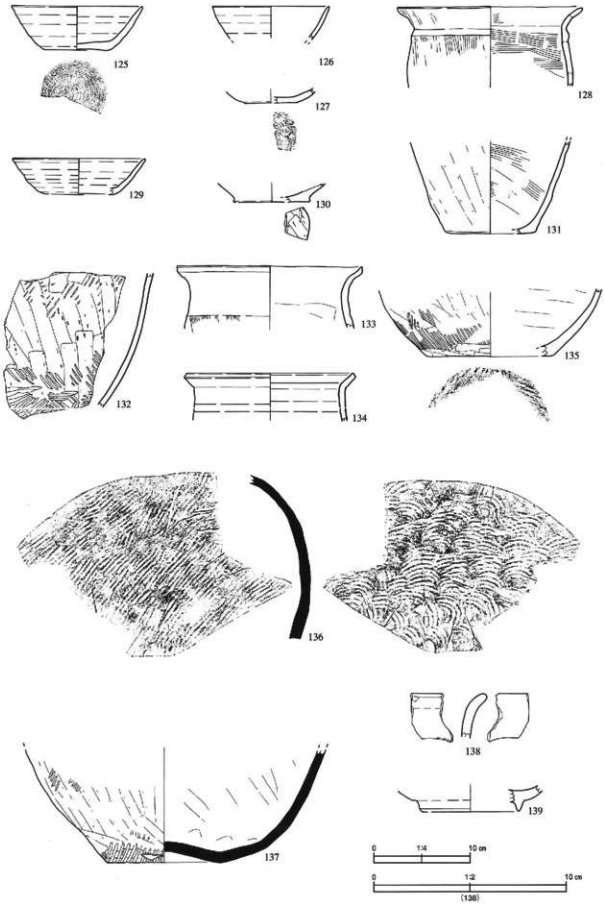
第 30 図　遺構外出土土器 3（縄文中期）



第31図　遺構外出土土器4（縄文晩期・時期不明）



第 32 図　遺構外出土土器 5（弥生時代）



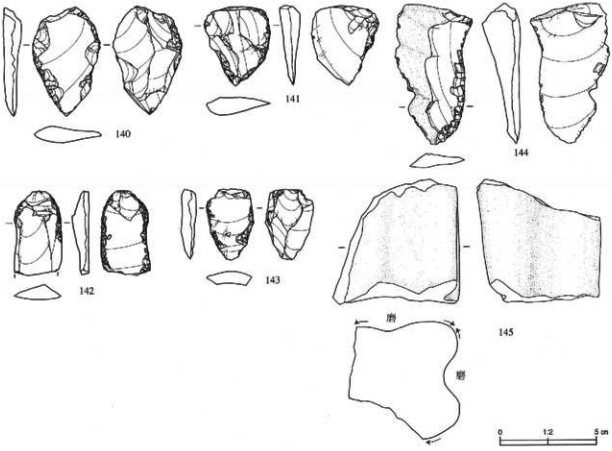
第 33 図　遺構外出土土器 6（古代以降）

に縄文前期以降の土器も出土していることを鑑み、所属時期を縄文前期以降のある程度の時期幅を持って捉えたい。出土した石器は、ほとんどが剥片（重量比 64.8%）で、次に自然礫（19.5%）、石核（6.3%）、敲磨器類（5.6%）、スクレイパー（2%）、砥石（0.7%）、両面調整石器（0.5%）、石錐（0.3%）となっており定型石器は少ない。出土した石器の総数は 460 点余りで、そのうち、トゥールとして認定したのは 53 点であり、図示している。なお、剥片や石核の一部は合計重量のみを表示するのみにとどめた。内訳は、石鏃 2 点（無柄平基）（3.8%）、石匙 1 点（1.9%）、石錐 6 点（11.3%）、スクレイパー 23 点（43.4%）、敲磨器類 3 点（5.7%）、砥石 1 点（1.9%）、石核 14 点（26.4%）、両面調整石器 2 点（3.8%）、楔形石器 1 点（1.9%）である。器種ごとに材質をみると、石鏃は 2 点とも頁岩で、石匙・石錐はどちらも頁岩である。スクレイパーのうち 1 点は珪質頁岩で他は頁岩である。敲磨器類はホルンフェルスが 1 点と安山岩が 2 点からなる。砥石は玄武岩、石核 14 点のうち 1 点は凝灰岩で他は頁岩、両面調整石器、楔形石器 1 点もそれぞれ頁岩を素材としている。

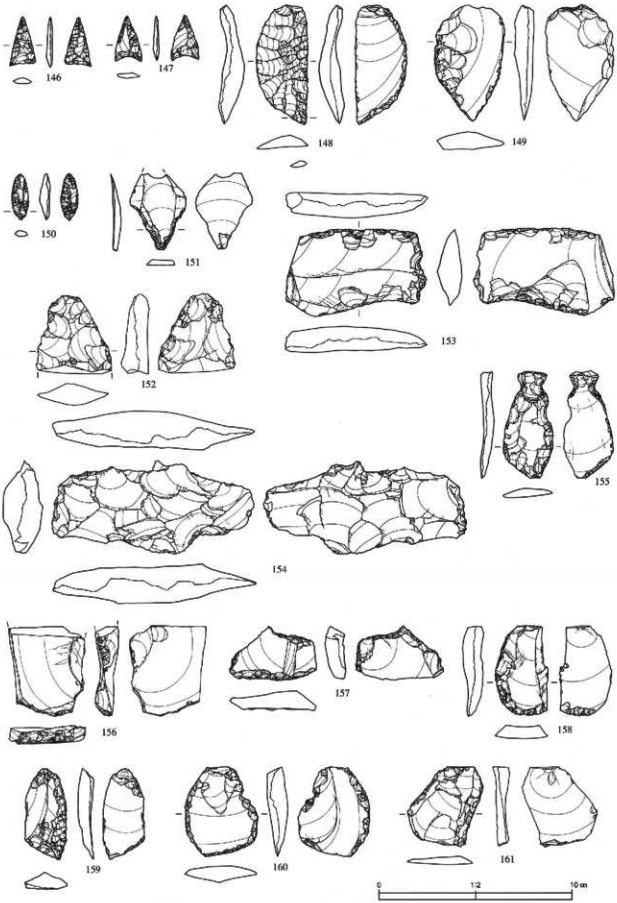
石材産地は、奥羽山脈産の頁岩が最も多く重量比 65.9% を占める。次いで北上高地産のハンレイ岩が 11.8%、同じくホルンフェルスが 6.6%、奥羽山脈産のデイサイトが 5.4%、安山岩が 3.7%、凝灰岩が 3.4%、玄武岩 0.7% となっている。頁岩のごくわずかに北上高地産のものもある。

3）陶磁器（第 33 図、写真図版 18）

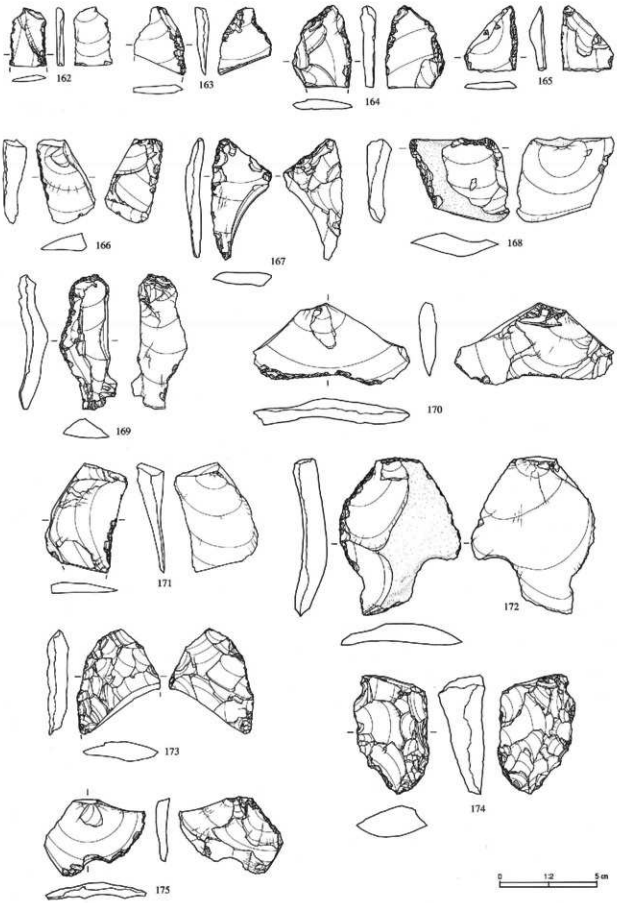
陶磁器は 8 点出土し、あきらかに近現代の陶器と思われる 6 点を除いた 2 点を登録し掲載した（138・139）。この 2 点は、調査区中央、曲輪 01 東端付近から出土したもので、時期は 15 世紀中頃と推定される中国（北宋）産の青磁である。器種は皿か碗と思われる。



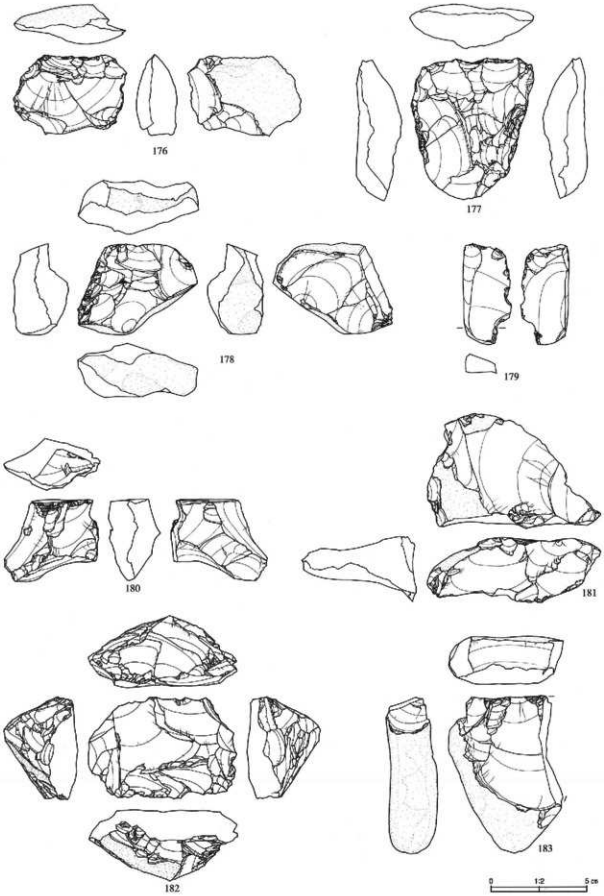
第 34 図　遺構内出土石器



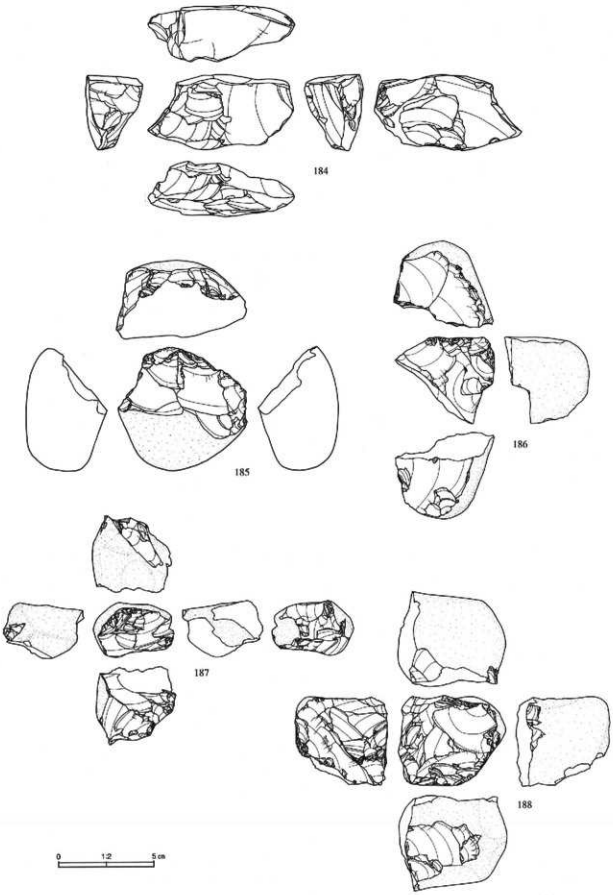
第35図　遺構外出土石器1



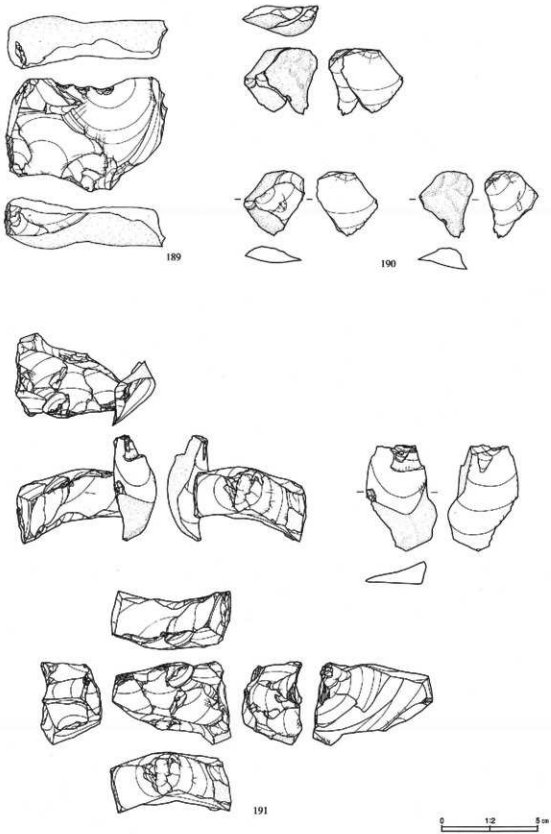
第 36 図　遺構外出土石器 2



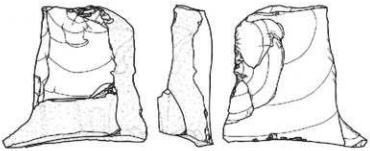
第37図　遺構外出土石器3

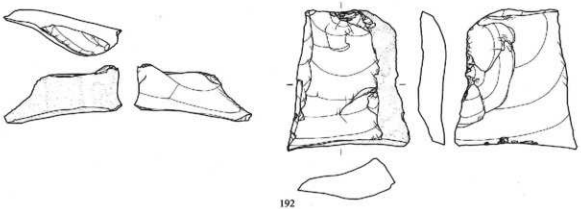


第 38 図　遺構外出土石器 4

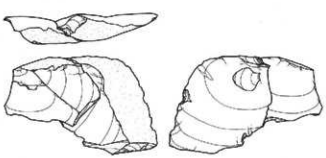


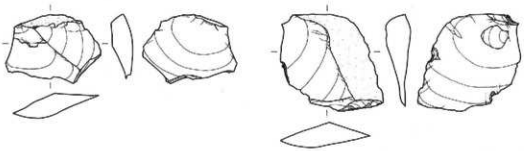
第39図　遺構外出土石器5



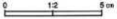


192

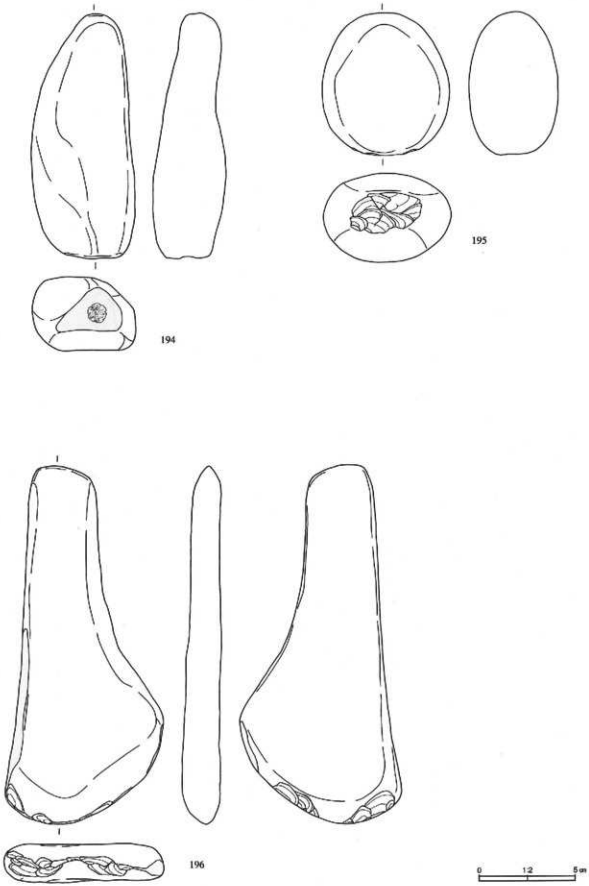




193



第40図　遺構外出土石器6



第41図　遺構外出土石器7

4）金属製品（第42図、写真図版23・24）

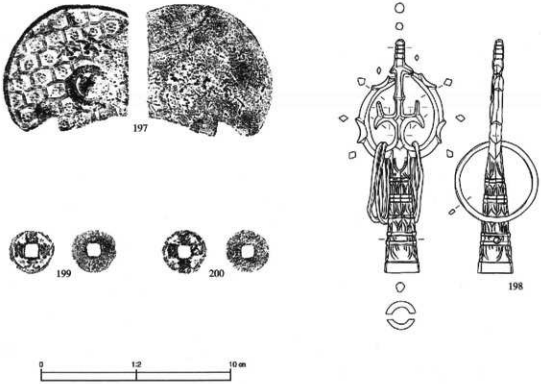
2点出土し、そのすべて登録し、掲載した（197･198）。いずれも銅製品で密教用具の錫杖と鏡（亀甲地双鳥文鏡）である。どちらも曲輪01の東端付近からの出土である。

5）銭貨（第42図、写真図版24）

銭貨は2点出土し、登録掲載した（199・200）。調査区西側の南斜面からの出土である。銭種は199が熙寧元寶であり、初鋳1068年、北宋で作られたものだが、真贋の判別はできなかった。200は腐食が進み判読不能である。

6）炭化材

炭化材は、Ⅳ B 5 hグリッドの炭窯跡01の埋土内のものである。炭窯跡が現代のような形跡があるので掲載を除外した。出土した炭化材片について樹種同定を行った結果、コナラかミズナラであり、当地方では木炭によく利用される樹木であることが判明した。



第42図　金属製品・銭貨

5 総　　括

遺構

平成15年度から平成16年度の2ヵ年にわたる高木古館遺跡の発掘調査で得られた遺構は、縄文時代と考えられる竪穴住居跡1棟、陥し穴状遺構11基、時期不明の竪穴状遺構1棟、土坑7基、炭窯跡1基、中世の普請事業である曲輪2ヶ所、テラス状遺構（犬走り状遺構を含む）4ヶ所、堀跡（溝跡含む）4ヶ所がある。

①縄文時代の遺構について

竪穴住居跡が検出されたが、後世の削平を受け残存状態は、悪かった。1棟だけの検出であり一時的な集落ではなかったかと推察される。また、陥し穴状遺構が検出されたことにより、狩猟場としての性格も確認された。平坦地にほぼ同一軸方向に位置し、形態的には溝状が多く、一部楕円状も見られる。占地は竪穴住居跡が調査区中央の尾根頂部、陥し穴状遺構が調査区中央部から東側の緩斜面に位置している。

②中世城館の縄張りについて

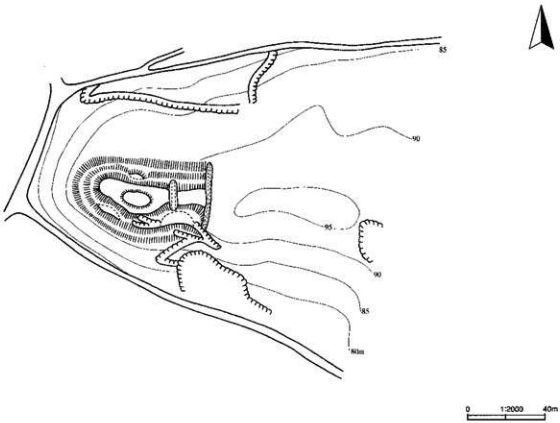
高木古館遺跡は北上川東岸の東西に連なる丘陵地の尾根に立地し、南北方向の街道筋や平野部を一望する要衝であるとともに、平地から尾根頂部までの比高は約90m、周囲三方を急斜面に囲まれた天然の要害の地でもある。尾根頂部に2条の堀が構築され、背後からの防御にも備えているが、平城のような大規模な曲輪を持たず、尾根の削平と盛土による典型的な山城である。出土遺物やその量からも居館ではなく、街道筋や平野部を一望する要衝の地であったことから、『出城』的な機能を果たしていたと思われる。

第43図　周辺の城館跡分布図

第６表　周辺の城館跡一覧表

No	名　称	所在地	遺構・遺物	備　考
1	銭根館	花巻市北湯口	土師器、石臼	
2	万寿山館（台館）	花巻市台		
3	金矢館（湯館）	花巻市金矢	堀、土塁、三郭、陥し穴	
4	方八丁	花巻市葛	堀、二重土塁、土師器、須恵器	
5	上ノ山館	花巻市葛	堀、土師器、須恵器、縄文土器	
6	円万寺館	花巻市雛立字観音山	堀、土塁、帯郭、土師器、須恵器	
7	鶴ノ目	花巻市鶴ノ目	堀、土塁	
8	小瀬川館	花巻市小瀬川	堀、土塁、墳墓	
9	柏葉城	花巻市宮野目田力		伝承
10	大下田Ⅰ	花巻市天下田	土塁	
11	本館Ⅱ	花巻市本館	郭、堀、掘立柱建物跡、陥し穴	
12	本館Ⅰ	花巻市宮野目	堀、住居跡、縄文土器、石器	
13	法市館	花巻市矢沢	堀	
14	陣ケ峯	花巻市矢沢	堀、土塁	
15	藩山・上館	花巻市雛立字上館	堀、土塁	
16	古館Ⅰ（中館・万丁目館）	花巻市中根子字古館	堀、土塁、土師器、須恵器	
17	十八ヶ城跡	花巻市下幅	堀	
18	花巻城（愚谷ヶ崎城）	花巻市城内	堀	
19	矢沢館Ⅰ	花巻市矢沢	堀、土塁	
20	矢沢館Ⅱ	花巻市矢沢	堀	
21	横ノ木Ⅰ	花巻市矢沢	堀、住居跡、土師器、縄文土器	
22	胡四王山館	花巻市矢沢	竪穴、竪穴状遺構、土師器、須恵器	
23	矢沢八郎（内館、矢沢館）	花巻市矢沢	溝、掘立柱建物跡、古銭、陶磁器	八郎遺跡を改称
24	高木古館	花巻市高木	堀	旧内館
25	根子館	花巻市太田	空堀、土塁、柱穴群、住居跡	
26	太田中央	花巻市太田	土師器、フレーク	
27	轟木館	花巻市轟木	堀、土塁、須恵器	
28	中屋敷	花巻市太田	堀、土師器、須恵器	
29	坂井	花巻市太田	墳墓、土師器	東館と伝えられる
30	薬師館	花巻市東十二丁目	郭、堀	
31	下館	花巻市中根子字館	堀、土師器、縄文土器	
32	不動Ⅱ	花巻市不動、上諏訪	堀、住居跡、土師器、須恵器、土錘	
33	上館	花巻市桜町四丁目	堀	
34	十二丁目城跡	花巻市十二丁目	堀、土塁、縄文土器	平城城
35	柳内館（館屋敷）	花巻市柳内	土塁、フレーク	柳内館屋敷跡を包括
36	笹間館	花巻市北笹間	堀、郭、掘立柱建物跡、陶磁器	
37	関口南	石鳥谷町関口		
38	関口Ⅰ	石鳥谷町関口		
39	関口Ⅱ	石鳥谷町関口		
40	関口Ⅲ	石鳥谷町関口		
41	関口Ⅳ	石鳥谷町関口		
42	関口Ⅴ	石鳥谷町関口		
43	関口Ⅵ	石鳥谷町関口		
44	関口Ⅶ	石鳥谷町関口		
45	稲	石鳥谷町八重畑		
46	隅っこ館	石鳥谷町五大堂	堀、土塁、郭	
47	小山田館	東和町安俵		
48	十沢城跡	東和町上沢		慶長17年落城
49	安俵高館跡	東和町安俵		
50	安俵館跡（館小路）	東和町安俵	堀	
51	雫沢城	東和町雫沢館沢田	堀	

参考文献　岩手県教育委員会　1986　『岩手県中世城館分布調査報告書』
花巻市教育委員会　2004　『花巻市埋蔵文化財包蔵地分布地図』



第 44 図　高木古館遺跡推定縄張図

③曲輪について

曲輪 01 と曲輪 02 が調査されたが、曲輪 01 はその大部分が調査区外でその全貌を明らかにすることができなかった。また、住居跡も確認されたが、形状や出土遺物から縄文時代のものであり、中世の建物跡は発見できなかった。

④堀跡

堀跡 3 条が確認された。すべて空堀である。曲輪 01 と曲輪 02 を掘りきる形に存在する堀跡 02・03 は時間差を持って構築されていた。また、柱穴が 4 基あったがその形状、配置から橋脚の可能性は低いと思われる。防御としての機能の他に排水路的な働きもあったのではないかと考えられる。

⑤館跡の時期と性格

文献にも記録がなく、築城主についてなど詳細は不明である。今回の調査成果から、小規模の普請のみで本来の地形の改変は最小限度に留まっていることや作事の跡や出土遺物から長期にわたり日常生活を営んでいるとは考え難いことが指摘できる。館跡の築城及び使用された時期は、15 世紀の中頃の中国産青磁や銭貨、錫杖等の出土遺物から、15 世紀以降を中心として機能した館跡の可能性が高い。花巻周辺において、比較的開けた低地部に築城された館跡とは異なり、山間に築城された理由は、古来より交通の要衝であったことも関わると思われる。

以上のことから、高木古館遺跡は、日常生活を営んだ「常の居城」というよりも、戦乱時に交通の要衝に築城された極めて軍事的な性格の強い「詰めの城」としての機能が想定される。

遺物

遺物は、中世の青磁を初め、土器、石器、金属製品、銭貨などが出土している。総量は大コンテナ（30 × 40 × 30 ㎝）で 2.5 箱である。

縄文土器は前期から後期末葉の頃のもの、弥生土器は後期、土師器・須恵器は平安時代のものが出土している。石器は、石鏃・石匙・石錐、その他剥片類が出土している。これらの時期は明確には決定しがたいが、縄文時代前期～晩期の間におさまるものと考えられる。

中世に属する遺物には磁器・金属製品がある。磁器は 2 点出土しており、15 世紀中頃の中国産の青磁片である。金属製品には、錫杖と、鏡がある。このうち錫杖は、鍛造の鉄製で、総高 12.55 ㎝、重さ 77.29 g である。穂袋部は長さ 11.3 ㎝、直径 0.4 ㎝の不整な円形をしており、先にいくにつれ細くなる。柄を差し込むための穴は口径 1.5 ㎝、深さ 5.9 ㎝の袋状に作られている。輪の輪径は 4.85 ㎝。輪頂に層塔を模したと思われる 1.3 ㎝の細長い突起がある。輪の左右下より巻き込んで蕨手状に開き、直径 1.3 ㎝の輪を作る。遊環も鉄製で、断面 0.15 ㎝円形で外径 4.4 ㎝のものが 3 本残存する。

かつて修験者は山岳修行の結果、仏としての力（験力）を獲得したと称して、加持祈祷・調伏・憑き物落としなど呪術宗教活動を行い、庶民の宗教生活に大きな影響を与えてきた。そして、禍を成す悪霊や祟りやすい死者の霊魂、荒れすさぶ御魂を鎮めるタマシズメのために、仏や菩薩が権（かり）の姿をとって現れる＝権現を鎮める思想を展開してきた。錫杖は、その僧侶や山伏の所持具たる比丘十八物（梵枝？澡豆・三衣瓶・鉢坐具・錫杖・香炉・漉水嚢・手巾・刀子・火遮・鑷子・縄床・経・律・仏像・菩薩像）の一つである。修験者は六輪がはめられた菩薩錫杖を用いる。錫杖を振ることは六道輪廻の眠りにある衆生を目覚めさせて、菩薩の六波羅蜜の修行に導くことを示すという。また、錫杖の音は、身・口・意の三業が犯した罪障を消滅して速やかに菩薩を証する。さらに、蛇や毒虫を追い払う・身を支える・門前にて合図するなどの目的を持っている。通常肩の高さの木柄をつける。遺品は、奈良時代以降のものも多く知られており、奈良時代のものは円形が宝珠型で平安時代以降のものは「くくり」といわれるくびれを持つことが知られている。

このような錫杖が当遺跡より出土したことは鏡の出土とも併せて、中世期においてこの場所で何らかの儀式が行われた可能性が考えられる。この点はさらに類例を増やして検討せねばならないが、本遺跡の性格を考える上では重要な遺物であることは疑いない。

おわりに

今回の調査で高木古館遺跡は、縄文時代、弥生時代、古代、中世の複合遺跡であることが判った。縄文時代においては一時的な集落の場、狩猟の場として利用されていることが判明した。各遺構の具体的な時期については明らかにできなかったが、遺物からみると前期から晩期までの各時期の土器が出土していることから長期にわたり利用されてきたことがわかる。中世においては小規模な館跡として使用された。錫杖や鏡の出土はその性格について重要な示唆を与えるのである。遺跡は後世における改変が著しいものがあったが、上記のような貴重な成果を上げることができた。周辺の調査が進めば、今後不明の点も明らかになるものと思われる。

引用・参考文献

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988『笹間館跡発掘調査報告書』岩文埋第 124 集
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999『山口館跡発掘調査報告書』岩文埋第 310 集
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999『狼沢Ⅱ・高松寺・上駒板遺跡発掘調査報告書』
岩文埋第 319 集
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999『上尾山の館跡発掘調査報告書』岩文埋第 300 集
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000『篠館跡発掘調査報告書』岩文埋第 353 集
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001『上似内遺跡発掘調査報告書』岩文埋第 379 集
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002『山根館跡発掘調査報告書』岩文埋第 390 集
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『館遺跡発掘調査報告書』岩文埋第 432 集
花巻市教育委員会 1981『花巻市史』
花巻市教育委員会 1990『矢沢地区文化財調査報告書Ⅱ』
花巻市教育委員会 1992『花巻市内遺跡詳細分布調査報告書＜矢沢地区＞』
花巻市教育委員会 1997『平成 8 年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』
花巻市教育委員会 1998『平成 9 年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』
花巻市教育委員会 1999『平成 10 年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』
熊谷常正・小田野哲憲・高橋信雄 1982『岩手の土器』岩手県立博物館
千田嘉博・小島道裕・前川要 1993『城館調査ハンドブック』 新人物往来社
西ヶ谷恭弘 1994『戦国の城―日で見る築城と戦略の全貌―関東編』 学習研究社
西ヶ谷恭弘 1994『戦国の城 - 日で見る築城と戦略の全貌―中部・東北編』 学習研究社
西ヶ谷恭弘 1994『戦国の城―日で見る築城と戦略の全貌―総説編』 学習研究社

第7表　土器観察表（1）

No.	器種	部位	出土地点・遺構名	層位	文様・特徴	備考	時期	登録No.
1	深鉢	口縁部	1号竪穴住居跡（炉）	埋土	沈線による楕円状文	大木10式	縄文　中期	3009 A
2	深鉢	口縁部	1号竪穴住居跡（炉）	埋土	沈線による楕円状文	大木10式	縄文　中期末	3009 B
3	深鉢	口縁部	1号竪穴住居跡（炉）	埋土	無文　楕円状の押圧		縄文　中期	3010
4	深鉢	胴体部	1号竪穴住居跡	埋土	楕円状の押圧		縄文　中期	3002
5	深鉢	胴体部	1号竪穴住居跡	埋土	撚糸状文		縄文　中期	3008
6	深鉢？	底部	1号竪穴住居跡（炉B）	埋土	潰純		縄文	3011
8	深鉢	口縁部	1号竪穴状遺構	埋土	撚糸状文		縄文	3015
9	鉢	口縁部	1号竪穴状遺構	埋土	羽状縄文		弥生　後期	3014
10	深鉢	胴体部	3号竪し穴状遺構	埋土下部	沈線による楕円状文　磨耗	大木10式	縄文　中期	3001
11	深鉢	口縁部	5号土坑	埋土	口縁部に波状文　平行沈線　縄文LR	大洞式C1式	縄文　晩期	4036
12	壺？	口縁部	5号土坑	埋土	口縁に小波状の刻み目　沈線による直線文	大洞式C1式	縄文　晩期	4037
13	深鉢	底部	テラス状遺構02	検出面　黒	波口文　撚糸に接帯円形文貼付		縄文　中期	3053
14	深鉢	口縁部	テラス状遺構02	検出面　黒	沈線による楕円状文　磨耗	大木10式	縄文　中期	3052
15	深鉢	胴体部	テラス状遺構02西	埋土　黒	沈線による楕円状文	大木10式	縄文　中期	3078
16	深鉢	胴体部	テラス状遺構02	埋土	羽状縄文		縄文　中期	3051
17	深鉢	胴体部	テラス状遺構02北東	埋土　黒	縄文RL　沈線による区画		縄文　中期	3082
18	鉢	胴体部	テラス状遺構02	埋土（盛土）	工字文		弥生　後期	3081
19	深鉢	胴体部	テラス状遺構02西	埋土　黒	縄文LR		縄文　前期	3079
20	深鉢	口縁部	曲輪01平場東	検出面　茶	沈線による楕円状文	大木10式	縄文　中期	3087
21	深鉢	胴体部	曲輪01平場	Ⅱ層　茶	沈線による楕円状文	大木10式	縄文　中期	3086
22	鉢	口縁部	曲輪01平場	Ⅱ層　茶	口縁上部に凸状沈線　口唇部にも沈線		弥生　後期	3084
23	鉢	胴体部	曲輪01平場	Ⅱ層　茶	撚糸状文		弥生　後期	3085
24	鉢	胴体部	1号堀跡	埋土	撚糸状文		弥生　後期	4006
25	鉢	胴体部	1号堀跡	埋土	撚糸状文		弥生　後期	4007
26	鉢	胴体部	1号堀跡	埋土	撚糸状文		弥生　後期	4005
27	不明	底部	2号堀跡	埋土	磨耗		縄文	3017
28	深鉢	口縁部	3号堀跡	埋土	沈線による楕円状文　磨耗	大木10式	縄文　中期	3020
29	深鉢	胴体部	曲輪02北東	Ⅱ層　茶	結束状の羽状縄文　繊維混入	大木2a式？	縄文　前期	3107

No.	器種	部位	出土地点・遺構名	層位	文様・特徴	備考	時期	登録No.
30	深鉢	胴体部	ⅢAグリッド北東	Ⅱ層　茶	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	3113
31	深鉢	口縁部	曲輪02北東～東	Ⅱ層　茶	結束状の羽状縄文　縦縄張入　口唇部に刻み	大木2a式？	縄文　前期	3088
32	深鉢	胴体部	トレンチ南斜面東	堆土	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	4033
33	深鉢	胴体部	T07南→14 m	Ⅰ層　黒	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	3039
34	深鉢	胴体部	曲輪02東　頂上	検出面	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	3092
35	深鉢	口縁部	頂上部	検出面	結束状の羽状縄文　縦縄張入　口唇部に押圧縄文	大木2a式？	縄文　前期	4030
36	深鉢	胴体部	曲輪02北東	Ⅱ層　茶	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	3114
37	深鉢	胴体部	曲輪02北東	Ⅱ層　茶	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	3117
38	深鉢	胴体部	曲輪03北東	Ⅱ層　茶	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	3108
39	深鉢	胴体部	曲輪02北東	Ⅱ層　茶	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	3111
40	深鉢	胴体部	SX04	堆土	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	4019
41	深鉢	胴体部	トレンチ南斜面東	堆土	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	4032
42	深鉢	胴体部	曲輪02北東	Ⅱ層　茶	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	3116
43	深鉢	胴体部	頂上部	検出面上（黄褐～暗褐）	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	4027
44	深鉢	胴体部	曲輪02北東	Ⅱ層　茶	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	3110
45	深鉢	胴体部	トレンチ南斜面東	堆土	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	4034
46	深鉢	胴体部	T02	Ⅰ層	縄文LR		縄文　前期	3033
47	深鉢	胴体部	曲輪02北東	Ⅱ層　茶	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	3112
48	深鉢	胴体部	頂上部	検出面上（黄褐～暗褐）	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	4028
49	深鉢	胴体部	SD06東	堆土	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	4016
50	深鉢	胴体部	曲輪02北東	Ⅱ層　茶	縄文LR　円形の穿孔		縄文　前期	3101
51	深鉢	胴体部	頂上西	検出面上（黄褐～暗褐）	結束状の羽状縄文　縦縄張入	大木2a式？	縄文　前期	4029
52	深鉢	胴体部	頂上西	検出面	縄文LR		縄文　前期	4003
53	深鉢	口縁部	T15～16中間部斜面	検出面　黒	沈線による楕円状文LR	大木10式	縄文　中期	3046
54	深鉢	口縁部	テラス状2斜面西	堆土　黒	口縁部に沈線による区画　楕円状文　磨耗	大木10式	縄文　中期	3056
55	深鉢	口縁部	テラス状2斜面東	堆土　黒	沈線による楕円状文　磨耗	大木10式	縄文　中期末葉	3074
56	深鉢	口縁部	頂上部		沈線による楕円状文　磨耗	大木10式	縄文　中期末葉	3022
57	深鉢	胴体部	テラス状2斜面西　上	堆土　暗土ド	沈線による楕円状文	大木10式	縄文　中期	3068
58	深鉢	胴体部	頂上部東		沈線による楕円状文	大木10式	縄文　中期	4018

No	器種	部位	出土地点・遺構名	層位	文様・特徴	備考	時期	登録No
59	深鉢	口縁部	テラス状2斜面西	埋土　黒	縄文LR		縄文　中期	3054
60	深鉢	胴体部	T07 南→ 14 m	Ⅰ層　黒	沈線による楕円状文	大木8b式	縄文　中期	3038
61	深鉢	胴体部	テラス状2斜面東	埋土　黒	縄文LR　横位に沈線による直線文	大木10式	縄文　中期	3072
62	深鉢	口縁部	テラス状2斜面西	埋土　黒	縄文LR　口縁部外反	大木10式	縄文　中期	3061
63	深鉢	胴体部	ⅢAグリッド平場東	Ⅱ層　茶	縄文LR		縄文　中期	3122
64	深鉢	胴体部	T03 南→ 26m	Ⅰ層　黒	縄文LR　磨耗		縄文　中期	3036
65	深鉢	胴体部	テラス状2斜面東	埋土　黒	無文		縄文　中期	3077
66	深鉢	胴体部	テラス状2斜面西	埋土　黒	縄文RL		縄文　中期	3065
67	深鉢	胴体部	テラス状2斜面西	埋土　黒	縄文LR		縄文　中期	3066
68	浅鉢	口縁部	曲輪 02 平場	Ⅱ層　黒	沈線による楕円状文　圧された楕円状文貼付	大木10式	縄文　中期	3094
69	深鉢	胴体部	T 02 南→ 5.7 m	Ⅰ層　黒	縄文RL		縄文　中期	3035
70	浅鉢	口縁部	テラス状2斜面西	埋土　黒	沈線による渦状文		縄文　中期	3059
71	浅鉢	口縁部	頂上西（1号墓縁付近）	検出面	口縁部に瘤状突起付加・裏側に瘤状沈線	大洞式C2式	縄文　晩期	4002
72	浅鉢	胴体部	T14	検出面　茶	沈線による区画　工字文		縄文　晩期後葉	3045
73	深鉢	口縁部	テラス状2斜面西	埋土　黒	先端部に波状文　隆沈線による区画　羽状刺突文	大洞式C1式	縄文　晩期	3055
74	浅鉢	口縁部	頂上部　住穴 01	検出面上（黄褐～暗褐）	口縁部に刻み目があり内向　平行沈線	大洞式C2式	縄文　晩期	4025
75	深鉢	胴体部	北斜面東	木根	口縁部に不連続沈線　磨消縄文？		縄文　晩期後葉	4024
76	深鉢	胴体部	頂上西（1号墓縁付近）	検出面	縄文R　横位に平行沈線	大洞式C1式	縄文　晩期	4004
77	浅鉢	口縁部	頂上西（1号墓縁付近）	検出面	口縁部に小突起・連続刺突文　連続沈線による結束形文	大洞式A式	縄文　晩期	4001
78	深鉢	口縁部	テラス状2斜面東	埋土　黒	口縁部に瘤状沈線　裏側にも沈線　磨消縄文？		縄文　晩期後葉	3073
79	浅鉢	底部	曲輪 02 平場西		横位に刻目文　隆沈線による区画	大洞式C1式	縄文　晩期	3098
80	浅鉢	胴体部	頂上部北	検出面上（黄褐～暗褐）	沈線による区画 RL	大洞式C2式	縄文　晩期	3021
81	深鉢	口縁部	頂上部	検出面上（黄褐～暗褐）	無文　磨消縄文？		縄文　晩期後葉	4026
82	深鉢	口縁部	頂上部東	検出面	口縁部波状文　平行沈線	大洞式C2式	縄文　晩期	4022
83	深鉢	口縁部	ⅢAグリッド平場東	Ⅱ層　茶	先端部に刻目文　隆沈線による区画	大洞式C2式	縄文　晩期	3121
84	高杯？	底部	頂上部	検出面上（黄褐～暗褐）	磨耗		縄文　晩期？	4038
85	深鉢	底部	頂上部		磨耗		縄文	3023
86	深鉢	底部	トレンチ 05	1層　中	木葉痕		縄文	4039
87	深鉢	口縁部	曲輪 02 平場西	Ⅰ層	撚糸状文　磨耗		弥生　後期	3096

No	部種	部位	出土地点・遺構名	層位	文様・特徴	備考	時期	登録No
88	深鉢	口縁部	曲輪02 平場	Ⅰ層　黒	撚糸文　磨耗		弥生　後期	3093
89	深鉢	口縁部	頂上部東　No.1 123	検出面	口縁部に刺突文　平行沈線		弥生　後期	4021
90	深鉢	口縁部	T05	Ⅱ層　黒	縄文ＬＲ		弥生　後期	3037
91	深鉢	胴体部	T13	検出面	工字文		弥生　後期	3043
92	深鉢	口縁部	T02　30m	Ⅰ層　黒	縄文ＬＲ		弥生　後期	3034
93	深鉢	口縁部	テラス状２斜面西	埋土　黒	口縁に押圧縄文ＲＬ		弥生　後期	3058
94	深鉢	胴体部	テラス状２斜面西　上	埋土　暗土下	撚糸状文		弥生　後期	3069
95	深鉢	胴体部	調査区一括		縄文ＲＬ		弥生　後期	3123
96	深鉢	胴体部	T15 西２m→	検出面	縄文ＲＬ		弥生　後期	3048
97	深鉢	胴体部	曲輪02 北東	Ⅱ層　茶	撚糸状文		弥生　後期	3105
98	深鉢	胴体部	T13	検出面	撚糸縄文		弥生　後期	3044
99	深鉢	胴体部	頂上部南	検出面	羽状縄文		弥生　後期	3026
100	深鉢	胴体部	SD06	埋土	櫛目状縄文		弥生　後期	4017
101	深鉢	胴体部	頂上部　68	検出面	撚糸縄文		弥生　後期	4031
102	深鉢	胴体部	曲輪02 北東	Ⅱ層　茶	櫛目状縄文		弥生　後期	3103
103	深鉢	胴体部	テラス状２斜面東	埋土　黒	撚糸状文		弥生　後期	3071
104	深鉢	胴体部	トレンチ南斜面東	埋土	撚糸状文		弥生　後期	4035
105	深鉢	胴体部	テラス状２斜面西	埋土　黒	撚糸状文		弥生　後期	3062
106	深鉢	胴体部	曲輪02 西		撚糸状文		弥生　後期	3089
107	深鉢	胴体部	１号甕跡西	埋土	撚糸状文		弥生　後期	4014
108	深鉢	胴体部	T 13	検出面	撚糸状文		弥生　後期	3041
109	深鉢	胴体部	１号甕跡西	埋土	撚糸状文		弥生　後期	4008
110	深鉢	胴体部	頂上部東	検出面	撚糸状文		弥生　後期	4020
111	深鉢	胴体部	１号甕跡西	埋土	撚糸状文		弥生　後期	4011
112	深鉢	胴体部	１号甕跡西	埋土	撚糸状文		弥生　後期	4009
113	深鉢	胴体部	１号甕跡西	埋土	撚糸状文		弥生　後期	4015
114	深鉢	胴体部	テラス状２斜面西	埋土　黒	撚糸状文		弥生　後期	3063
115	深鉢	胴体部	テラス状２斜面西　上	埋土　暗土下	撚糸状文		弥生　後期	3067
116	深鉢	胴体部	１号甕跡西	埋土	撚糸状文		弥生　後期	4013

No	器種	部位	出土地点・遺構名	層位	文様・特徴	備考	時期	登録No
117	深鉢	胴体部	T 13	検出面	縄文RL		弥生　後期	3042
118	深鉢	胴体部	曲輪 02 北東	Ⅱ層　茶	削り込みによる沈線		弥生　後期	3104
119	深鉢	胴体部	テラス状2斜面西　上	埋土　盛土下	無糸状文		弥生　後期	3070
120	深鉢	胴体部	1号墓陪西	埋土	無糸状文		弥生　後期	4010
121	深鉢	胴体部	曲輪 02 北東	Ⅱ層　茶	縄文RL		弥生　後期	3106
122	深鉢	底部	テラス状2斜面東	埋土　黒	無糸状文		弥生　後期	3075
123	深鉢	底部	曲輪 02 北東	Ⅱ層　茶	削り込みによる沈線		弥生　後期	3100
124	深鉢	底部	曲輪 02 平場西	Ⅰ層	縄文RL		弥生　後期	3097

第8表　土器観察表（2）

図版	写真	種別	出土位置	層位	器種	部位	計測(cm) 口径	底径	器高	特徴 外面	内面	備考	登録
7	7	土師器	1号墓穴住居　PP31	埋土		胴部	—	—	8.6	ヘラナデ	ヘラナデ	輪積痕	14
125	125	土師器	テラス状2斜面西	埋土　黒	坏	底部	(13.8)	(4.7)	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り痕	18
126	—	土師器	テラス状2斜面西	埋土　黒	坏	口縁部	12.0	—	(3.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロ調整	10
127	127	土師器	T05S→16m　ⅡＢ６f	Ⅰ層　黒	坏	底部	—	5.4	1.2	ヘラケズリ			13
128	128	土師器	テラス状2斜面西～中央	埋土　黒	甕	口縁部	(19.2)	—	(8.5)	ヨコナデ・ヘラナデ・ハケメ	ヘラナデ・ハケメ		15A
129	129	土師器	テラス状2斜面東	埋土　黒	坏	1/2 完形	(13.8)	(3.8)	(7.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り痕？(灰白色)	17
130	130	土師器	テラス状2斜面東	埋土　黒	坏	底部	—	—	(1.8)	ヘラケズリ			11
131	131	土師器	テラス状2斜面西～中央	埋土　黒	甕	胴部	—	—	—	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラナデ		15C
132	132	土師器	テラス状2斜面西	埋土　黒	甕	胴部	—	—	(16.1)	ヘラケズリ	ヘラナデ		12
133	133	土師器	テラス状2斜面西	埋土　黒Ⅱb	甕	口縁部	(19.2)	—	—	ヘラナデ・ハケメ・ヨコナデ	ヘラナデ		16
134	134	土師器	テラス状2斜面東	埋土　黒	甕	口縁部	(17.4)	—	(5.4)	ロクロナデ・ヨコナデ	ロクロナデ	ロクロ調整	9
135	135	土師器	テラス状2斜面西～中央	埋土　黒	甕	胴部	—	(13.0)	(7.1)	ヘラケズリ・タタキ	ヘラナデ		19
136	—	須恵器	テラス状2斜面東～中央		甕	胴部	—	—	—	タタキ	青海波文	輪積痕？	22A
137	137	須恵器	テラス状2斜面東～中央		甕	底部	—	(12.0)	(12.0)	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラ切り？	21

第9表　陶磁器観察表

図版	写真	器種	部位	出土地点	層位	計測(cm) 口径	底径	器高	釉調	製作地	製作年代	備考	登録
138	138	皿	口縁	曲輪 01 東端	検出面	—	—	(2.6)	オリーブ灰	中国（北宋）	15 世紀中頃	磁器：青磁	1
139	139	椀	底部	曲輪 01 東端	検出面	—	10.0	(2.2)	オリーブ灰	中国（北宋）	16 世紀中頃	磁器：青磁	3

第 10 表　石器観察表

図版	写真	器種	遺構名・出土地点	層位	計測 (cm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	石質・産地	備考	登録
140	140	鏃	11 号陥し穴状遺構	埋土	5.8	3.6	1.0	15.81	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		4031
141	141	鏃	11 号陥し穴状遺構	埋土	4.2	3.5	1.1	12.13	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		4032
142	142	スクレイパー (剥器)	11 号陥し穴状遺構	埋土	(4.5)	2.6	0.9	9.68	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		4033
143	143	スクレイパー (剥器)	11 号陥し穴状遺構	埋土	3.8	2.5	0.8	6.68	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		4034
144	144	スクレイパー (剥器)	2 号堀跡北側		7.4	4.1	2.0	35.88	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		3015
145	145	礫 (敲石)	曲輪 02	検出面	(5.5)	(5.5)	(6.1)	140.50	玄武岩 〔溶岩〕 (奥羽山脈) 第四紀		3460
146	146	石鏃	ⅣB	Ⅱ層　茶	2.5	1.3	0.3	0.70	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		3001
147	147	石鏃	ⅣB 5 f 南	検出面	2.2	1.4	0.3	0.70	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		3002
148	148	鏃	曲輪 02 北東	Ⅱ層　茶	6.2	2.2	0.6	13.80	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		3003
149	149	鏃	遺構外	埋土	6.2	3.6	1.0	19.96	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		4014
150	150	鏃	頂上部東		2.4	0.9	0.5	0.99	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		4181
151	151	鏃	北斜面東	木根	(4.1)	2.9	0.4	4.00	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		4315
152	152	両面調整石器	頂上部	検出面	(4.2)	4.0	1.5	17.77	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		4382
153	153	両極石器	2 トレンチ	黄褐色土層	4.6	7.5	1.3	43.55	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		4409
154	154	両面調整石器	曲輪 02　北東	Ⅱ層　茶	5.0	10.6	2.1	83.52	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		3386
155	155	石匙	頂上部	検出面　上	5.7	2.6	0.7	7.34	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		4370
156	156	スクレイパー (掻器)	曲輪 02　西側斜面	Ⅱ層　茶	(4.8)	4.0	1.3	21.77	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		3268
157	157	スクレイパー (掻器)	遺構外	埋土	2.9	4.6	1.0	11.70	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		4012
158	158	スクレイパー (削器)	5 トレンチ	Ⅱ層　中	4.8	2.8	1.1	13.63	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		4424
159	159	スクレイパー (削器)	頂上部	検出面　上	4.8	2.2	0.9	7.41	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		4349
160	160	スクレイパー (削器)	2 トレンチ	黄褐色土層	4.8	3.8	1.1	16.18	頁岩 (奥羽山脈) 新生代新第三紀		4408

図版	写真	器種	遺構名・出土地点	層位	計測(cm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	石質・産地	備考	登録
161	161	スクレイパー（剥器）	テラス状2　斜面西	想土　黒Ⅲb	4.3	3.9	0.9	9.16	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		3072
162	162	スクレイパー（剥器）	風倒木	想土	(3.1)	1.9	0.4	2.36	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4027
163	163	スクレイパー（剥器）	頂上部東		(3.6)	2.8	0.7	4.37	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4172
164	164	スクレイパー（剥器）	遺構外	堆土	(4.4)	3.1	0.8	8.90	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4015
165	165	スクレイパー（剥器）	曲輪02　北東	Ⅱ層　茶	3.5	2.7	0.9	5.14	結質買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		3307
166	166	スクレイパー（剥器）	遺構外		4.5	3.1	1.2	8.96	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4055
167	167	スクレイパー（剥器）	頂上部　西	検出面	6.5	3.1	0.9	10.66	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4225
168	168	スクレイパー（剥器）	T10　南	Ⅱ層	4.5	5.1	1.3	20.96	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		3045
169	169	スクレイパー（剥器）	テラス状2　斜面	堆土　黒	7.1	3.0	1.5	17.12	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		3058
170	170	スクレイパー（剥器）	T05　上から42m	Ⅰ層　黒	4.4	8.2	1.4	30.91	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		3036
171	171	スクレイパー（剥器）	頂上部西（SD01付近）	検出面	(5.8)	4.3	1.5	17.46	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4240
172	172	スクレイパー（剥器）	頂上部	Ⅱ層	8.3	6.4	1.7	56.88	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4401
173	173	スクレイパー（剥器）	曲輪01　東より20m	堆土	(5.6)	(4.4)	1.1	19.73	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		3090
174	174	スクレイパー（剥器）	3トレンチ南斜面	Ⅴ層　上面	6.3	4.0	2.4	46.14	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4419
175	175	スクレイパー（剥器）	頂上部西（SD01付近）	検出面	4.1	5.3	0.8	11.84	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4239
176	176	石核	頂上部　西	検出Ⅱ	4.3	5.9	2.1	44.52	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4253
177	177	石核	遺構外	堆土	7.5	6.4	2.4	99.34	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4076
178	178	石核	頂上　部	検出面　上	4.9	6.2	2.9	75.46	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4329
179	179	石核	頂上部	検出面	5.4	2.5	1.0	17.98	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4332
180	180	石核	頂上部東		4.3	5.0	2.7	40.10	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4175
181	181	石核	頂上部　西	検出面	3.4	9.1	6.0	117.08	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4217
182	182	石核	ⅣB		5.4	7.8	4.9	145.47	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4054
183	183	石核	頂上部	検出面　上	8.3	(6.0)	2.6	145.25	買岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4342

図版	写真	器種	遺構名・出土地点	層位	計測(cm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	石質・産地	備考	登録
184	184	石核	曲輪01　東より20m	盛土	4.0	7.6	3.0	60.59	凝灰岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		3089
185	185	石核	曲輪02　北側	Ⅱ層　茶	6.6	6.8	4.2	186.71	頁岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		3273
186	186	石核	曲輪02　東20m		4.6	5.2	4.5	79.01	頁岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		3194
187	187	石核	曲輪02　北東	Ⅱ層　茶	3.9	4.3	4.1	46.98	頁岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		3322
188	188	石核	曲輪02　北東	Ⅱ層　茶	4.5	3.1	1.2	8.96	頁岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		3293
189	189	石核	曲輪02　北東	Ⅱ層　茶	6.1	8.4	2.8	115.40	頁岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		3417
190	190	接合剥片	南斜面西	検出面	3.5	3.8	1.6	15.64	頁岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4296
191	191	接合剥片	頂上部東No. 1　117	検出面	5.6	7.3	4.8	106.14	頁岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4144
192	192	接合剥片	頂上部　南	検出Ⅱ	7.5	7.5	2.9	112.42	頁岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4258
193	193	接合剥片	頂上部	検出面　上	5.6	8.0	1.6	46.16	頁岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4348
194	194	礫（敲磨器）	ⅣB 5g	盛土	13.0	5.3	4.0	374.00	安山岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4059
195	195	礫（敲磨器）	ⅣB	盛土	7.5	6.7	4.7	358.60	安山岩（奥羽山脈）新生代新第三紀		4036
196	196	礫（敲磨器）	ⅣB		19.0	7.8	2.0	369.00	ホルンフェルス（北上高地）		4113

第 11 表　金属製品・銭貨観察表

図版	写真	器種	出土地点	層位	計測（cm／g）				備考	登録
					長さ	幅	厚さ	重量		
197	197	鏡	トレンチ 7 S 2m ～ E5m	検出面（黒色土）	(6.6)	(6.6)	0.1	33.78	「亀甲地双鳥文鏡」 3/4 欠損	2
198	198	錫杖	トレンチ 7 S ～ 1.5m（1 号竪穴状遺構付近）	検出面（黒色土）	12.6	4.9	1.5	77.29	柄部欠損	1
199	199	銭貨	トレンチ 10 ～ 11	II 層　茶	2.2	2.4	0.1	1.44	「熙寧元寶」（初鋳 1068 年　北宋）	3
200	200	銭貨	トレンチ 19 A	検出面	2.3	2.3	0.1	2.49	腐食が進み不明瞭	4

付編 自然科学分析

1 炭化材分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県花巻市に所在する高木古館遺跡は、北上川と猿ヶ石川に挟まれた丘陵上に位置している。本遺跡の発掘調査の結果、縄文時代の陥し穴や弥生時代と考えられる竪穴住居跡、中世城館に伴う堀跡や溝跡、土塁、曲輪、さらに、時期不明の掘立柱建物跡や炭窯跡などの遺構が検出されている。

本報告では、上記の炭窯より出土した炭化材の樹種同定を行い、製炭材の種類について検討する。

(1) 試　料

試料は、炭窯跡（SW01）内より採取された炭化材２点である。当炭窯跡は斜面部に構築されており、出土遺物が少なく年代については不明とされているが、遺構の形状や岩手県内での類例などから、中世以降、あるいは近～現代と考えられている。

(2) 分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

(3) 結　果

分析の結果、炭化材は２点ともに落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。以下に、解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1-2 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

(4) 考　察

コナラ節の木材は、一般に重硬で強度が高く、薪炭材としては良材の一つであり（平井、1979）、木炭は硬炭となり火持ちが良い（岸本・杉浦、1980）とされる。なお、宮脇（1987）の潜在性植生等の所見によれば、本遺跡周辺では、二次林や山林の落葉広葉樹林にコナラやミズナラが生育するとされる。また、南部物と呼ばれる岩手県産の木炭には、ミズナラを利用するとされている（岸本、1984）ことから、炭化材に認められたコナラ節は、コナラあるいはミズナラの可能性がある。

また、試料とした炭化材表面には、樹皮が残存、あるいは樹皮のみが剥がれた状況あった。そこで、これらの木材の最終形成年輪形成状況について観察を行った。その結果、いずれも春材部が形成されており、夏材部が形成中あるいは形成終了した状態が確認された。したがって、これらの木材の伐採は、晩夏～冬の期間に行われたことが推定される。木炭の焼成は、冬期が適するとされるが、この季節は木材の含水量が低い点や湿度が低い点等が関係している推測される。以上の結果を考慮すると、本遺

跡でもこれらの時期に木材の伐採や木炭の焼成が行われていたと考えられる。

引用文献

平井信二　1979　木の事典　第2巻．かなえ書房．
岸本定吉　1984　木炭の博物誌．総合科学出版．260p.
岸本定吉・杉浦銀治　1980　日曜炭やき師入門．総合科学出版、250p.
宮脇昭（編）　1987　日本植生誌　東北．至文堂、605p.

2 火山灰分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

は じ め に

岩手県花巻市に所在する高木古館遺跡は、北上川左岸の丘陵上（標高約90m）に位置する。発掘調査の結果、縄文時代の陥し穴や弥生時代の竪穴住居跡、中世城館に伴う堀跡や溝跡、土塁、曲輪、さらに、時期不明の掘立柱建物跡や炭窯跡などの遺構が検出されている。なお、前報告では、時期不明とされる炭窯から出土した炭化材の樹種同同定を行っている。

本報告では、本遺跡の立地する丘陵斜面中腹の土層中に認められた火山灰（テフラ）と考えられる堆積物について、その性状を明らかにし、テフラである場合には、噴出年代の明らかにされている指標テフラとの対比を行い、土層の年代に関わる資料を作成する。

（1） 試　　料

試料は、高木古館遺跡の立地する丘陵斜面北側中腹付近の表土下約50cmの黒褐色土層より採取された黄褐色を呈する砂質のブロック状堆積物1点である。なお、当遺跡の基本土層は、上位より表土（層厚：約5cm）、黒褐色土層（層厚：約40cm）、暗褐色土層（層厚：約10cm）、黄褐色土層（地山）に分層されており、発掘調査時に暗褐色土層から縄文時代の遺物が確認されている。

当試料の肉眼観察の結果、黄褐色のシルト質砂であり、細粒の火山ガラス質テフラであることが確認された。

（2） 分 析 方 法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。

観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

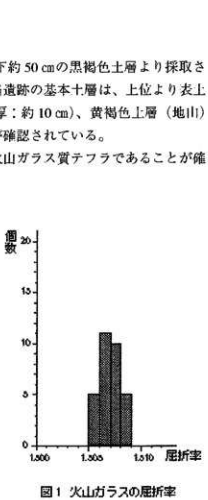


図1 火山ガラスの屈折率

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）の MAIOT を使用した温度変化化法を用いた。

（3）結　　果

処理後に得られた砂分は、多量の細砂～極細砂径の火山ガラスと多量の軽石から構成される。火山ガラスの多くは無色透明の塊状の軽石型であり、少量の繊維束状のものおよび無色透明のバブル型も混在する。軽石は、最大径約 1.2 ㎜で粒径の淘汰は非常に良好、白色またはやや風化して黄白色を呈し、発泡は良好である。火山ガラスと軽石の他には、極めて微量の斜長石や斜方輝石などの遊離結晶や安山岩と思われる岩石片などが認められる。

火山ガラスの屈折率測定結果を図 1 に示す。n1.505 ～ 1.508 のレンジに入り、n1.506 ～ 1.507 にモードがある。

（4）考　　察

試料は、細粒の軽石および火山ガラスを主体とするテフラである。上述した砕屑物の特徴および高木古館遺跡の地理的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか（1981；1984）、Arai et al.（1986）、町田・新井（2003）など）との比較から、試料は、十和田 a テフラ (To-a) の降下堆積物であると考えられる。To-a は、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている（町田ほか、1981）。また、その噴出年代については、早川・小山（1998）による詳細な調査によれば、西暦 915 年とされている。なお、町田・新井 (2003) に記載された To-a の火山ガラスの屈折率は、n1.496 ～ 1.508 の広いレンジを示す。ただし、n1.502 以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とする火山灰層は、南方へは広がらず、十和田周辺とその東方地域に分布が限られるとされている（町田ほか、1981）。おそらく、今回検出されたテフラは、低屈折率の火山ガラスを含まない To-a に相当するものと考えられる。

また、上述の早川・小山（1998）によれば、東北地方では、To-a とほぼ同時期（To-a 噴出から約 30 年後の西暦 947 年）に中国と北朝鮮の国境にある白頭山から噴出した白頭山苫小牧テフラ (B-Tm) の堆積も広域に認められているが、このテフラは細粒のバブル型の多い火山ガラスを主体とすることや、その屈折率が高い（n1.511 ～ 1.522）ことから、To-a とは明瞭に区別される。今回の試料中に含まれる火山ガラスには、B-Tm に由来する火山ガラスはほとんど含まれていないと考えられる。

以上の結果から、当試料は黒褐色土層の形成年代を示す指標となる可能性がある。ただし、試料採取位置が丘陵斜面より採取されており、テフラの一次降下物であるかは課題が残る。今後は、周辺の同土層やテフラ層が保存されやすい遺構覆土等の観察を行い、検討することが望まれる。なお、黒褐色土層に To-a が含まれることを考慮すると、下位の縄文時代の遺物が確認される暗褐色土層との間に層位関係に矛盾はないと言える。

引用文献

Arai、F.・Machida、H.・Okumura、K.・Miyauchi、T.・Soda、T.・Yamagata、K、1986、Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan Ⅱ － Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido .Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21、223-250.

古澤　明　1995　「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』101 P 123-133.

早川由紀夫・小山真人　1998　「日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－」『火山』43 P 403-407.

町田　洋・新井房夫　2003　『新編　火山灰アトラス』P 336.　東京大学出版会.

町田　洋・新井房夫・森脇　広　1981　「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51、P 562-569.

町田　洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦　1984　「テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』P 865-928 同朋舎

写　真　図　版

調査区遠景（西→）

調査区近景（直上）

写真図版１　調査区全景航空写真（平成 15 年度）

調査区遠景（東→）

調査区近景（直上）

写真図版 2　調査区全景航空写真（平成 16 年度）

調査区遠景（南→）

調査前現況（東側南斜面）

調査前現況（北斜面）

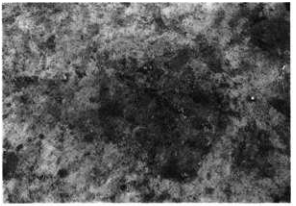
調査前現況（西側南斜面）

基本土層⑤

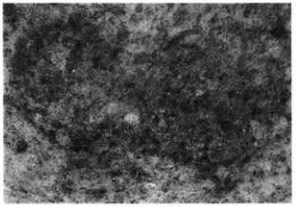
写真図版３　調査区全景、調査前現況、基本土層

（平面）

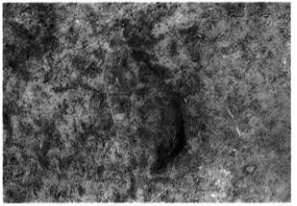
（断面）



炉跡Ａ（平面）



炉跡Ｂ（平面）



炉跡Ｃ（平面）

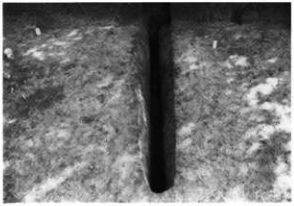
写真図版４　１号竪穴住居跡

1号陥し穴状遺構（平面）

1号陥し穴状遺構（断面）

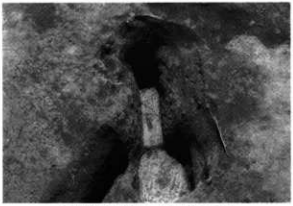
2号陥し穴状遺構（平面）

作業風景



3号陥し穴状遺構（平面）

3号陥し穴状遺構（断面）



4号陥し穴状遺構・4号土坑（平面）

4号陥し穴状遺構（断面）

写真図版5　1～4号陥し穴状遺構、4号土坑

5号陥し穴状遺構（平面）

5号陥し穴状遺構（断面）

6号陥し穴状遺構（平面）

6号陥し穴状遺構（断面）

7号陥し穴状遺構（平面）

7号陥し穴状遺構（断面）

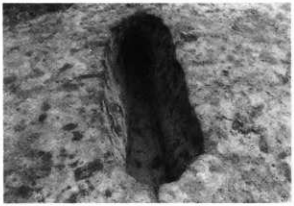
8号陥し穴状遺構（平面）

8号陥し穴状遺構（断面）

写真図版6　5～8号陥し穴状遺構

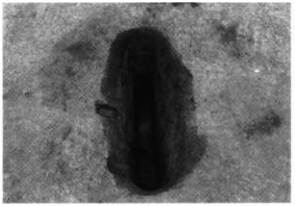
9 号陥し穴状遺構（平面）

9 号陥し穴状遺構（断面）



10 号陥し穴状遺構（平面）

10 号陥し穴状遺構（断面）



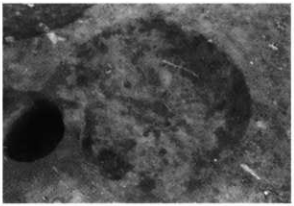
11 号陥し穴状遺構（平面）

11 号陥し穴状遺構（断面）

1 号竪穴状遺構（平面）

1 号竪穴状遺構（断面）

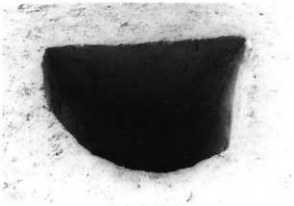
写真図版 7　9 ～ 11 号陥し穴状遺構、1 号竪穴状遺構



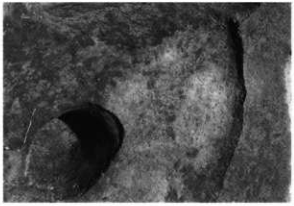
1号土坑（平面）

1号土坑（断面）

2号土坑（平面）

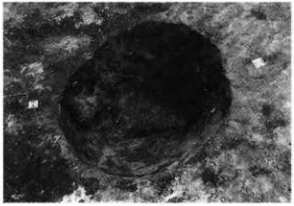


2号土坑（断面）



3号土坑（平面）

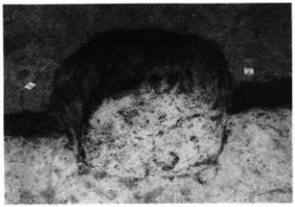
5号土坑（平面）



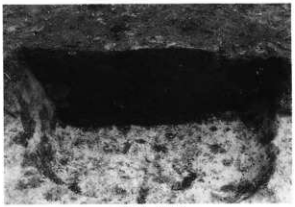
6号土坑（平面）

6号土坑（断面）

写真図版8　1～3・5・6号土坑



7号土坑（平面）



7号土坑（断面）

テラス状遺構01（平面）

テラス状遺構01（断面）

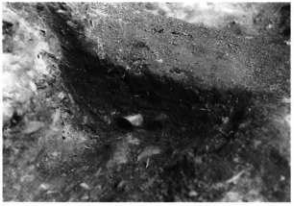
テラス状遺構02（平面）

写真図版9　7号土坑、テラス状遺構01・02（1）

テラス状遺構 02（断面）

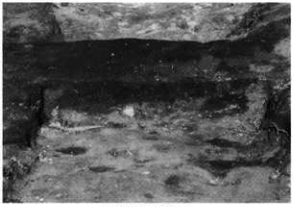
犬走り 01（平面）

犬走り 01（平面）



1 号溝跡（断面）

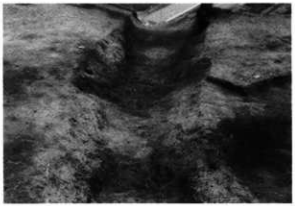
1 号堀跡（平面）



1 号堀跡（断面 A）

1 号堀跡（断面 B）

写真図版 10　テラス状遺構 02（2）・犬走り 01・02・1 号堀跡（1）・1 号溝跡



1号堀跡

1号堀跡（断面C）

1号堀跡（平面）

作業風景

2・3号堀跡（平面）

写真図版11　1号堀跡（2）・2・3号堀跡（1）

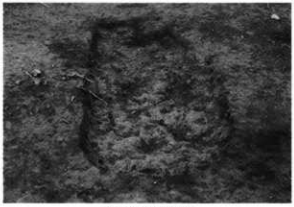
調査区北側

2・3号堀跡（断面）

3号堀跡（平面）

3号堀跡（断面）

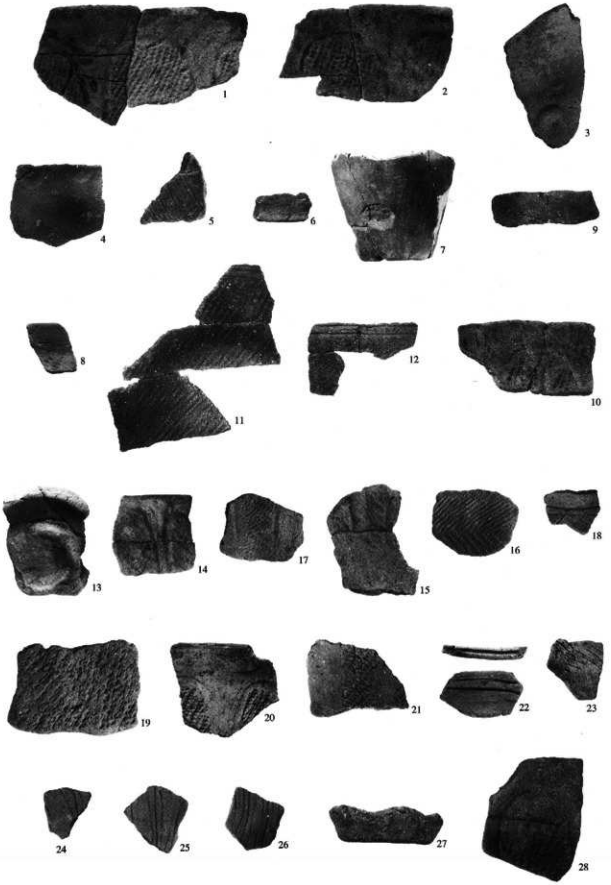
調査区遠景（南→）



1号炭窯跡（平面）

1号炭窯跡（断面）

写真図版12　2・3号堀跡（2）、1号炭窯跡



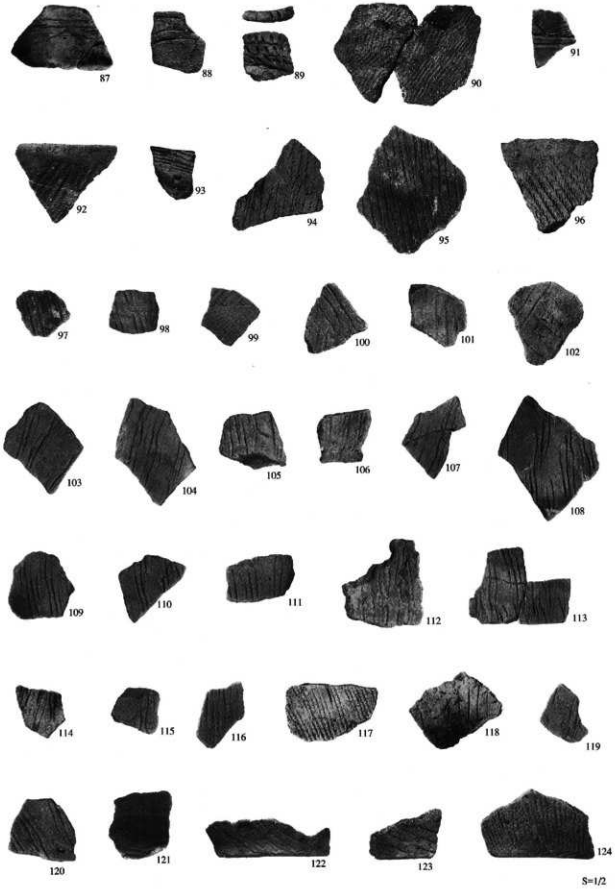
S=1/2

写真図版 13　出土土器 1

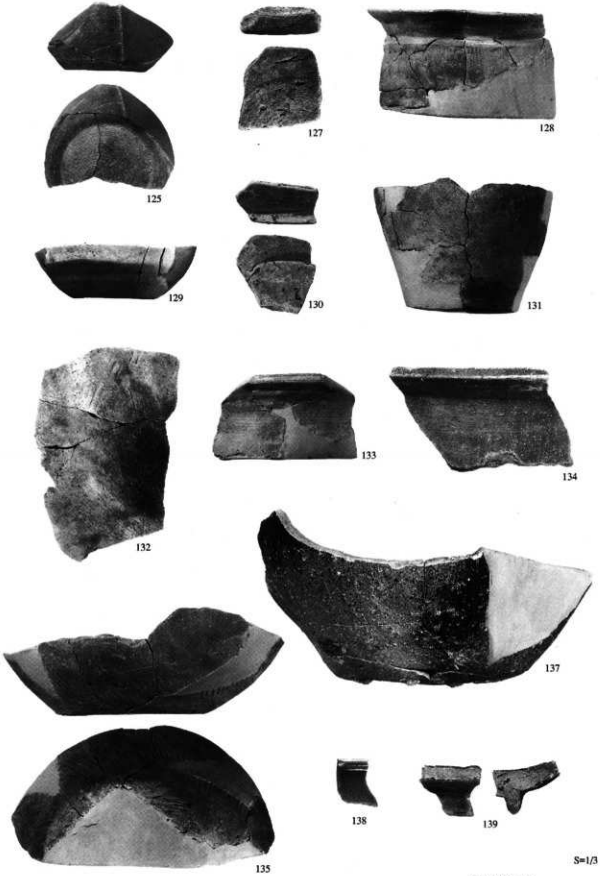
写真図版 14　出土土器 2

写真図版 15　出土土器 3

写真図版 16　出土土器 4



写真図版 17　出土土器 5

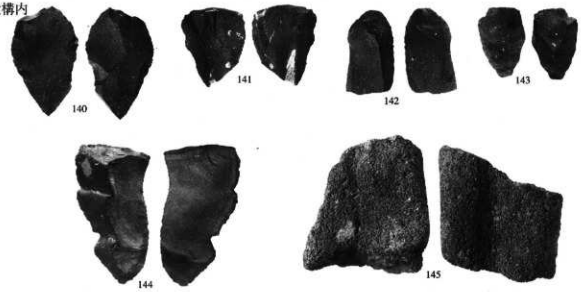


S=1/3

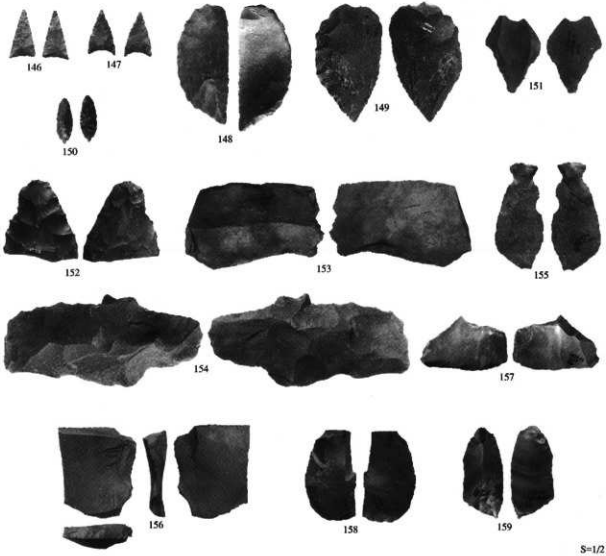
127・130・134
137～139 S=1/2

写真図版 18　出土土器 6

遺構内

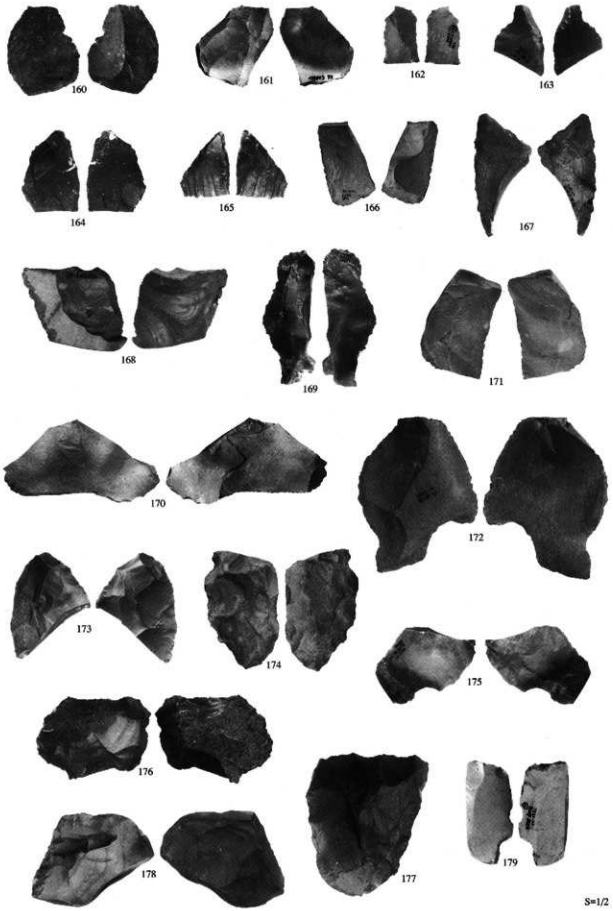


遺構外

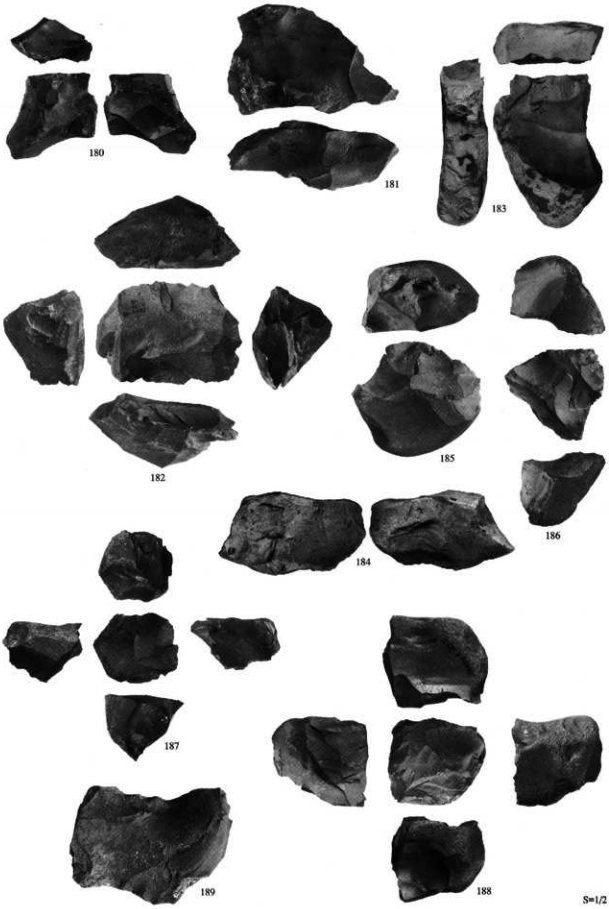


S=1/2

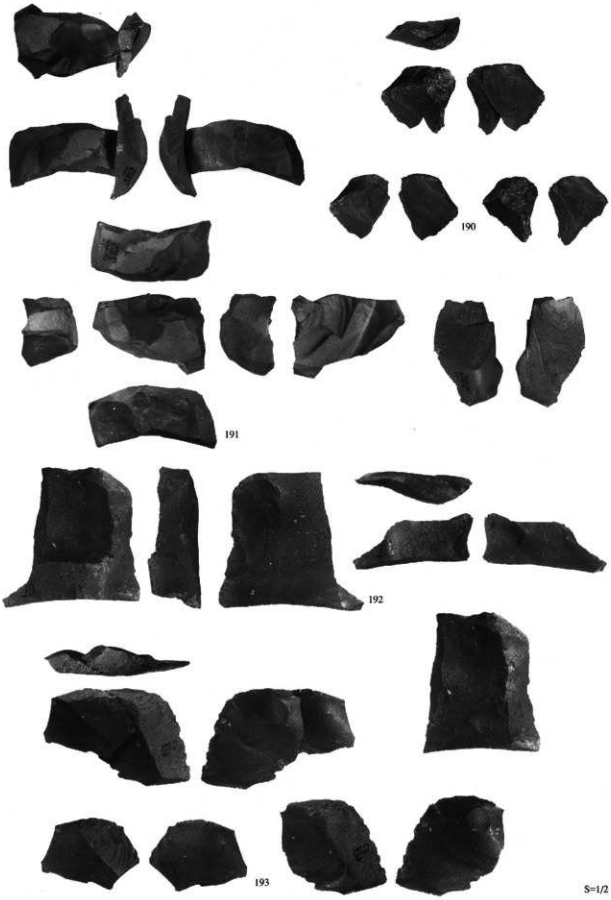
写真図版 19　出土石器 1



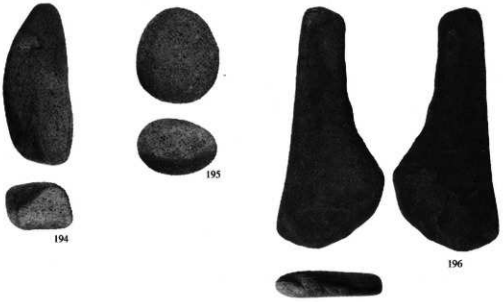
写真図版 20　出土石器 2



写真図版 21　出土石器 3



写真図版 22　出土石器 4

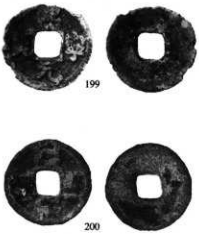


S=1/3

S=1/1

写真図版 23　出土石器 5、出土金属器 1

198



199

200

S=1/3

写真図版 24　出土金属器 2、銭貨

Ⅳ 長根Ⅰ遺跡

1 遺跡の立地

長根Ⅰ遺跡は北上川左岸に形成された沖積平野の微高地上に立地する。遺跡の範囲は南北約700 m東西約200 mで、調査区はこの北西端、微高地の辺縁部にあたる。そのため、調査区南側中央部が平場となる以外は扇状に広がる斜面地で、斜面下部はより傾斜がきつくなっている。

第45図　遺跡範囲図

2　基　本　層　序（第46図、写真図版26）

調査区内の地形は南東から北西に向かって緩やかに下る緩斜面となっている。現表土（0層）上面の標高は基本層序を確認した箇所で、斜面上部（南側）が69.10 m、斜面下部（北側）が67.30 mである（2点間の水平距離は17 m）。旧表土である黒色土（1層）が残存しているのは調査区内でも標高の高い南側の中央のみで、ここ以外は表土下すぐに地山層である褐色土となる。地山層は、やや粘土質な層（16～18・20層）を挟み、その上位と下位は砂質シルトと砂の互層となっている（2～15層・21～24層）。斜面下端（北側）で確認したところ現表土上面から3 mほどで砂礫層となる。これらの地山層は現表土上面の傾斜よりも緩やかに堆積している。そして、上述の通り旧表土が残るのは斜面上部のみで、斜面下部へ行くにしたがって地山の上部層が現表土に侵食されていく。このことから斜面の下部ほど削平を受けていることがわかる。さらに斜面下端では氾濫などによるものか、調査範囲を囲むように北側から西側へかけて大きく侵食されており（a～j層）、より傾斜がきつくなる。

3　野外調査と室内整理

（1）野　外　調　査

調査区（第47図）

調査区は遺跡範囲の北西端に位置し、東西約90 m、南北の最大幅20 m程度、面積931 ㎡を対象とした。

グリッドの設定（第47図）

グリッドの設定については、平面直角座標第X系（世界測地系）を用いて基準点2点、補点4点を打設した。これを基本として一辺5×5 mのグリッドを組み、北から南へ算用数字の1・2・・・西から東へアルファベット小文字のa・b・c・・・として「1 a」「2 b」と表した。また、墓壙が密集する区域ではさらに1×1 mの小グリッドを用いて遺構の位置を示した（第47図）。

粗掘り・遺構検出

調査区内に任意に試掘トレンチを設定し人力掘削を行い、土層の堆積状況と遺構検出面を観察した。その結果、黒色土の残る範囲は少なく、ほとんどの区域で褐色の地山層まで後世の掘削が及んでいることが判明した。そのため地山層上面まで重機で掘削し、表土除去後、鋤簾・両刃草刈り・移植ベラを用いて遺構検出作業を行った。

遺構名のつけ方（第13表）

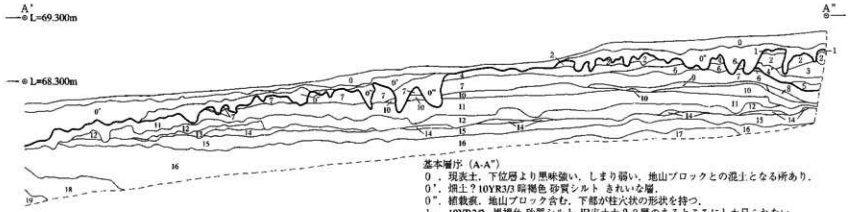
野外調査においては遺構種類ごとに名称をつけた。「略号-番号」の順で、墓壙は「SK01」、柱穴は「p3」というようになる。室内整理時には、検出時に命名した名称を変更することなく使用したが、調査・整理作業の過程で墓壙に欠番が生じたため、報告書掲載時には新たに掲載名称をつけた。

遺構精査・遺物の取り上げ

柱穴の精査は2分法を用いた。墓壙は、重複が激しく検出状況から新旧を把握しきれなかったため、重複していると想定される箇所にベルトを設定し同時的に掘り下げて行った。墓壙内の遺物は極力出土地点を記録するよう勤めたが、調査期間の都合により後半は、遺構ごとに一括で取り上げてしまったものも多い。

実測

遺構の実測は平面図及び断面図の作成を行った。平面実測は、遺構が密集し精査を平行してすすめ



基本層序（A-A"）

0．現表土．下位層より黒味強い．しまり弱い．地山ブロックとの混土となる所あり．
0'．畑土？10YR3/3 暗褐色 砂質シルト きれいな層．
0"．植栽痕．地山ブロック含む．下部が柱穴状の形状を持つ．
1．10YR2/2 黒褐色 砂質シルト 旧表土か？2層のあるところにしか見られない．
2．10YR4/4 褐色 砂(やや粗い) 3層より粒径大きい粗い砂．乾くと白くなり高い所にのみ残存する．
3．10YR4/6 褐色 砂 やや白っぽい．
4．10YR4/6 褐色 砂質シルト 赤味強い．
4'．4層と似るが粗い砂はいる．砂と言うより小礫に近い．13層のものに似るがやや砂っぽいか？
5．4層と似る．
6．10YR4/4 褐色 シルト(やや砂質)
7．10YR4/4 褐色 砂
8．10YR4/6 褐色 砂質シルト
9．10YR3/4 暗褐色 砂
10．10YR4/4 褐色 砂白っぽく3層と似るがやや暗い．
11．10YR3/4 暗褐色 シルト しまりややあり．粘性ややあり．炭化物微量．
12．10YR4/6 褐色 シルト しまり11層よりは弱い．粘性ややあり．炭化物極微量．
13．10YR4/6 褐色 シルト 白い小礫(径～5mm程度)多量．砂少量・炭化物微量含む．
14．12層と砂の混土．下方(北へ)行くにしたがって砂多くなる．
15．10YR4/6 褐色 シルト(やや砂質) 12層に似るがやや砂質．
16．10YR4/6 褐色 粘土質シルト しまり粘性あり．炭化物極微量．
17．10YR4/6 褐色 シルト(やや砂質) 15層似る．
18．10YR4/6 褐色 粘土質シルト 10YR5/6 黄褐色粘土質シルトブロック少量含む．粒径大きい．
19．17層に似るがやや砂質．
20．10YR4/6 褐色 粘土質シルト しまり粘性あり．
21～24．上部10YR4/6 褐色砂質シルト層．下部白味の強い砂層．

a．10YR4/4 褐色 シルト(やや砂質) 赤味強い．
b．10YR3/4 暗褐色 シルト(やや砂質)
c．10YR4/4 褐色 aに似るが黒味強い．
d．10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト しまり-粘性ややあり．
e．c層に似る．
f．10YR3/4 暗褐色 上部に砂．下部に黒いシルト(やや砂質)
g．c層に似る．
h．10YR3/4 暗褐色 上部にシルト(やや砂質)．下部に砂．
i．b層に似るがやや明るい．
j．f層に似る．

0 1/50 2m

第49図 基本層序

たため、光波トランシットによる計測を採用している。縮尺は1/20を基本とした。土層注記の層中混入物の量は、おおむね極微量1％以下、微量1～5％、少量5～10％、やや多量10～30％、多量30～50％、大量50％以上としている。

写真撮影

各遺構の全景・断面・遺物出土状況などの写真撮影は、メインカメラとして中判カメラ（モノクロ）、サブカメラとして35㎜判カメラ（モノクロ・リバーサル）を使用した。また、デジタルカメラはメモ用として調査過程などの撮影に用いたが、人骨・遺物の出土状況はこれで撮影したものも積極的に掲載した。

野外調査の経過

8月19日より調査員1名、作業員13名で野外調査を開始した。20日より試掘、24日には重機による表土掘削、同時に人力による検出作業を行った。26日には検出を終了し遺構精査に入った。その後調査を進め、9月1日に終了確認、3日には危険箇所のみ人力による埋戻しを行い、調査を終了した。

（2）室　内　整　理

遺物の処理

遺物は全点登録した。釘は表掲載のみで、これ以外は基本的に実測したが、鉄製品・玉の一部、鉄銭は写真掲載とした。遺物の番号は取り上げ時に種類ごとに仮番号をつけたが、室内整理段階で種類変更となるものが多かったため、再度種類別に番号を付した。その後編集段階で遺構別に並べ、順に番号をつけ掲載番号とした。

遺構の処理

遺構の実測図は整理及び点検を行った後に、必要に応じて図面を合成し第二原図を作成し、これをもとにトレースを進めた。

図版について

柱穴列は平面とエレベーション図を掲載した。墓壙は重複が激しいため、墓壙群全体図に断面図を付し、個々の遺構には平面図と垂直分布図を作成した。垂直分布図は人骨のほぼ中央で東西・南北でそれぞれ2分割し、4方展開の分布を示した。遺構図版には縮尺率を表すスケールと方位を付したが、柱穴列は1/60、墓壙は1/20と1/40となる。遺物は、基本的に遺構別に掲載した。縮尺は土器・キセルを1/3とし、銭貨・玉を原寸、この他を1/2とした。なお遺物写真図版の掲載番号は遺物図版と統一している。また人骨写真は、10㎝スケールを写し込み、任意縮尺とした。

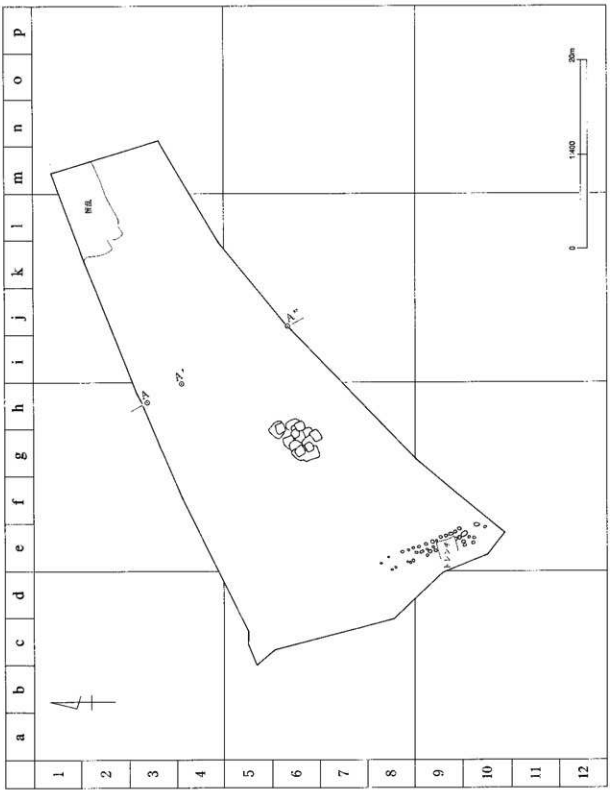
室内整理

平成16年11月1日、調査員1名のみで室内整理を開始した。出土遺物の洗浄後、写真撮影・実測・トレースの順で進めた。記名は行なっていない。これに並行して遺構の第二原図作成・トレースも進め、その後図版組の作業へと移り、同年11月30日で作業を終了した。

4　検出遺構と出土遺物

（1）概　　要

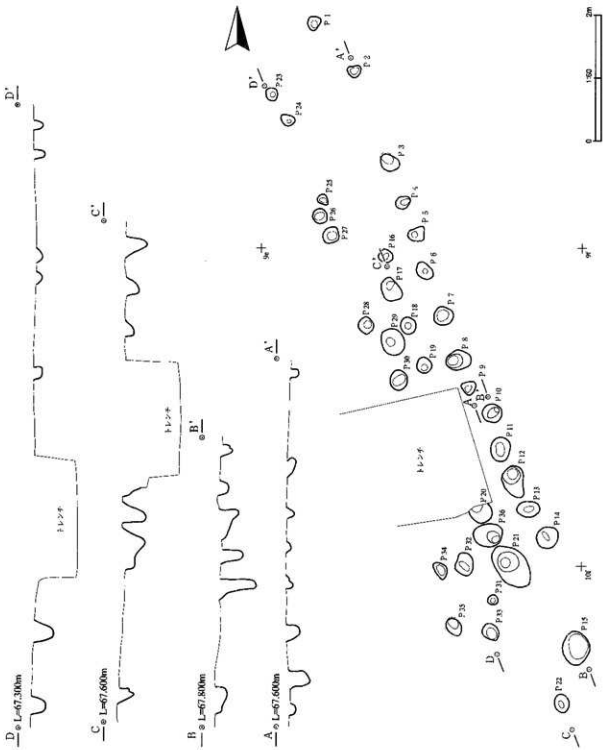
今回の調査で検出された遺構は時期不明の柱穴列3列、近世以降の墓壙16基である。柱穴列は調査区西側、墓壙は調査区ほぼ中央に分布する



第47図　調査区全体図

（2）柱　穴　列（第48図、写真図版27）

調査区西側（8 d ～ 10 f グリッド付近）、傾斜が急になる落ち際に柱穴状土坑が35基検出された。これらの埋土は暗褐色（黒褐色）と褐色土の混土で構成され、混入状態・土質の違いにより4種類に分類される（A～D）。柱痕は確認できなかった。柱穴の開口部径は20～30cm程度のものがもっとも多い。一方底部は10～15cmほどとV字状に近い断面形を持ち、杭痕の可能性がある。これらは、斜面の等高線に沿って南北方向に列をなし、ほぼ並行して3列確認された。しかし、各列とも一直線



第48図　柱穴列

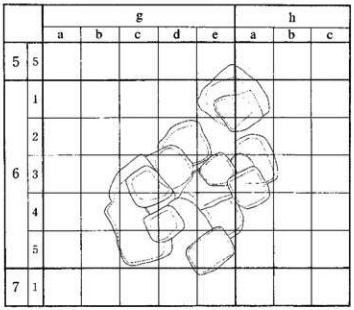
状にはならばずやや角度をもつこと、東西方向には対応しないことから、おそらく柵の役割を果たしたものと思われる。出土遺物がなく時期は不明である。

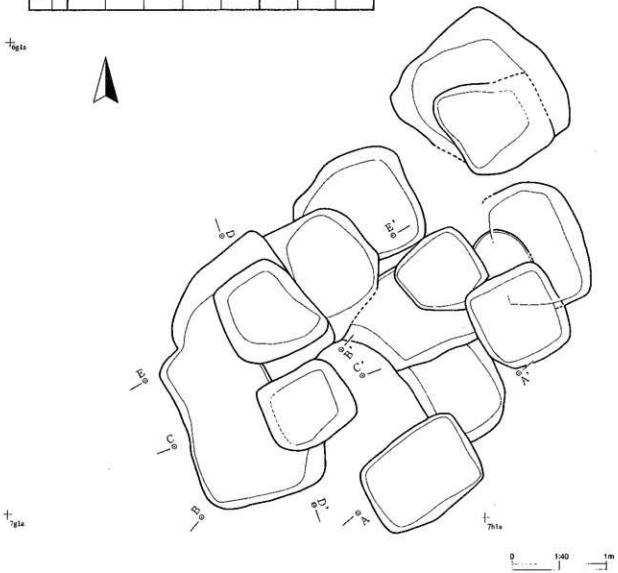
第12表　柱穴一覧表

番号	グリッド	規模(cm)	底面標高（m）	検出面標高(m)	深さ(cm)（検出面 - 底面）	堀土	備　考
1	8 e	22 × 22	65.811	65.991	18.0	D	
2	8 e	18 × 20	65.949	66.099	15.0	B	
3	8 e	25 × 30	66.016	66.138	12.2	A	
4	8 e	18 × 25	66.024	66.170	14.6	A	
5	8 e	22 × 24	66.101	66.209	10.8	A	
6	9 e	29 × 22	66.050	66.191	14.1	A	やや地山ブロック多い
7	9 e	28 × 29	65.954	66.207	25.3	B	
8	9 e	30 × 40	65.783	66.164	38.1	B	
9	9 e	22 × 21	65.988	66.090	10.2	B	
10	9 c	29 × 31	66.069	66.250	18.1	A	
11	9 e	36 × 29	66.078	66.278	20.0	A	
12	9 e	53 × 32	65.957	66.236	27.9	C	
13	9 e	25 × 35	65.849	66.257	40.8	C	
14	9 e	36 × 37	65.694	66.329	63.5	C	
15	10 e・10 f	55 × 44	66.161	66.372	21.1	A	
16	9 e	21 × 22	65.898	65.985	8.7	A	
17	9 c	37 × 30	65.628	65.967	33.9	C	
18	9 e	28 × 22	65.762	65.950	18.8	B	
19	9 e	26 × 22	65.845	65.965	12.0	A	
20	9 e	(30) × 34	65.618	66.026	40.8	C	
21	9 e・10 e	77 × 45	65.660	66.117	45.7	C	
22	10 e	30 × 22	65.845	66.136	29.1	A	色調やや茶味
23	8 e	20 × 18	65.625	65.791	16.6	D	
24	8 e	21 × 22	65.628	65.774	14.6	D	
25	8 c	18 × 15	65.658	65.770	11.2	D	
26	8 e	25 × 23	65.578	65.749	17.1	D	
27	8 e	25 × 25	65.650	65.765	11.5	D	
28	9 e	28 × 25	65.619	65.770	15.1	D	
29	9 e	43 × 35	65.698	65.929	23.1	B	
30	9 e	33 × 26	65.660	65.859	19.9	D	
31	9 e・10 e	38 × 30	65.430	65.840	41.0	B	
32	10 e	15 × 15	65.805	65.901	9.6	D	
33	10 e	42 × 25	65.550	65.895	34.5	D	
34	9 c・10 e	29 × 18	65.238	65.580	34.2	D	
35	10 e	30 × 21	65.137	65.355	21.8	D	
36	9 e	45 × 36	65.805	65.901	9.6	―	

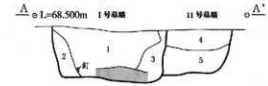
（堀）
A：10YR3/4 暗褐色砂と 10YR4/4 褐色砂質シルトの混土（周囲の地山が砂質シルト）
B：10YR3/4 暗褐色砂と 10YR4/4 褐色粘土の混土（周囲の地山が粘土）
C：上部 10YR3/2 黒褐色砂質シルト・下部 10YR4/4 褐色粘土
D：10YR3/4 暗褐色砂　10YR4/4 褐色粘土少量

（3）墓壙

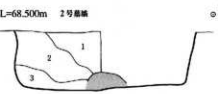




第49図　墓壙全体図

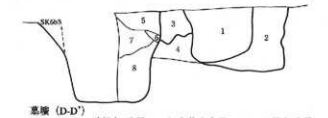


墓壙（A-A'）
1．10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 10YR4/6 褐色砂質シルトブロック多量．やや密状．
2．10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 1層より暗い．混入物無くきれいな層．
3．1層に似るが10YR4/6 褐色砂質シルト少量．
4．3層に似るが10YR4/6 褐色砂質シルトが斑状に混じる．
5．1層に似る。

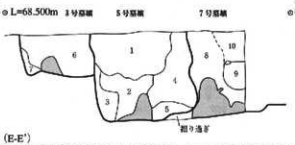


墓壙（B-B'）
1．10YR3/4 暗褐色砂質シルト 10YR3/3 暗褐色に近い．10YR4/6 褐色砂質シルト大量．
2．10YR3/4 暗褐色砂質シルト 10YR3/3 暗褐色に近い．10YR4/6 褐色砂質シルト極微量．
3．2層より10YR4/6 褐色砂質シルトブロック大きく量も多い(微量)．

墓壙（C-C'）
1．=D-D'1層．
2．B-B'2層に似る．10YR4/4 褐色砂質シルトブロック微量(粒径大きい)．
3．B-B'3層に似る．

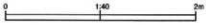


墓壙（D-D'）
1．10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 主体土少量・10YR4/4 褐色砂質シルト大量・10YR4/6 褐色　砂質シルトやや多量等状にはいる．
2．10YR4/4 褐色 砂質シルト やや暗い．10YR4/6 褐色砂質シルト極微量．
3．10YR3/4 暗褐色・10YR4/4 褐色・10YR4/6 褐色(全て砂質シルト)の混土．
4．10YR4/6 褐色 砂質シルト(砂質度強い) 地山？
5．10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト少量(径2～3と3cm)．炭化物含む．
6．10YR4/4 褐色 砂質シルト層．
7．10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 10YR5/6 黄褐色粘土ブロック極微量．
8．10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 10YR4/6 褐色粘土多量斑状に混じる．5層より粒径大きい．



人骨

墓壙（E-E'）
1．10YR3/4 暗褐色 砂質シルト しまり弱い．10YR4/6 褐色粘土質シルト細かく(径～2cm)微量．10YR4/6 褐色砂質シルト粒子含有．
2．10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 1層に似るが10YR4/6 褐色粘土の粒径大きくなる．
3．10YR3/4 暗褐色 砂質シルト しまりややあり．10YR4/6 褐色粘土質シルトブロック大量．
4．10YR3/4 暗褐色 砂質シルト しまりややあり．10YR4/6 褐色粘土質シルトブロック大量だが3層よりは少ない．
5．2層に似るが粘土質シルトブロック極微量．
6．10YR4/4 褐色 砂質シルト 10YR4/6 褐色砂質シルトブロック少量．
7．10YR4/4 褐色 砂質シルト きれいな層．
8．1層に似る．
9．4層に似るが10YR4/6 褐色 砂質シルトブロック混じる．



第 50 図　墓壙断面図

1号墓壙（第50～52図、写真図版29・31・33・36）

〈位置・検出状況・重複〉6ｇ－5ｅグリッド付近に位置する。11号墓壙と重複しており、検出時の平面形及び断面の埋土堆積状況から本遺構が新しいことを確認した。

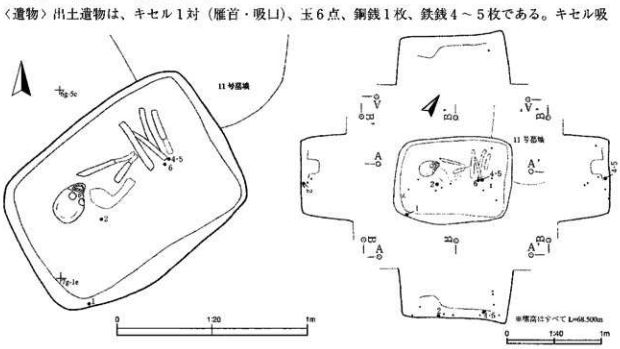
〈規模・形状〉開口部径123×92㎝、長方形である。底面はほぼ平坦であるが、北東側へ向かってやや斜降する。検出面からの深さは、西側50㎝、東側55㎝、壁はほぼ直立する。主軸方位は、N―126°―Wである。

〈埋土〉10YR3/4 暗褐色砂質シルトを主体とする。（第50図A-A'）西壁際（2層）は混入物がほとんどなく、東壁際（3層）は褐色土を少量含み、その上を1層が覆う。1層は褐色土を帯状に混入しており、東西両端から中央へ向かってU字状に傾斜する。恐らく棺の上蓋が腐敗・崩落した際に上位から落ち込んだ層と推定する。2・3層は釘・人骨の出土位置から掘方埋土と判断されるが、3層は、人骨上位にも堆積していることから、側板の腐敗（・崩落）に伴い掘方埋土が棺内へ流入しているようである。

〈人骨〉遺構内中央、やや北よりに出土した。人骨の残存状態は良好で、埋葬時の姿勢をほぼ保つものと思われる。仰臥屈葬で南西方向を主軸とする（N―123°―W）。顔は北東を向く。残存する部位は頭骨・四肢骨・椎骨を確認したが、肋骨・寛骨などははっきりしない。鑑定の結果、年齢は熟年程度、性別は女性と判断された。

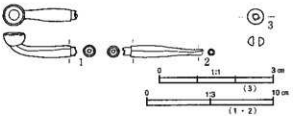
〈釘・棺〉重複範囲も含め12点の出土地点を把握した。このうち7点（205～211）は、位置は押さえたものの、取り上げる際に遺物を一括してしまった。しかし本遺構内出土総点数が12点のため、墓壙群一括のものがあるとしても大半の位置を押さえることができたと思われる。北半ではほとんど出土していないが南側は人骨の外側に沿うように、底面近くからの出土が多い（A-A'）。また底面から約10～15cmほど上に南西・南東・北東隅で3点が確認された。これらの釘はおおよそ棺の規模を表しているものと思われる。釘には木質が付いていることから木棺で、規模40×80㎝程度の長方形、高さは25㎝以上あったものと想定される。棺は西側の底面にあわせて据えられ、底板は67.87ｍ付近に位置するであろう。南東隅では釘の位置が、上方ほど南側へ傾く（B-B'）ため南側板はやや外側へ開いて崩落した可能性がある。

〈遺物〉出土遺物は、キセル1対（雁首・吸口）、玉6点、銅銭1枚、鉄銭4～5枚である。キセル吸



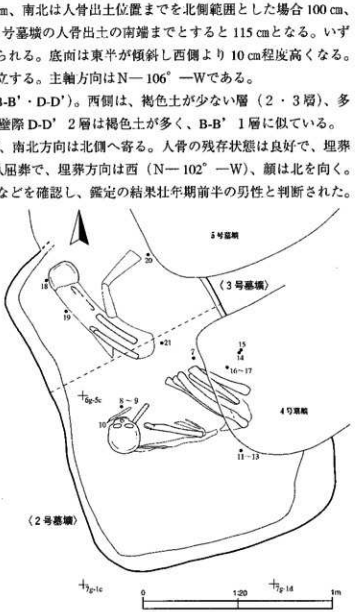
第51図　1号墓壙

口は右肩上、雁首は土坑南西隅、銭は脚部の右側より出土し、キセル雁首以外は底板付近に位置する。キセルは脂返しの沸曲が小さく、銅銭は寛永通寶（銭種不明）である。
〈時期〉出土遺物より18世紀後半以降の年代が想定される。



第52図　1号墓壙出土遺物

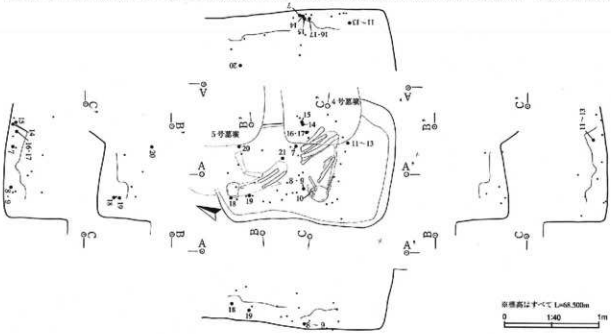
2号墓壙（第50・53～56図、写真図版29・33・36）
〈位置・検出状況・重複〉6ｇ－5ｃグリッド付近に位置し、3・4号墓壙と重複する。検出時の平面形及び断面から、4号墓壙が本遺構を切ると判断したが、3号墓壙との新旧関係は確認できなかった。しかし、検出時に見えた土質の違う境界線（破線部）が、3号墓壙の骨出土範囲にまで及ぶため、本遺構の方が新しい可能性がある。断面の堆積状況からの新旧関係は把握してない。
〈規模・形状〉開口部の東西径は推定137㎝、南北は人骨出土位置までを北側範囲とした場合100㎝、検出時の境界線を上端とすると120㎝、3号墓壙の人骨出土の南端までとすると115㎝となる。いずれにせよ、形状はおおむね長方形と考えられる。底面は東半が傾斜し西側より10㎝程度高くなる。検出面からの深さは約65㎝、壁はほぼ直立する。主軸方向はN―106°―Wである。
〈埋土〉暗褐色土を主体とする（第50図B-B'・D-D'）。西側は、褐色土が少ない層（2・3層）、多い層（1層）の順に堆積する（B-B'）。東壁際D-D'2層は褐色土が多く、B-B'1層に似ている。
〈人骨〉東西方向はほぼ中央に位置するが、南北方向は北側へ寄る。人骨の残存状態は良好で、埋葬時の姿勢をほぼ保つものと思われる。側臥屈葬で、埋葬方向は西（N―102°―W）、顔は北を向く。残存する部位は頭骨・四肢骨・椎骨・寛骨などを確認し、鑑定の結果壮年期前半の男性と判断された。
〈釘・棺〉重複範囲を含め24点の出土位置を把握し、1点を一括で取り上げた。釘は、人骨の周りを囲んでおり、また木質が付着していることから、埋葬には木棺が用いられたものと推定される。底面67.70ｍ付近で釘・遺物が集中するためこの位置が底板と考えられる。南側では釘がこの高さで一列に並ぶ（C-C'）。一方北側では68.05ｍ付近でそろっており、埋土の観察が不十分で棺の崩落状況を把握してしないが、上蓋もしくは側板上部に打たれたものと思われる。北西隅で下部に釘が集中するのは4号墓壙構築時に攪乱されたためであろう。以上釘の位置から棺の規模は86×45cm、高さは35cm以上と推定される。
〈解釈〉検出時の上端が本遺構のものとすると、4号墓壙を挟み西壁が南北で対



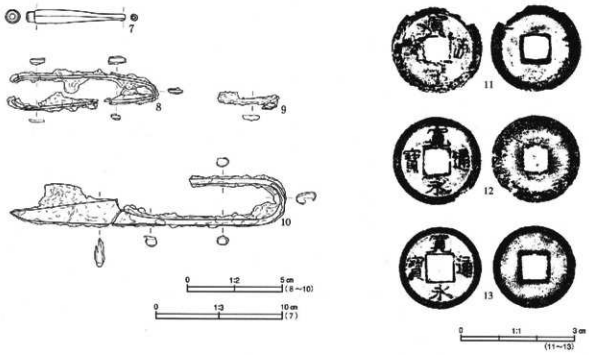
第53図　2・3号墓壙(1)

応せず、その上、他の墓壙よりも短径が長くなる（120 cm）。当然、3号墓壙完成後に本遺構が掘削されたことになるため、仮に掘り下げていた途中に墓壙内と気づき、南側へ場所を移したとしても、北側に偏って埋葬するのはやや不自然に感じる。そのため、南北に2基重複していた可能性も考えられる。南半には人骨・遺物など一点も確認されていないが、南→北の順で構築され、南側の墓壙内遺物は腐食してしまったと解釈すると、墓壙の規模は、北側の長径が 100 cm、南側が 137 cm、短径は両遺構とも 80 cm程度であろう。このとき D-D' 2層は南側墓壙の埋土となる。

〈遺物〉出土遺物は、キセル吸口1点、鉄製品3点（毛抜き2点・鋏1点）、銅銭3枚である。これに加え、



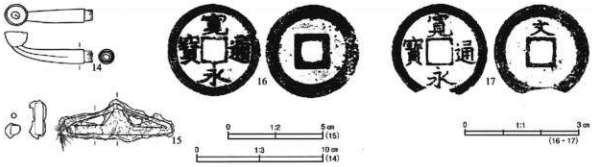
第54図　2・3号墓壙(2)



第55図　2号墓壙出土遺物

4号墓壙との重複部にてキセル雁首1点、火打金1点、銭貨2枚が出土しており、これらは4号墓壙の棺外に位置することから本遺構に伴う可能性が高い。特に4号墓壙の底面より低い位置で出土したキセルは元位置を保っていると判断したい。以上のことから、副葬品は、鉄が頭部顔面付近、キセルが足元（吸い口が膝側）に置かれていたものと思われる。キセルは脂返しの湾曲は小さいもので、銅銭は重複部より出土したものも含めると古寛永・文銭が各1枚、新寛永3枚である。

〈時期〉出土遺物より17世紀末葉以降の年代が想定される。



第56図　2号・4号墓壙出土遺物

3号墓壙（第50・53・54・57図、写真図版29・33・38）

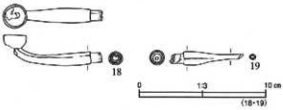
〈位置・検出状況・重複〉6ｇ－4ｄグリッド付近に位置する。2～5号墓壙と重複しており、検出時の平面形または埋土の堆積状況より4・5号墓壙の方が新しいと判断した。上述のとおり、2号墓壙との新旧関係ははっきりしないが、本遺構の方が古い可能性がある。

〈規模・形状〉南壁および北西壁を重複により消失する。開口部径は東西102cm、南北は人骨の残存部までで90cm、方形である。底面は北西部が高く南東部へ向かって緩やかに下がる。検出面からの深さは50～60cm程度、壁は直立する。主軸方位は、N－26°－Wである。

〈埋土〉埋土は壁際でのみ観察できた。西壁際は、暗褐色土と褐色土の混土（第50図D-D'）、北壁際は褐色土が堆積する（第50図E-E'）。

〈人骨〉東西壁のやや西よりに出土した。南北位置は南壁が確認できなかったため不明である。頭骨と四肢骨が残存し埋葬時の姿勢をほぼ保つものと思われるが、表面がボロボロともろく、各部位の形状をはっきりと把握できなかった。側臥屈葬で北西方向を主軸とする（N－47°－W）。顔は調査時点では肢体の状況から東側を向くと思っていたが、残存状態の良かった下半側が右側頭骨であったため西側を向いていた可能性が高い。しかし、体が西側を向いていたとすると肢体の東側、やや不自然な位置に四肢長骨がみられる。鑑定の結果、年齢は熟年以上、性別は男性と判断された。

〈釘・棺〉重複範囲も含め18点の出土地点を把握したものの、このうち8点は標高の記録を欠いてしまった。また、断面観察した第50図E-E'以北は3・5・6号墓壙一括で40点取り上げてしまった。しかし本遺構に関しては北隅のみでありこれらの大半は5・6号墓壙からの出土と考えられる。釘の平面位置は、西側が人骨に沿っているが東側はやや離れる。東西幅は55cm程度である。一方南北は両端と人骨に沿い、長さ66cmとなる。人骨上面にも釘がのっているため、腐食に伴い棺の上蓋が落ち崩れた可能性が高い。また、底板は67.80m付近に位置すると推定される。

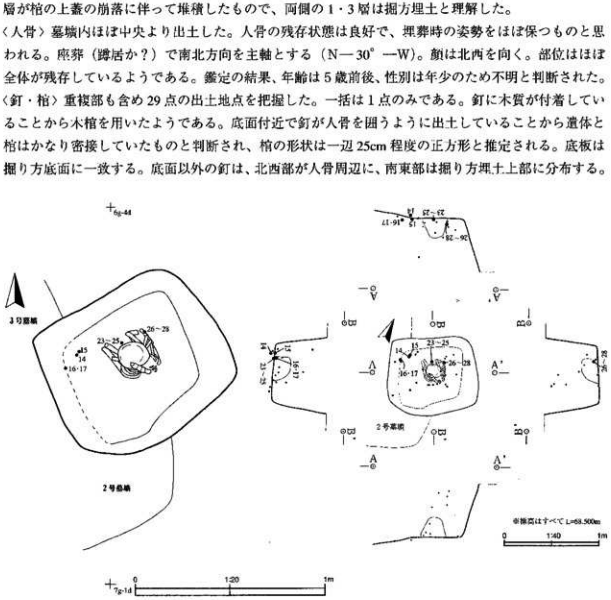


第57図　3号墓壙出土遺物

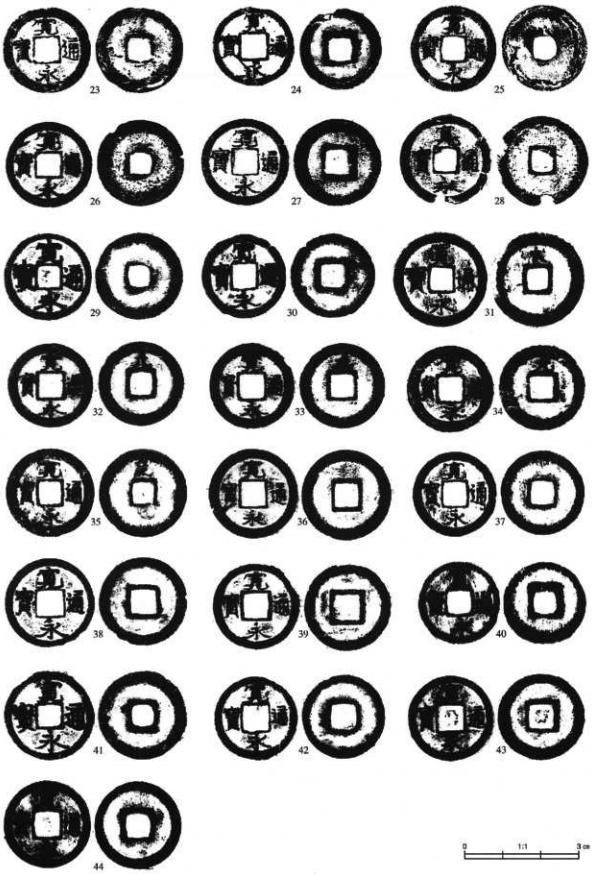
〈遺物〉キセル1対（雁首・吸口）が頭部付近（吸

口が頭部側）から、棒状・板状鉄製品は脚部？付近から出土している。キセル脂返しの湾曲は小さい。
〈時期〉出土遺物より 17 世紀末葉以降の年代が想定される。

4号墓壙（第 50・56・58・59 図、写真図版 29・33・37）
〈位置・検出状況・重複〉6 g－4 d グリッド付近に位置する。2・3号墓壙と重複しており、検出時の状況から本遺構のほうが新しいと判断した。
〈規模・形状〉開口部径 95 × 82cm、正方形である。底面は平坦で、南側へ傾斜する。検出面からの深さは北側 53cm、南側は 58cm、壁は西～南壁がやや外傾するもののほぼ直立する。主軸方位は、N―29°―Wである。
〈埋土〉10YR3/4 暗褐色砂質シルトを主体とし、埋土上部から下部へと縦3層にわかれる（第 50 図 c - c'）。中央にやや暗い層（10YR3/3 暗褐色に近い）を挟む。1層は主体土と 10YR3/3 暗褐色砂質シルトが横シマ状に堆積するが、2・3層はこれらがブロックで混じっている。このため埋土観察時は、1層が2号墓壙埋土の可能性があると考えていたが、検出時の平面形、遺物・人骨の出土状況から2層が棺の上蓋の崩落に伴って堆積したもので、両側の1・3層は掘方埋土と理解した。
〈人骨〉墓壙内ほぼ中央より出土した。人骨の残存状態は良好で、埋葬時の姿勢をほぼ保つものと思われる。座葬（蹲居か？）で南北方向を主軸とする（N―30°―W）。顔は北西を向く。部位はほぼ全体が残存しているようである。鑑定の結果、年齢は5歳前後、性別は年少のため不明と判断された。
〈釘・棺〉重複部も含め 29 点の出土地点を把握した。一括は1点のみである。釘に木質が付着していることから木棺を用いたようである。底面付近で釘が人骨を囲うように出土していることから遺体と棺はかなり密接していたものと判断され、棺の形状は一辺 25cm 程度の正方形と推定される。底板は掘り方底面に一致する。底面以外の釘は、北西部が人骨周辺に、南東部は掘り方埋土上部に分布する。



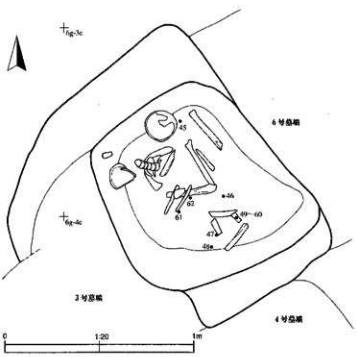
第 58 図　4号墓壙



第 59 図　4 号墓壙出土遺物

埋土の堆積状況は２・３層がブロック状の混土となっており、両層の境界がやや３層側（東側）に膨らむ。以上のことから、上蓋は南東側から北西側へと崩落したものと考えられる。
〈遺物〉人骨の両足の間と右足付近から各３枚、計６枚銅銭が出土する。銅銭はすべて新寛永である。掘り方北西部のキセル一対・銅銭・鉄銭は上述（２号墓壙記載）のとおり本遺構に伴わないものと判断したい。また、銅銭29～44は、出土位置の記録も調査時においての記憶もない。一方、12号墓壙人骨右脇で銭が出土している記録があるものの、こちらは遺物が存在しない。整理の途中に混乱し遺構名の記載を間違った可能性が高い。どちらの遺構に伴うものか断定できないため、３号墓壙に掲載したが、時期などを特定する判断資料としては採用しないこととした。
〈時期〉出土遺物より17世紀末葉以降の年代が想定される。

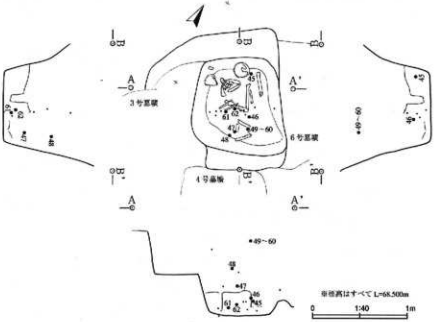
５ａ～ｃ号墓壙（第50・60～62図、写真図版29・30・33・34・38）
〈位置・検出状況・重複〉６ｇ－３ｃグリッド付近に位置する。３・６号墓壙と重複、４号墓壙とも接している。断面形から３号墓壙より新しいと判断したが、６号土壙との重複部の壁が垂直に立ち上がるため新旧がはっきりしない。人骨の出土位置から判断すると、本遺構が新しい可能性がある。
〈規模・形状〉最大３基の重複が想定される。人骨が出土する掘方の径は102×99㎝、正方形である（ａ）。北側から西側にかけてａの墓壙底面より高い位置に平場を設ける。残存する長径は140cm、幅は27cm以上の方形で、北西隅は丸みを帯びる（ｂ）。さらにａの南壁は底面から直立するが、上部が外反する。これも別遺構の可能性がある（ｃ）。残存値は東西84cm、南北24cmとなる。これらの新旧関係は、人骨の残存状態からａが新、ｂｃが旧と判断したい。このとき、他の重複遺構との新旧関係を考えると、検出時の平面形、断面からａが３号墓壙（６号墓壙？）を、３号墓壙がｂを切ると判断したい。底面はａｂともほぼ平坦、検出面からの深さは、ａ90cm、ｂ45cmとなる。ａの主軸方位は、Ｎ－34°－Ｗである。
〈埋土〉ａのみ埋土を観察できた。10YR3/4暗褐色砂質シルトを主体とし、10YR4/6褐色砂質シルトブロックを混入する。混入物の量は１・２・５層が少なく、３・４層が多く粒径も大きい。１層と２層はしまりが弱く埋土の状態も似ており、２層は上蓋崩落後１層が流入したものと思われる。
〈人骨〉ａの掘り方内、北よりに出土した。人骨の残存状態は良好で、椎骨の一部とそれ以下は埋葬時の姿勢をほぼ保ち、頭部はこれを中心に左右へ崩落している。また、掘り方南側にも四肢骨片が散る。埋葬姿勢は座葬（胡床？）でＮ－74°－Ｗ主軸とする。顔は南東を向く。残存する部位は頭骨・椎骨・寛骨・四肢骨を確認した。鑑定の結果、年齢は壮年期前半、性別は女性と判断された。
〈釘・棺〉断面観察用ベルト（第50図E-E'）より南側は16点の出土位置を



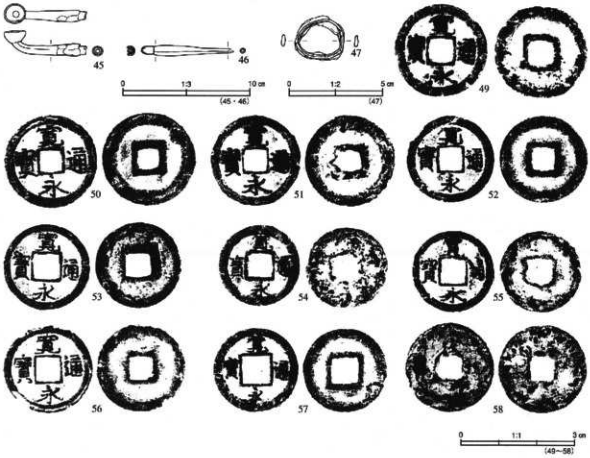
第60図　５号墓壙(1)

把握できたが、北半は調査期間の都合により一括で取り上げた。一括した釘は、本遺構単独で21点、3・5・6号墓壙でまとめて（大半は5・6号墓壙のもの）40点を数える。人骨の南側に沿って東西に一列に並んでいることから方形の棺、釘には木質が付着することから木棺の使用が想定される。これより南側にも骨片が出土しているが、外側に棺が崩れる可能性は低く、重複遺構（bc）のものと考えられる。

〈遺物〉出土遺物はキセル一対、鉄製品2点、銅銭10枚、鉄銭19枚？である。キセルは頭部と脚付近、鉄銭（61・62）も脚付近で、これらは人骨・釘の位置から本遺構に伴うものと判断したい。一方、48～60は人骨より高くに位置し、埋土1層中に含まれると思われる。



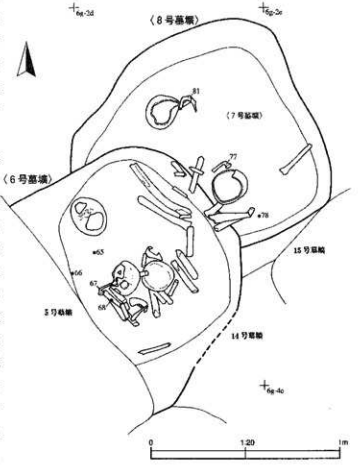
第61図　5号墓壙(2)



第62図　5号墓壙出土遺物

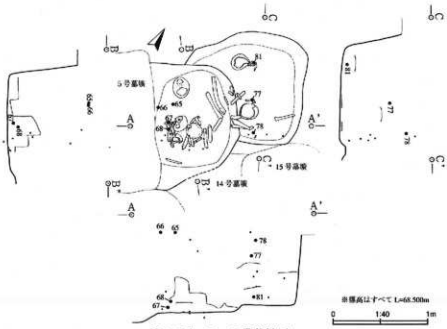
そのため、棺内に収められたものではなく、重複墓壙（bまたはc）範囲を掘削し、再度埋め戻す際に入った可能性がある。棺内には鉄銭のみ、上部には古寛永を含む銅銭（古寛永3枚、新寛永6枚、不明1枚）と鉄銭が出土する。キセルの脂返しはやや湾曲する。
〈時期〉出土遺物より18世紀中頃以降の年代が想定される。

6号墓壙（第50・63～65図、写真図版29・30・34・38・39）
〈位置・検出状況・重複〉6g－3dグリッド付近に位置する。5・7・8・14号墓壙と重複しており、検出時の平面形から7・8・14号墓壙より新しいと判断した。また、人骨の出土状況から5号墓壙より古い可能性があるが、出土遺物からは本遺跡の方が新しい。本遺構自体も頭骨が3個体出土しているため、少なくとも3墓以上が重複しているものと思われる。
〈規模・形状〉開口部の径は南北が135cm、東西は85cm以上である。形状はおおむね方形、底面は隅丸長方形となる。14号墓壙との重複部である南東壁は底面付近まで掘り下がり上半が消失するため丸味を帯びている。底面は平坦、検出面からの深さは75cmで、壁はほぼ直立する。主軸方位は、N－35°－Wである。
〈埋土〉10YR3/3暗褐色砂質シルトを主体とする。10YR4/6褐色砂質シルトを9層に大量、8・10層に細かく微量含む。東半のみしか観察できなかったため詳細は不明であるが、8・10層が類似していて境界がはっきりしなかったことと、人骨の出土状況から、上蓋崩落後9層が下部へ落ち込み、8層がその上位に流れこんだ可能性がある。もしくは、9・10層は新規遺構の掘方埋土で、旧遺構の埋土をそのまま使用したために類似しているとも考えられる。
〈釘・棺〉断面観察用ベルト（第50図E-E'）より南側の11点は出土位置を把握できたが、調査期間の都合により、北側は一括で取り上げた（7・8号墓壙も同様）。一括のものは、単独で24点、5号墓壙との重複範囲で40点、7・8号墓壙とで10点を数える。木質の付着した釘が人骨西側に2点、南側に3点並ぶため木棺の使用が想定される。
〈人骨〉掘方内南側に集中し、一部北側にも出土した。人骨の残存状態は良好であるが、頭骨が3個体分あり、このうち南西（b）と北西（a）の2個体は倒位で出土し遊離した状態と判断される。南東（c）のものは頭骨が正位で出土し、周囲に四肢骨が認められ、人骨の南側には釘が列をなしていることから、埋葬時の姿勢をほぼ保つ可能性が高い。座葬でN－30°－Wを主軸とする。顔は南東を向く。cの残存する部位は調査時に頭骨・四肢骨を確認したものの、四肢骨に関しては取り上げ時にa

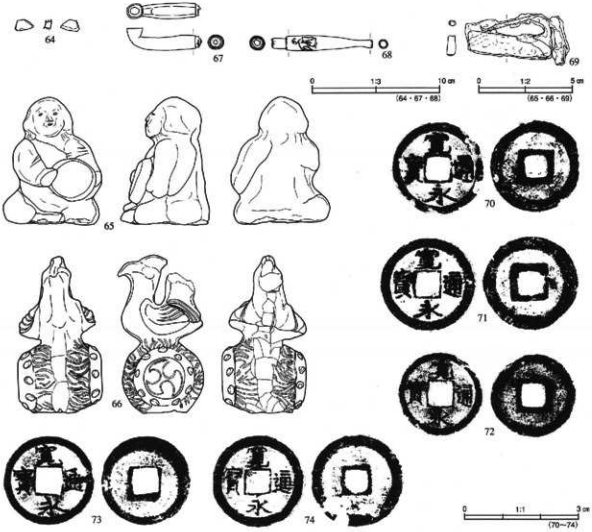


第63図　6～8号墓壙(1)

～ｃを一括してしまったため詳細は不明である。ｃの頭骨を鑑定した結果、熟年以上、性別女性（？）と判断された。また、ｂも頭部は遊離しているものの５号墓壙の例を考えると、座葬で棺崩落時に頭部が落ちた可能性がある。調査時に部位を確認できなかったものの、頭部の下には四肢骨と思われる長骨片もみられ、遺物（キセル）



第64図　６～８号墓壙(2)



第65図　６号墓壙出土遺物

も出土している。そのうえ西側外周に釘が確認された。こちらも埋葬時の姿勢をとどめていたのかもしれない。鑑定の結果、bは年齢15歳前後、性別は男性（的？）、aの頭骨は成人と判断された。人骨の残存状況からこれらの新旧関係を、aがもっとも古く、ついでc・bと考えたい。bとcの新旧は不明である。

〈遺物〉出土遺物は土器1点、土製人形2体、キセル一対、鉄製品（火打ち金・火打ち石）1点、銅銭5枚、鉄銭2箇所（94.68g）である。キセルはbの頭部西側に位置しており、これに伴う可能性が高い。土製人形は検出面からの出土で、bcどちらか新しい遺構に供えられたものであろうか。このほかはすべて一括で取り上げたため、詳細は不明である。キセルは火皿の下に首部が直角に近い状態で接続し、火皿の直径も1.2cmと小さい。吸い口には人物両が線刻される。銅銭は古寛永2枚、新寛永3枚、鉄銭には四文銭が含まれる。

〈時期〉出土遺物より19世紀後半以降の年代が想定される。

7号墓壙（第63・64・66図、写真図版30・32・34・39）

〈位置・検出状況・重複〉6g－2dグリッド付近に位置する。検出時の平面形から6号墓壙に切られる。精査途中に、北側にもう1基重複することが判明し8号墓壙とした。新旧関係は本遺構の方が古いと思われる。

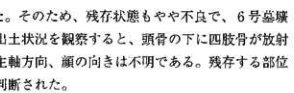
〈規模・形状〉重複遺構を同時的に掘り下げたため、南西部は6号墓壙によって消失、東壁の角度が変わるところから北側は8号墓壙のプランと判断される。残存する範囲は一辺70cm程度の方形である。8号墓壙の北壁西側がやや不整形になり、これが本遺構の北西隅であれば130×85cm程度の長方形となる。底面は平坦、検出面からの深さは65cm程度、壁は直立する。主軸方位は、N―21°―Wである。

〈埋土〉10YR3/4暗褐色砂質シルトを主体とする。

〈人骨〉南西部、6号墓壙との重複部付近に出土した。そのため、残存状態もやや不良で、6号墓壙構築時に攪乱を受けているものと思われる。しかし出土状況を観察すると、頭骨の下に四肢骨が放射状に散乱することから座葬であった可能性がある。主軸方向、顔の向きは不明である。残存する部位は頭骨と四肢骨を確認し、鑑定の結果、壮年以上と判断された。

〈釘・棺〉6点の出土位置を把握し、重複範囲を含め32点を一括で取り上げた。釘には木質が付いていることから木棺が使用されていたと想定される。釘は平面形で東西方向に並ぶものの人骨より東側に位置し、棺の形状など詳細は不明である。

〈遺物〉出土遺物はキセル一対、鉄銭3枚、8号墓壙との一括で鉄銭2枚である。このうちキセルは頭骨より上から出土しており、脂返しはやや湾曲する。



第66図　7号墓壙出土遺物

〈時期〉出土遺物より18世紀中ごろ以降の年代が想定される。

8号墓壙（第63・64・67図、写真図版30・32・34・39）

〈位置・検出状況・重複〉6g－2dグリッド付近に位置する。6・7号墓壙と重複しており、6号墓壙より古く、7号墓壙より新しいと思われる。

〈規模・形状〉重複遺構により南半～西縁を消失する。北西部隅の不整形範囲まで本遺構と判断すると、

東西長 126cm、上述の通り別遺構とすると 90cm 程度となる。南北は 49cm 残存しており、刀形のプランを持つと思われる。底面は平坦、検出面からの深さは 60cm、壁は直立する。主軸方位は、N―19°―Wである。

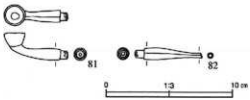
〈埋土〉10YR3/4 暗褐色砂質シルトを主体とする。

〈人骨〉残存状態は不良で、西部から頭骨と四肢骨片のみ出土している。埋葬方法・主軸方向は不明である。鑑定の結果、年令は少なくとも 15 才以上と判断された。

〈釘・棺〉出土地点を把握したものはない。重複遺構との一括で 32 点とりあげた。

〈遺物〉キセル一対が出土しており雁首は頭部付近に位置する。脂返しの湾曲は小さい。このほか鉄銭 2 枚を 7 号墓壙との一括で取り上げた。

〈時期〉出土遺物より 17 世紀末葉以降の年代が想定される。



第 67 図　8 号墓壙出土遺物

9 号墓壙（第 68 ～ 70 図、写真図版 30・34）

〈位置・検出状況・重複〉6 g－1 e グリッド付近に位置する。10 号墓壙と重複しており、埋土堆積状況から本遺構が新しいことを確認した。

〈規模・形状〉開口部径 105 × 99 cm、北西部がややいびつであるが正方形に近い。底面の形状は、10 号墓壙と同時に掘り下げてしまったためはっきりとわからなかったが、検出面からの深さは 85cm、壁は直立する。主軸方位は、N―30°―Wである。

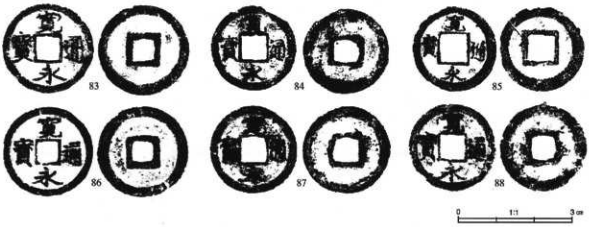
〈埋土〉10YR3/4 暗褐色砂質シルトを主体とし、10YR4/6 褐色砂質シルトを混入する。調査期間の都合により断面の記録を欠いたが、上下 2 層に分けられ、上部は中心へ向かって落ち込むように堆積し、下部層より黒味が強い（写真図版 28）。

〈人骨〉北西部に出土した。人骨の残存状態は不良で、四肢骨（・歯）を残すのみである。このため埋葬姿勢・主軸方向・性別・年齢など詳細は不明である。

〈釘・棺〉出土位置を把握したものは 2 点、これ以外は 10 号墓壙との一括で 13 点取り上げた。釘には木質が付いていることから木棺の使用が想定されるが、棺の規模・形状は不明である。

〈遺物〉銅銭 6 枚が掘り方西壁際より出土した。内訳は古寛永が 2 枚、新寛永が 4 枚である。

〈時期〉出土遺物より 17 世紀末葉以降の年代が想定される。



第 68 図　9 号墓壙出土遺物

10号墓壙（第69・70図、写真図版30）

〈位置・検出状況・重複〉6ｇ－1ｅグリッド付近に位置する。9号墓壙と重複しており、断面の埋土堆積状況から本遺構が古いことを確認した。

〈規模・形状〉開口部径140×160㎝、正方形であるが他の遺構と比較するとやや規模が大きく、9号墓壙重複部の東西プランは別遺構の可能性がある。この場合、長方形の墓壙が2基並列していたと考えられる。底面は平坦、検出面からの深さは95cm、壁はやや外傾して立ち上がる。主軸方位は、N－45°－Wである。

〈埋土〉10YR3/4暗褐色砂質シルトを主体とし10YR4/6褐色砂質シルトを混入する。

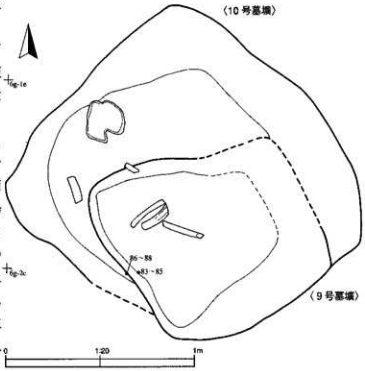
〈人骨〉北西部で出土したが残存状態は不良で、頭骨（歯？）と四肢骨片のみである。このため埋葬姿勢・主軸方向・性別・年齢など詳細は不明である。

〈釘・棺〉出土位置を把握したものが15点、これ以外は9号墓壙との一括で13点取り上げた。釘には木質が付着しており、木棺を使用したと思われる。これらは頭骨を囲むように出土しているが、列をなさず散在しているため棺の形状は不明である。

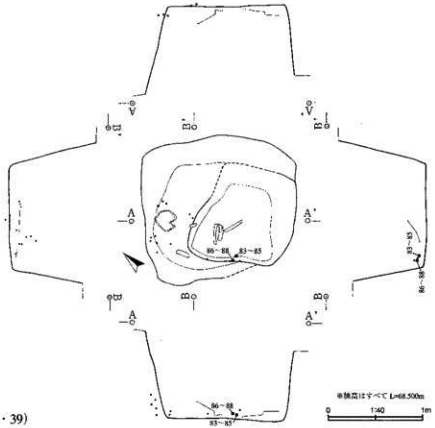
〈遺物〉釘以外は出土していない。

〈時期〉出土遺物がないため詳細は不明だが、周囲の状況から18世紀前後以降の年代が想定される。

11号墓壙（第50・71・72図、写真図版31・32・34・39）

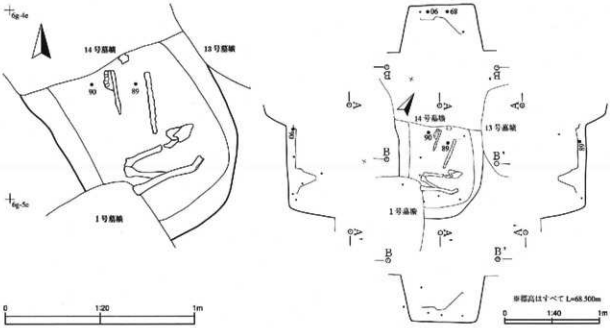


第69図　9・10号墓壙(1)

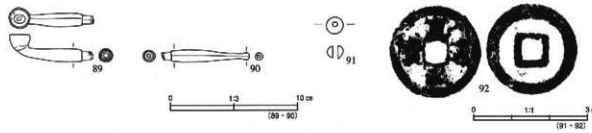


第70図　9・10号墓壙(2)

〈位置・検出状況・重複〉６ｇ－４ｅグリッド付近に位置する。１・13・14号墓壙と重複しており、断面の埋土堆積状況から１・14号墓壙に切られる。13号墓壙との新旧関係は不明である。
〈規模・形状〉長径 101cm 以上、幅 88 ㎝、隅は南東部しか残存しないが長方形または隅丸長方形と思われる。底面は平坦、検出面からの深さは 50cm、壁は直立する。主軸方位は、N－30°－Wである。
〈埋土〉10YR3/4 暗褐色砂質シルトを主体とする。調査期間の都合により断面の記録を欠くが、南北方向にベルトをかけ堆積状況を確認したころ（写真図版 28）、埋土は上部と下部にわかれ、上部には 10YR4/6 褐色砂質シルトがやや多く混入する。
〈人骨〉中央部、東西の掘り方壁に対してやや東へ傾いて出土した。人骨の残存状態は比較的良好で、埋葬時の姿勢をほぼ保つものと思われる。しかし頭部が位置していたものと思われる北側を重複遺構によって壊され、下顎のみ背骨西側に遊離した状態で出土している。仰臥屈葬で北方向を主軸とする（N－7°－W）。頭部がないため顔の方向は不明である。残存する部位は、下顎・椎骨・（寛骨？）・四肢骨を確認した。鑑定の結果、年齢は少なくとも 12 才以上、性別は不明と判断された。
〈釘・棺〉重複範囲も含め８点の出土地点を把握した。一括で取りあげたものは単独で 14 点である。人骨の周囲に釘が巡り、釘には木質が付いていることから長方形の木棺が想定される。棺の規模は長さ 70 ㎝以上、幅は 45cm 程度である。底板は 67.90 m付近に位置し、上蓋までの高さは 30cm 以上あると思われる。棺の側板に対して掘方は平行するが背骨の軸は北東－南西方向にずれており、棺内に斜めに遺体を埋葬したものと思われる。
〈遺物〉出土遺物は、キセル一対、玉２点、銅銭１枚、鉄銭１箇所である。キセルは底板とほぼ同じ



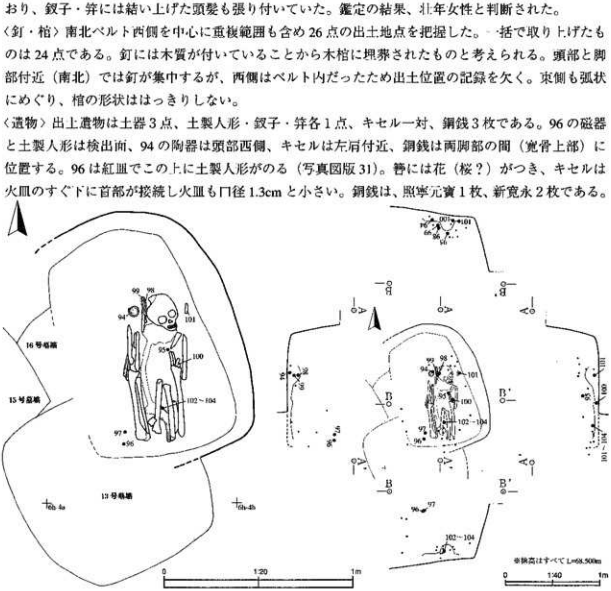
第 71 図　11 号墓壙



第 72 図　11 号墓壙出土遺物

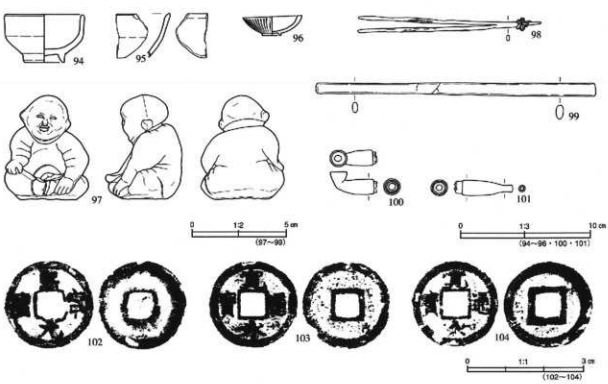
高さで肩付近から頸にかけて出土しており、雁首の脂返しの湾曲は小さい。銅銭は文字がはっきり読み取れないものの古寛永の可能性が高い。
〈時期〉出土遺物より 18 世紀後半以降の年代が想定される。

12 号墓壙（第 73・74 図、写真図版 31・32・34・39）
〈位置・検出状況・重複〉6 h－3 a グリッド付近に位置する。13 号・16 号墓壙と重複しており、検出時の平面形及び人骨の残存状況から本遺構のほうが新しいと判断した。
〈規模・形状〉長径 138cm、幅 85cm（底部径）の長方形である。底面は平坦で検出面からの深さは 55cm、壁は東壁がやや外傾するもののおおむね直立する。主軸方位は、N―14°―Wである。
〈埋土〉調査期間の都合により断面の記録を欠くが、南北方向にベルト（第 73 図 A-A'）を設定したところ 10YR3/4 暗褐色砂質シルトを主体とする。人骨出土付近は 10YR4/6 褐色砂質シルトが細かく混入するが、人骨より北側ではこの褐色土が比較的大きいブロックとなる。
〈人骨〉掘り方南東部で出土した。人骨の残存状態は良好で埋葬時の姿勢をほぼ保つものと思われる。仰臥屈葬で北方向を主軸とする（N―2°―W）。顔は真上からやや西を向く。ほぼ全体が残存しており、釵子・笄には結い上げた頭髪も張り付いていた。鑑定の結果、壮年女性と判断された。
〈釘・棺〉南北ベルト西側を中心に重複範囲も含め 26 点の出土地点を把握した。一括で取り上げたものは 24 点である。釘には木質が付いていることから木棺に埋葬されたものと考えられる。頭部と脚部付近（南北）では釘が集中するが、両側はベルト内だったため出土位置の記録を欠く。東側も弧状にめぐり、棺の形状ははっきりしない。
〈遺物〉出土遺物は土器 3 点、土製人形・釵子・笄各 1 点、キセル一対、銅銭 3 枚である。96 の磁器と土製人形は検出面、94 の陶器は頭部西側、キセルは左肩付近、銅銭は両脚部の間（寛骨上部）に位置する。96 は紅皿でこの上に土製人形がのる（写真図版 31）。巻にには（桜？）がつき、キセルは火皿のすぐ下に首部が接続し火皿も口径 1.3cm と小さい。銅銭は、熙寧元寶 1 枚、新寛永 2 枚である。



第 73 図　12 号墓壙

〈時期〉出土遺物より19世紀以降の年代が想定される。



第74図　12号墓壙出土遺物

13号墓壙（第75・76図、写真図版31・32・34・35・40）

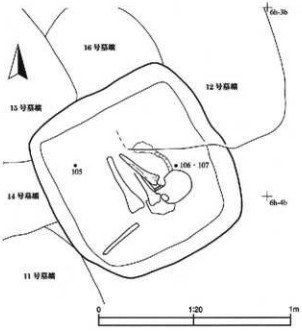
〈位置・検出状況・重複〉6 h－3 eグリッド付近に位置する。11・12・14～16号墓壙と重複しており、検出時の平面形及び人骨の残存状況から12号墓壙に切られると判断したが、これ以外の新旧関係は不明である。

〈規模・形状〉開口部径100×96㎝、正方形である。底面は平坦、検出面からの深さは106cm、壁は直立する。主軸方位は、N－118°－Wである。

〈埋土〉10YR3/4暗褐色砂質シルトを主体とする。

〈人骨〉ほぼ中央部に出土した。人骨の残存状態は良好で、埋葬時の姿勢をほぼ保つものと思われる。座葬（蹲居）でN－121°－W方向を主軸とする。顔は南西を向く。残存する部位は頭骨・椎骨・（寛骨）・四肢骨を確認した。鑑定の結果、壮年の男性と判断された。

〈釘・棺〉重複範囲も含め10点の出土地点を把握、木遺構単独で36点を一括で取り上げた。12号墓壙の底面より低い位置のものは、一括で取り上げてしまい、人骨はこれより下に埋葬されていたため詳細は不明であるが、おそらく木棺が用いられ

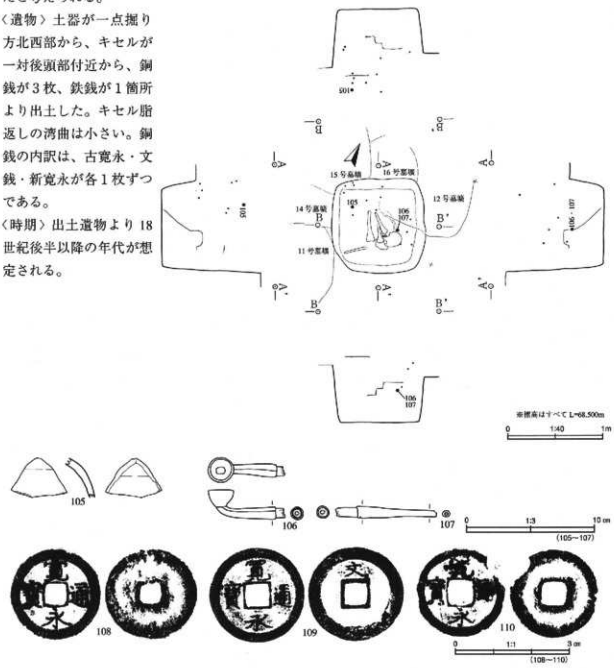


第75図　13号墓壙(1)

たと考えられる。

〈遺物〉土器が一点掘り方北西部から、キセルが一対後頭部付近から、銅銭が3枚、鉄銭が1箇所より出土した。キセル脂返しの湾曲は小さい。銅銭の内訳は、古寛永・文銭・新寛永が各1枚ずつである。

〈時期〉出土遺物より18世紀後半以降の年代が想定される。



第76図　13号墓壙(2)・出土遺物

14号墓壙（第77・78図、写真図版31・32・40）

〈位置・検出状況・重複〉6ｇ－3ｅグリッド付近に位置する。6・11・13・15号墓壙と重複している。検出時の平面形から15号墓壙のほうが新しく、断面の切りあいから11号墓壙より古いと判断したが、6・13号墓壙との新旧関係は不明である。

〈規模・形状〉東壁全体と北壁の大半を重複遺構と同時に掘り下げていしまったため消失する。南北105cm、東西94cm以上の方形であるが、南北壁に対して西壁が反っているため、別遺構が重複している可能性が考えられる。底面は平坦、検出面からの深さは77cm、壁はやや外傾して立ち上がる。主軸方位は、南北壁を基準とするとN―25°―W、西壁ではN―60°―Wである。

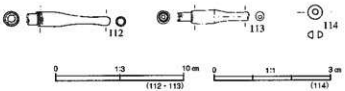
〈埋土〉10YR3/4暗褐色砂質シルトを主体とする。

〈人骨〉ほぼ中央に出土した。人骨の残存状態は不良である。頭骨・椎骨・四肢骨が出土するが、いずれも断片的で、頭蓋骨上に四肢骨片が位置していることから遊離している可能性が高い。そのため埋葬方法・主軸方位は不明である。鑑定の結果、年齢は壮年と判断された。

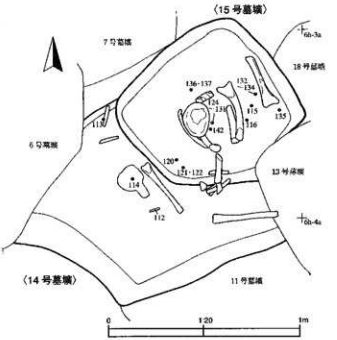
〈釘・棺〉4点の出土地点を把握、一括で4点取り上げた。釘には木質が付いていることから木棺が使用されたものと考えられるが、棺の規模形状は不明である。

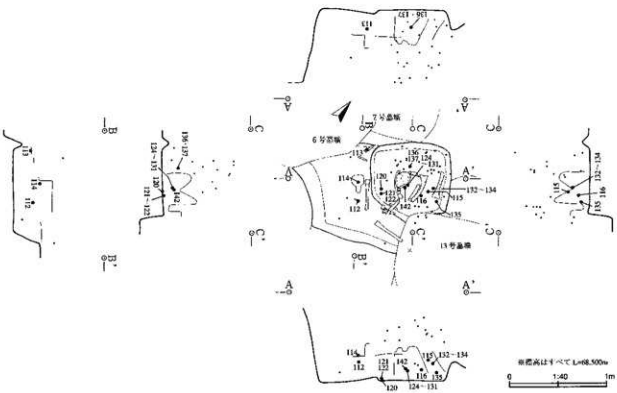
〈遺物〉出土遺物は、キセル吸口2点、玉1点である。キセルは吸口のみで、掘り方中央と北縁付近に一点ずつで、どちらかが別遺構に伴う可能性が高い。

〈時期〉年代を推定できる遺物の出土がないため詳細は不明であるが、他遺構との新旧関係から18世紀後半以降の年代が想定される。



第77図　14号墓壙出土遺物





第78図　14・15号墓壙

15号墓壙（第78・79図、写真図版31・32・35・40）

〈位置・検出状況・重複〉６ｇ－３ｅグリッド付近に位置する。13・14・16号墓壙と重複しており、検出時の平面形及び人骨の残存状態から14・16号墓壙を切ると判断したが、13号墓壙との新旧関係は不明である。また７号墓壙とも重複していた可能性がある。

〈規模・形状〉開口部径85×84cm、正方形である。底面は平坦、検出面からの深さは75cm、壁の立ちあがりは重複遺構と同時に掘り下げたため不明。主軸方位は、N―41°―Wである。

〈埋土〉10YR3/4暗褐色砂質シルトを主体とする。

〈人骨〉中央やや南東よりに出土した。人骨の残存状態は良好で、埋葬時の姿勢をほぼ保つものと思われる。座葬(蹲居)でN―25°―Wを主軸とする。顔は南東を向く。ほぼ全体が残存するようで頭骨・椎骨・寛骨・四肢骨を確認できた。鑑定の結果、老年の男性と判断された。

〈釘・棺〉重複範囲も含め42点の出土地点を把握し、20点は一括で取り上げた。周囲の遺構を切っており掘り方埋土にこれらの釘が多く含まれる上に、埋土下半、特に人骨周辺で出土したものの地点をおさえられなかったため、本遺構に伴う釘をはっきり認識できなかった。しかし、人骨に沿った状態で数点出土していること、これに木質が付いていることから木棺を使用したものと考えられる。棺の規模形状は不明である。

〈遺物〉出土遺物はキセル一対、鉄製品（火打金、火打石付着）１点、玉類18点、銅銭18枚、籾殻が一塊である。キセルは人骨西側、銅銭８枚（124～131）と籾殻は脚部の間（頭部顎の下）より出土した。これらはその位置から本遺構に伴うと判断したい。特に籾殻は指のような短骨に囲まれていて、赤い繊維のような痕跡もみられることから、籾殻を赤い布に包み手の中に収められていたものと思われる。一方の玉類は掘り方南西端からの出土で、西側に隣接する14号墓壙でも同種の玉が出土していることから、そちらの遺構に伴うものかもしれない。同様に銅銭132～137も棺外に位置し他遺構に帰属する可能性が高い。これ以外の遺物は出土位置を抑えることができなかった。キセルは火皿のすぐ下に首部が接続しており、火皿の口径も1.2cmと小さい。人骨脚部間から出土した銅銭８枚の内訳は、新寛永５枚、一銭３枚である。一銭の紀年銘は明治10年が２枚、15年が１枚が確認できた。その他10枚は、古寛永３枚、新寛永７枚となる。

〈時期〉出土遺物より、明治15年以降の年代が想定される。

16号墓壙（第80図、写真図版31・32・35）

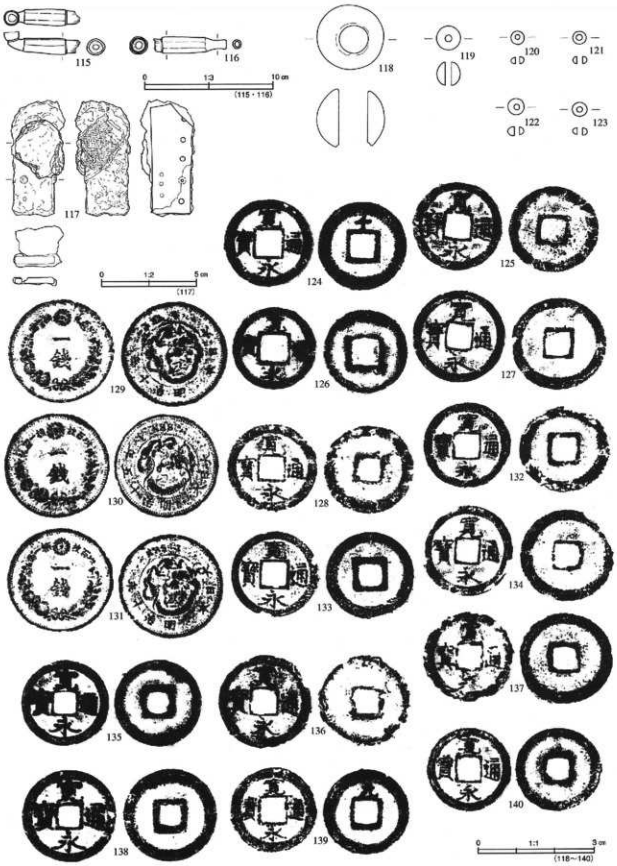
〈位置・検出状況・重複〉６ｈ－３ａ付近グリッドに位置する。12・13・15号墓壙と重複しており、検出時の平面形から12・15号墓壙より古いと判断したが、13号墓壙との新旧関係は不明である。

〈規模・形状〉北東壁以外は重複遺構によって消失する。残存するのは南北49cm、東西50cmで、方形～隅丸方形の形状を持つと思われる。底面は平坦、検出面からの深さは65cm程度、壁は確認できなかった。主軸方位は、N―43°―Wである。

〈埋土〉10YR3/4暗褐色砂質シルトを主体とする。

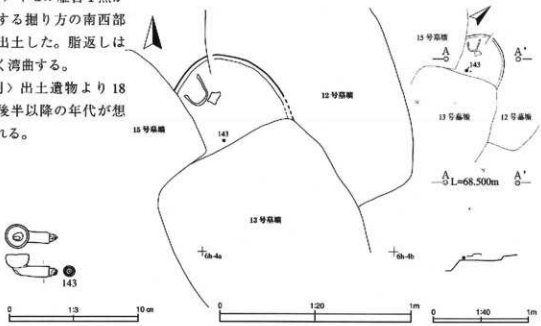
〈人骨〉残存範囲の北西部で出土した。人骨の残存状態は不良で頭骨（と四肢骨片？）のみ確認した。残存部位が少ないためはっきりしないが、頭部の位置が埋葬時から遊離していないと仮定すると、臥葬で北西方向を主軸とする（N―35°―W）。鑑定の結果、年齢は少なくとも７才以上性別は不明判断された。

〈釘・棺〉重複範囲を含め１点の出土地点を把握し、一括で２点とりあげた。釘には木質が付いていることから木棺を使用したものと推定されるが、棺の規模形状など詳細は不明である。



第79図　15号墓壙出土遺物

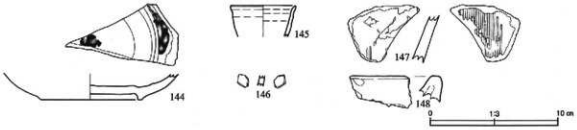
〈遺物〉キセル雁首1点が残存する掴り方の南西部から出土した。脂返しは小さく湾曲する。
〈時期〉出土遺物より18世紀後半以降の年代が想定される。



第80図　16号墓壙・出土遺物

（4）遺構外出土遺物（第81図、写真図版35）

6点出土し、このうち5点を図化、1点を写真掲載とした。144～148は試掘および検出段階で出土したもので、149は調査区外南側で表採した。



第81図　遺構外出土遺物

第13表 墓壙一覧表

遺構名	旧遺構名	グリッド	遺構開始（新>旧＋不明）	規模（cm）（遺存・<以上）	形状	主軸方位	人骨出土位置・状態	人骨残存部位	埋葬方位	頭部方向	埋葬姿勢	頭骨数	年齢	性別
1号墓壙	SK01	6g-5e	＞11	123×92	長方形	N－126°－W	やや北・良	頭・四肢・胴	N－123°－W	南西（北東）	屈伸葬（仰）	1	熟年	女性
2号墓壙	SK02	6g-5c	＜4＞3？	(137)×(100-115-120)	長方形	N－106°－W	北部・良	頭・四肢・胴・寛	N－102°－W	西（北）	屈伸葬（仰）	1	壮年期前半	男性
3号墓壙	SK05	6g-4d	＜4・5＜2？	90＜×（102）	方形	N－26°－W	やや西・良？	頭・四肢	N－47°－W	北西（南西？）	屈伸葬（横？）	1	熟年	男性
4号墓壙	SK03	6g-4d	＞2・3	95×82	正方形	N－29°－W	中央・良	ほぼ全体	N－30°－W	（北西）	座葬（踞）	1	5歳前後	不明
5号墓壙	SK06	6g-3c	＞3・6?	a102×99 b（140）×27＜ c84＜×24＜	a 正方形 b 方形 c 方形	N－34°－W	北西部・良（横倒れ）	頭・四肢・胴・寛	N－74°－W	（南東）	屈葬（横？）	1	壮年期前半	女性
6号墓壙	SK07	6g-3d	＜57＞7・8・14	135×85＜	方形	N－35°－W	南部・北西部（逆葬？）	頭・四肢・胴・寛 【a】（北西）【b】（南西） 【c】（南東）	【c】N－30°－W	【c】南東	座葬？	3	【a】成人 【b】20歳前後 【c】熟年以上	【a】不明 【b】男性的 【c】女性
7号墓壙	SK13	6g-2d	＜6・8	70＜×70＜ （130×85）	方形	N－21°－W	南西端（逆葬）	頭・四肢	—	—	—	1	壮年以上	—
8号墓壙	SK17	6g-2d	＜6＞7	（126・90）×49＜	方形（やや不正）	N－19°－W	南西部・不良	頭・四肢	—	—	—	1	15歳以上	—
9号墓壙	SK08	6g-1e	＞10	105×（99）	正方形	N－30°－W	北西部・不良	四肢（・歯？）		—	—	0	—	—
10号墓壙	SK10	6g-1e	＜9	140×160	正方形？	N－45°－W	北西部・不良	頭・四肢？（・歯？）	—	—	—	1		
11号墓壙	SK11	6g-4e	＜1・14＋13	101＜×88	長方形～楕円形	N－30°－W （前）N－16°－W	中央部やや東・（頭倒し）	頭・胴・四肢（寛？）	N－7°－W	北（？）	屈伸葬（仰）	1	12歳以上	—
12号墓壙	SK12	6b-3a	＞13・16	138×87＜	長方形	N－14°－W	南東部・良	ほぼ全体（髪の毛残存）	N－2°－W	北（西）	屈伸葬（仰）	1	壮年	女性
13号墓壙	SK14	6b-3a	＜12 ＋11・14・15・16	100×96	正方形	N－118°－W	ほぼ中央・良	頭・四肢・胴・寛	N－121°－W	（南西）	座葬（踞）	1	壮年	男性
14号墓壙	SK15	6g-3e	＞11＜15＋6・13	94＜×105	方形	【東北】N－25°－W 【西】N－60°－W	中央？（逆葬？）	頭・四肢・胴	—	—	—	1	壮年	—
15号墓壙	SK16	6g-3e	＋（7）・13＜14＞16？	85×84	正方形	N－41°－W	やや南東・良	頭・四肢・胴・寛	N－25°－W	（南東）	座葬（踞）	1	老年	男性
16号墓壙	SK18	6b-3a	＜12・15＋13	50＜×49＜	方形？	N－43°－W	北西部・不良	頭・（四肢？）	N－35°－W	北西？	屈伸葬？	1	7歳以下	—

第 14 表 出土遺物一覧表

（土器・陶磁器・土製品）

掲載番号	種　類	遺構名	出土位置（標高・m）	器　高（長さ・cm）	口　径（幅・cm）	底　径（厚さ・cm）	容　量（g）	備　考	図版	写真図版
64	磁器	6 号墓壙	－	0.7	－	－	－		65	34
65	十製人形	6 号墓壙	68.321	6.7	5.2	4.7	55.37		65	34
66	土製人形	6 号墓壙	68.321	8.3	4.4	4.6	81.30		65	34
94	陶器	12 号墓壙	67.824	3.8	6.2	2.8	－	小鍋・薬瓶（19 世紀）	74	34
95	陶器	12 号墓壙	67.963	3.5	－	－	－	埼・大根相馬（18 世紀後半以降）	74	34
96	磁器	12 号墓壙	68.288	1.6	4.6	1.4		紅皿・在地？	74	34
97	十製人形	12 号墓壙	68.296	5.5	4.3	4.0	34.83		74	34
105	陶器	13 号墓壙	68.179	3.4	－	－	－	甕・在地	76	34
144	磁器	遺構外	68.370	2.1	－	8.0	－	皿・肥前（18 世紀後半）	81	35
145	陶器	遺構外	－	2.5	5.2	－	－	鉢	81	35
146	磁器？陶器？	遺構外	－	0.9	－	－			81	35
147	陶器	遺構外		3.8			－	擂鉢・在地か？（18 世紀半？）	81	35
148	土器	遺構外	－	2.0	－	－		火鉢	81	35
149	土器	遺構外	－	－	－	－	－	摩耗	－	35

（金属製品・石製品）

掲載番号	種　類	材　質	遺構名	出土位置（標高・m）	長さ（cm）	幅（cm）（火廻孔・吸口径）	厚さ（cm）（小口孔）	重量（g）	備　考	図版	写真図版
1	キセル（雁首）	銅製品	1 号墓壙	67.016	5.3	1.6	0.9	9.86		52	33
2	キセル（吸口）	銅製品	1 号墓壙	67.862	5.7	－	0.8	7.18		52	33
7	キセル（吸口）	銅製品	2 号墓壙	67.748	7.1	0.5	1.0	7.35		55	33
8	毛抜き	鉄製品	2 号墓壙	67.734	8.0	0.8	0.3	8.06		55	33
9	毛抜き？	鉄製品	2 号墓壙	67.734	3.2	0.9	0.2	1.34		55	33
10	鉄	鉄製品	2 号墓壙		14.7	2.6	0.4	15.74		55	33
14	キセル（雁首）	銅製品	2・4 号墓壙	67.735	6.2	1.7	1.1	8.65		56	33
15	火打金	鉄製品	2・4 号墓壙	67.776	2.1	4.9	0.7	7.39		56	33
18	キセル（雁首）	銅製品	3 号墓壙	67.873	6.8	1.9	1.0	7.98		57	33
19	キセル（吸口）	銅製品	3 号墓壙	67.940	(4.7)	－	1.0	4.02		57	33
20	板状	鉄製品	3 号墓壙	68.296	3.3	2.4	0.3	4.98		－	33
21	釣具（毛抜き？）	鉄製品	3 号墓壙	67.232	7.3/3.6	1.0/0.6	0.3/0.3	9.0/1.0	2 片あり	－	33
22	板状	鉄製品	3 号墓壙	67.232	2.6	1.7	0.1	1.00		－	33
45	キセル（雁首）	銅製品	5 号墓壙	67.513	5.9	1.7	0.9	4.07		62	33
46	キセル（吸口）	銅製品	5 号墓壙	67.542	(6.3)	－	0.6	2.49		62	33
47	リング状	鉄製品	5 号墓壙	67.672	2.6	2.4	0.6	3.18		62	33
48	板状	鉄製品	5 号墓壙	67.858	5.3	2.8	0.6	13.00		62	33
67	キセル（雁首）	銅製品	6 号墓壙	67.514	5.4	1.2	1.1	14.55		65	34
68	キセル（吸口）	銅製品	6 号墓壙	67.582	6.8	0.6	1.0	13.14		65	34
69	火打金・火打ち石	鉄製品・石製品	6 号墓壙	－	4.5	2.4	0.4	鉄 12.86 石 2.74	石質（石英）	65	34
77	キセル（雁首）	銅製品	7 号墓壙	68.054	(6.1)	1.8	－	5.44		66	34
78	キセル（吸口）	銅製品	7 号墓壙	68.226	(5.2)	－		2.13		66	34
81	キセル（雁首）	銅製品	8 号墓壙	67.610	4.4	1.6	0.9	5.49		67	34
82	キセル（吸口）	銅製品	8 号墓壙	－	(4.6)	－	0.8	2.14		67	34
89	キセル（雁首）	銅製品	11 号墓壙	67.908	5.7	1.6	0.9	7.81		72	34
90	キセル（吸口）	銅製品	11 号墓壙	67.903	6.2	0.6	0.8	7.47		72	34
98	鋲	銅製品	12 号墓壙	67.912	14.3		0.3	9.04		74	34
99	鋲	銅製品	12 号墓壙	67.872	21.7	1.1	0.6	21.77		74	34
100	キセル（雁首）	銅製品	12 号墓壙	67.823	3.4	1.3	1.2	8.25		74	34
101	キセル（吸口）	銅製品	12 号墓壙	67.842	3.9	0.6	1.1	6.20		74	34
106	キセル（雁首）	銅製品	13 号墓壙	67.656	5.4	2.0	0.9	6.56		76	34
107	キセル（吸口）	銅製品	13 号墓壙	67.656	6.1	－	－	4.23		76	34
112	キセル（吸口）	銅製品	14 号墓壙	67.760	5.6	0.6	1.1	5.31		77	35
113	キセル（吸口）	銅製品	14 号墓壙	67.735	4.5	0.7	0.9	5.83		77	35
115	キセル（雁首）	銅製品	15 号墓壙	67.786	4.9	1.2	1.2	10.74		79	35
116	キセル（吸口）	銅製品	15 号墓壙	67.672	5.1	0.8	1.2	10.82		79	35
117	火打金・火打ち石	鉄製品・石製品	15 号墓壙	－	6.1	2.6	0.4	鉄＋石 34.53	石質（石英）	79	35
143	キセル（雁首）	銅製品	16 号墓壙	67.691	3.4	1.8	－	6.55		80	35

（玉）

掲載番号	種類	材質	遺構名	出土位置（標高・m）	直径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　考	図版	写真図版
3	玉	ガラス	1号墓壙	－	4.10 ～ 4.40	2.80 ～ 3.10	1.45 ～ 1.57	0.08 ～ 0.13	透明　計6点	52	33
91	玉	ガラス	11号墓壙	－	4.34・4.44	3.49・3.54	1.56・1.64	0.14・0.15	透明　計2点	72	－
114	玉	ガラス	14号墓壙	67.835	3.76	2.69	1.45	0.05	透明　計1点	77	－
118	玉	石製？	15号墓壙		17.38	14.65	8.14	7.76	乳白色　計1点	79	35
119	玉	ガラス	15号墓壙	－	6.50	6.73 ～ 6.79	0.55 ～ 0.57	1.36	透明　計3点	79	35
120	玉	ガラス	15号墓壙	67.555	3.77	2.15	1.71	0.07	緑色　計1点	79	
121	玉	ガラス	15号墓壙	67.585	3.62 ～ 3.86	1.85 ～ 2.11	1.48 ～ 1.79	0.05 ～ 0.06	緑色　計3点	79	－
122	玉	ガラス	15号墓壙	67.585	3.53 ～ 4.17	2.10 ～ 2.56	1.42 ～ 1.77	0.06 ～ 0.08	透明　計5点	79	－
123	玉	ガラス	15号墓壙	－	3.60 ～ 3.74	2.09 ～ 2.28	1.50 ～ 1.71	0.04 ～ 0.06	緑色　計5点	79	35

（銭貨）

掲載番号	種類	銭銘	銭種	遺構名	出土位置（標高・m）	径(cm)	重量(g)	備　考	図版	写真図版
4	鋼銭	寛永通寶	－	1号墓壙	67.894	2.5	10.14	鉄銭2枚と接着・重登は3枚分	－	33
5	鉄銭	寛永通寶？	－	1号墓壙	67.894	2.8	10.14	2枚（銅銭1枚と接着・重登は3枚分）	－	33
6	鉄銭	寛永通寶？	－	1号墓壙	67.035	2.4	11.00	2～3枚	－	33
11	銅銭	寛永通寶	新寛永	2号墓壙	67.802	2.4	(1.87)	欠け・字保京都七條所鋳銭（又は元文山城横大路所）	55	33
12	銅銭	寛永通寶	新寛永	2号墓壙	67.802	2.3	2.71	元文出羽秋田所鋳銭	55	33
13	銅銭	寛永通寶	新寛永	2号墓壙	67.802	2.2	2.47		55	33
16	銅銭	寛永通寶	古寛永	2・4号墓壙	67.784	2.5	3.12		56	33
17	銅銭	寛永通寶	文銭	2・4号墓壙	67.784	2.5	(2.66)	欠け	56	33
23	銅銭	寛永通寶	新寛永	4号墓壙	67.767	2.3	1.98		59	33
24	銅銭	寛永通寶	新寛永	4号墓壙	67.767	2.2	(2.24)	磁着・欠け	59	33
25	銅銭	寛永通寶	新寛永	4号墓壙	67.767	2.3	1.94	元文江戸深川平野新田所鋳銭？	59	33
26	銅銭	寛永通寶	新寛永	4号墓壙	67.817	2.3	2.98	元文江戸深川平野新田所鋳銭？	59	33
27	銅銭	寛永通寶	新寛永	4号墓壙	67.817	2.3	1.88	元文江戸深川平野新田所鋳銭？	59	33
28	銅銭	寛永通寶	新寛永	4号墓壙	67.817	2.4	(2.55)	欠け・享保京都七條所鋳銭（又は元文山城横大路所）	59	33
29	銅銭	寛永通寶	古寛永	4・22号墓壙？	－	2.3	2.09		59	33
30	銅銭	寛永通寶	古寛永	4・22号墓壙？	－	2.2	2.14	磁着	59	33
31	銅銭	寛永通寶	文銭？	4・22号墓壙？	－	2.5	3.77		59	33
32	銅銭	寛永通寶	新寛永（背元）	4・22号墓壙？	－	2.3	2.17	磁着・元文摂津高津新地所鋳銭	59	33
33	銅銭	寛永通寶	新寛永（背元）	4・22号墓壙？	－	2.3	2.34	磁着・元文摂津高津新地所鋳銭	59	33
34	銅銭	寛永通寶	新寛永（背元）	4・22号墓壙？	－	2.3	1.86	元文摂津高津新地所鋳銭	59	33
35	銅銭	寛永通寶	新寛永（背足）	4・22号墓壙？	－	2.3	2.60	宝保下野足尾所鋳銭	59	33
36	銅銭	寛永通寶	新寛永	4・22号墓壙？	－	2.4	3.02	元文江戸十高坪所鋳銭？	59	33
37	銅銭	寛永通寶	新寛永	4・22号墓壙？	－	2.2	1.96		59	33
38	銅銭	寛永通寶	新寛永	4・22号墓壙？	－	2.4	2.82		59	33
39	銅銭	寛永通寶	新寛永	4・22号墓壙？	－	2.3	2.59		59	33
40	銅銭	寛永通寶	新寛永	4・22号墓壙？	－	2.2	2.94		59	33
41	銅銭	寛永通寶	新寛永	4・22号墓壙？	－	2.4	2.80	磁着	59	33
42	銅銭	寛永通寶	新寛永	4・22号墓壙？	－	2.2	1.66		59	33
43	銅銭	寛永通寶	新寛永	4・22号墓壙？	－	2.3	2.81		59	33
44	銅銭	寛永通寶	新寛永	4・22号墓壙？	－	2.3	3.10		59	33
49	銅銭	寛永通寶	古寛永	5号墓壙	68.152	2.5	2.80		62	33
50	銅銭	寛永通寶	古寛永	5号墓壙	68.152	2.5	3.38		62	33
51	銅銭	寛永通寶	古寛永	5号墓壙	68.152	2.4	3.68		62	33
52	銅銭	寛永通寶	新寛永	5号墓壙	68.152	2.3	2.50	磁着・元文江戸深川平野新田所鋳銭？	62	33
53	銅銭	寛永通寶	新寛永	5号墓壙	68.152	2.3	2.51		62	33
54	銅銭	寛永通寶	新寛永	5号墓壙	68.152	2.2	2.47	磁着（サビ？）	62	33
55	銅銭	寛永通寶	新寛永	5号墓壙	68.152	2.2	2.11	磁着（サビ？）	62	34
56	銅銭	寛永通寶	新寛永	5号墓壙	68.152	2.3	(2.05)	欠け	62	34

掲載番号	種類	銭銘	銭種	遺構名	出土位置（標高・m）	径（cm）	重量（g）	備　考	図版	写真図版
57	銅銭	寛永通宝	新寛永	5号墓壙	68.152	2.2	2.13		62	34
58	銅銭	寛永通宝	－	5号墓壙	68.152	2.3	2.45	縁欠（サビ？）	62	34
59	鉄銭	寛永通宝？	－	5号墓壙	68.152	2.6	8.77	3枚	－	34
60	鉄銭	寛永通宝？	－	5号墓壙	68.152	2.6	3.91	1枚	－	34
61	鉄銭	寛永通宝？	－	5号墓壙	67.438	2.2/2.4/2.6/2.8	76.20	1枚／5枚／3枚／6枚・計17枚？（2.2のもの銭銭の可能性あり）	－	34
62	鉄銭	寛永通宝？	－	5号墓壙	67.482	2.1～2.6	33.33	7枚	－	34
63	鉄銭	寛永通宝？	－	5号墓壙	－		21.47	3枚・破損3枚　避著無し	－	34
70	銅銭	寛永通宝	古寛永	6号墓壙	－	2.4	2.29	緑銅落	65	34
71	銅銭	寛永通宝	古寛永	6号墓壙	－	2.5	3.22		65	34
72	銅銭	寛永通宝	新寛永	6号墓壙		2.2	1.42	元文江戸深川平野新田所鋳銭？	65	34
73	銅銭	寛永通宝	新寛永	6号墓壙	－	2.4	2.43	享保京都七條所鋳銭（又は元文山城横大路所）	65	34
74	銅銭	寛永通宝	新寛永	6号墓壙	－	2.4	3.17		65	34
75	鉄銭	寛永通宝？	－	6号墓壙	－	2.9/大3.0小2.4	89.33	6枚・破損2枚／大3枚・小3枚（同文銭（径2.9）1点）・縄付き／縄付き	－	34
76	鉄銭	寛永通宝？	－	6号墓壙	－	2.8	5.35	1枚	－	－
79	鉄銭	寛永通宝？	－	7号墓壙	－	2.4～2.5	7.77	3枚	－	34
80	鉄銭	寛永通宝？	－	7・8号墓壙	－	2.7	13.57	2枚・縄付き		
83	銅銭	寛永通宝	古寛永	9号墓壙	67.526	2.4	3.30		68	34
84	銅銭	寛永通宝	新寛永	9号墓壙	67.526	2.3	(2.79)	欠け	68	34
85	銅銭	寛永通宝	新寛永	9号墓壙	67.526	2.3	1.90	元文相模藤澤・吉田島所鋳銭	68	34
86	銅銭	寛永通宝	古寛永	9号墓壙	67.538	2.4	3.44		68	34
87	銅銭	寛永通宝	新寛永？	9号墓壙	67.538	2.3	3.04		68	34
88	銅銭	寛永通宝	新寛永	9号墓壙	67.538	2.3	2.50		68	34
92	銅銭	寛永通宝	古寛永？	11号墓壙	－	2.4	3.28		72	34
93	鉄銭	寛永通宝？	－	11号墓壙		2.4・2.7	12.54	2枚・破損1枚	－	34
102	銅銭	洪武通宝	熙寧元寶	12号墓壙	67.860	2.3	2.82	北宋・初鋳1068年	74	34
103	銅銭	寛永通宝	新寛永	12号墓壙	67.860	2.3	(2.88)	欠け	74	34
104	銅銭	寛永通宝	新寛永	12号墓壙	67.860	2.3	2.52		74	34
108	銅銭	寛永通宝	古寛永	13号墓壙	－	2.4	3.52		76	35
109	銅銭	寛永通宝	文銭	13号墓壙	－	2.5	3.26		76	35
110	銅銭	寛永通宝	新寛永	13号墓壙	－	2.4	(2.37)	欠け・元文出羽秋田所鋳銭	76	35
111	鉄銭	寛永通宝？	－	13号墓壙	－	2.4程度	52.13	15枚？縄付き？	－	35
124	銅銭	寛永通宝	新寛永（背十）	15号墓壙	67.675	2.3	2.62		79	35
125	銅銭	寛永通宝	新寛永	15号墓壙	67.675	2.4	3.22		79	35
126	銅銭	寛永通宝	新寛永	15号墓壙	67.675	2.2	1.79	元文相模藤澤・吉田島所鋳銭？	79	35
127	銅銭	寛永通宝	新寛永	15号墓壙	67.675	2.4	3.09	享保京都七條所鋳銭（又は元文山城横大路所）	79	35
128	銅銭	寛永通宝	新寛永	15号墓壙	67.675	2.4	3.18	享保京都七條所鋳銭（又は元文山城横大路所）	79	35
129	銅銭	明治貨幣	一銭	15号墓壙	67.675	2.8	7.13	明治十年	79	35
130	銅銭	明治貨幣	一銭	15号墓壙	67.675	2.8	6.99	明治十年	79	35
131	銅銭	明治貨幣	一銭	15号墓壙	67.675	2.8	6.86	明治十五年	79	35
132	銅銭	寛永通宝	新寛永	15号墓壙	67.747	2.3	2.33		79	35
133	銅銭	寛永通宝	新寛永	15号墓壙	67.747	2.3	2.70	緑銅落	79	35
134	銅銭	寛永通宝	新寛永	15号墓壙	67.747	2.4	2.24	緑銅落・享保京都七條所鋳銭（又は元文山城横大路所）	79	35
135	銅銭	寛永通宝	古寛永	15号墓壙	67.657	2.3	3.05		79	35
136	銅銭	寛永通宝	新寛永	15号墓壙	67.734	2.4	3.63		79	35
137	銅銭	寛永通宝	新寛永	15号墓壙	67.734	2.4	2.52		79	35
138	銅銭	寛永通宝	古寛永	15号墓壙	－	2.5	3.10		79	35
139	銅銭	寛永通宝	新寛永（背九）	15号墓壙	－	2.3	2.54		79	35
140	銅銭	寛永通宝	新寛永	15号墓壙	－	2.2	2.29	元文相模藤澤・吉田島所鋳銭	79	35
141	銅銭	寛永通宝	古寛永	15号墓壙	－	2.5	(2.30)	1/4破損		35

（その他）

掲載番号	種類	遺構名	出土位置（標高・m）	長さ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
142	羽釜	15号墓壙	67.675	－	－	1.79	

（釘）

掲載番号	種類	分類	遺構名	出土位置（標高・m）	長さ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　考
201	釘	a	1号墓壙	68.119	5.2		3.24	
202	釘	g	1号墓壙	68.090	5.3	1.2	2.70	
203	釘	g	1号墓壙	67.975	5.0	1.4	2.95	
204	釘	直交	1号墓壙	67.057	(3.4)		(2.72)	欠損（下）
205	釘	－	1号墓壙	67.868	－	－		遺物なし
206	釘	－	1号墓壙	67.959	－	－		遺物なし
207	釘	－	1号墓壙	67.877	－	－		遺物なし
208	釘	－	1号墓壙	67.915	－	－		遺物なし
209	釘	－	1号墓壙	67.912	－	－		遺物なし
210	釘	－	1号墓壙	67.909	－	－		遺物なし
211	釘	－	1号墓壙	67.870	－	－		遺物なし
212	釘	b	1・3・4号墓壙	68.000	5.1	1.4	3.01	
213	釘	a	2号墓壙	67.179	4.7		3.64	
214	釘	b	2号墓壙	67.926	5.2	1.3	3.40	
215	釘	b	2号墓壙	67.926	(4.2)	1.5	(3.90)	欠損（下）
216	釘	直交	2号墓壙	68.062	(2.9)		(2.42)	欠損（下）
217	釘	b	2号墓壙	67.911	5.1	1.6	4.97	
218	釘	g	2号墓壙	67.954	(3.4)	1.7	(1.59)	ﾋﾟ欠損（下）・下半屈曲
219	釘	e	2号墓壙	68.064	5.0	(1.7)	2.76	
220	釘	b	2号墓壙	67.674	5.4	1.4	4.13	
221	釘	b	2号墓壙	67.689	5.2	1.8	6.93	
222	釘	－	2号墓壙	67.776	－	－	－	遺物なし
223	釘	b	2号墓壙	67.890	5.0	1.5	3.89	
224	釘	a	2号墓壙	67.965	5.1		4.26	
225	釘	d	2号墓壙	67.714	5.2	3.5	3.25	
226	釘	a	2号墓壙	67.763	4.3		2.99	下半屈曲（直4.7）
227	釘	直交	2号墓壙	67.763	(3.2)		(0.94)	欠損（上）
228	釘	b	2・4号墓壙	67.104	5.2	1.2	3.92	もう一本（欠け）付くか？
229	釘	直交	2・4号墓壙	67.746	(2.5)		(3.90)	欠損（下）
230	釘	a	2・4号墓壙	67.716	5.1		4.66	
231	釘	直交	2・4号墓壙	67.724	(1.9)		(3.94)	欠損（下）
232	釘	f	2・4号墓壙	67.757	5.3	1.9	5.45	
233	釘	b	2・4号墓壙	68.172	5.1	1.5	3.25	
234	釘	b	2・4号墓壙	67.753	5.4	1.3	5.01	
235	釘	直交	2・3号墓壙	67.764	(4.3)		(4.08)	欠損（下）
236	釘	a	2・3号墓壙	67.782	4.4		5.27	
237	釘	平行	3号墓壙	68.193	(2.8)		(1.91)	欠損（上）
238	釘	－	3号墓壙	68.115	3.7		4.85	鉄製品か？（リング付き）
239	釘	h	3号墓壙	67.178	3.1		1.39	下端屈曲・頭部扁平
240	釘	a	3号墓壙	67.207	4.3		2.66	
241	釘	直交	3号墓壙	67.207	(3.1)		(1.54)	ﾋﾟ欠損（下）
242	釘	直交	3号墓壙	67.240	(1.8)		(0.44)	欠損（上ド）薄い鉄製品？もあり (2.49)
243	釘	－	3号墓壙	67.297	－		1.38	鉄製品か？（薄い）
244	釘	b	3号墓壙	67.248	6.0	1.2	7.22	
245	釘	h	3号墓壙	68.004	(2.9)		(0.83)	ﾋﾟ欠損（ド）

掲載番号	種類	分類	遺構名	出土位置(標高・m)	長さ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
246	釘	b	3号墓壙	68.082	(5.0)	1.5	(5.83)	もう一本(欠け)付くか?
247	釘	直交	3号墓壙	67.958	(3.7)		(1.50)	ﾋﾟ欠損(上)
248	釘	－	3号墓壙	67.970	－	－	－	木片?
249	釘	直交	3号墓壙	67.807	(2.8)		(1.72)	欠損(下)・下半屈曲(L字)
250	釘	h	3号墓壙	67.818	(2.4)		(1.80)	欠損(上)
251	釘	直交	3号墓壙	67.915	(1.7)		(1.16)	欠損(下)
252	釘	f	4号墓壙	68.222	(2.7)	1.6	(0.97)	欠損(下)
253	釘	f	4号墓壙	68.245	(2.8)	1.4	(1.52)	欠損(下)
254	釘	a	4号墓壙	67.897	3.9		1.84	
255	釘	c	4号墓壙	68.095	(3.3)	1.6	(1.29)	欠損(下)
256	釘	f	4号墓壙	67.784	(2.6)	1.4	(1.51)	欠損(下)
257	釘	直交	4号墓壙	67.784	(2.1)		(1.32)	欠損(下)
258	釘	直交	4号墓壙	68.072	(3.2)		(0.94)	欠損(下)
259	釘	直交	4号墓壙	68.184	(3.2)		(1.59)	欠損(下)
260	釘	b	4号墓壙	67.774	4.4	1.8	2.47	
261	釘	直交	4号墓壙	67.774	(1.7)		(1.91)	欠損(下)
262	釘	直交	4号墓壙	67.964	(2.7)		(1.90)	欠損(下)
263	釘	b	4号墓壙	67.879	5.0	1.4	3.62	
264	釘	a	4号墓壙	67.796	4.0		1.70	
265	釘	－	4号墓壙	67.790	－	－	－	遺物なし
266	釘	a	4号墓壙	67.846	4.9		2.56	
267	釘	平行	4号墓壙	67.811	(3.0)		(0.95)	欠損(上)
268	釘	直交	4号墓壙	67.809	(2.2)		(2.18)	欠損(上)
269	釘	h	4号墓壙	67.809	(2.9)		(1.40)	欠損(上ド)
270	釘	直交	4号墓壙	67.752	(2.1)		(1.81)	欠損(上ド)
271	釘	直交	4号墓壙	67.764	(1.9)		(4.09)	欠損(下)
272	釘	f	4号墓壙	67.787	(3.6)	1.7	(2.23)	下半屈曲・ﾋﾟ欠損(下)
273	釘	b	4号墓壙	67.906	4.2	1.8	1.33	
274	釘	a	4号墓壙	67.800	3.7		1.70	
275	釘	c	5号墓壙	68.058	4.4	1.7		
276	釘	b	5号墓壙	67.406	4.4	1.6	3.83	直交して釘もう1本付く(両端欠損)
277	釘	直交	5号墓壙	67.625	(3.9)		(2.28)	欠損(上?)
278	釘	b	5号墓壙	67.349	5.1	1.3	3.38	
279	釘	平行	5号墓壙	67.349	(3.0)		(1.26)	欠損(上)
280	釘	直交	5号墓壙	67.349	(1.3)		(0.87)	ﾋﾟ欠損(下)
281	釘	直交	5号墓壙	67.349	(0.7)		(0.28)	ﾋﾟ欠損(下?)
282	釘	a	5号墓壙	67.439	4.1		2.89	
283	釘	直交	5号墓壙	67.466	(3.9)		(4.78)	欠損(ド)
284	釘	平行	5号墓壙	67.466	(3.1)		(1.59)	欠損(上)
285	釘	f	5号墓壙	67.670	4.5	1.4	2.86	
286	釘	h	5号墓壙	67.670	(2.3)		(0.83)	欠損(上)
287	釘	直交	5号墓壙	67.815	(1.7)		(2.65)	欠損(下)
288	釘	h	5号墓壙	67.603	3.8		2.74	
289	釘	h	5号墓壙	67.494	(0.9)		(1.40)	欠損(下)
290	釘	平行	5号墓壙	67.494	(4.6)		(2.79)	欠損(上)
291	釘	b	6号墓壙	68.121	3.8	1.4	2.52	

掲載番号	種類	分類	遺構名	出土位置(標高・m)	長さ(cm)	幅さ(cm)	重量(g)	備考
292	釘	a	6号墓壙	68.237	4.8		2.77	
293	釘	直交	6号墓壙	68.237	(1.7)		(2.33)	欠損(上下)
294	釘	c	6号墓壙	67.508	5.3	1.7	4.01	
295	釘	b	6号墓壙	67.695	4.4	1.3	2.38	
296	釘	c	6号墓壙	67.719	4.3	1.3	2.47	
297	釘	b	6号墓壙	67.415	4.2	1.3	2.21	
298	釘	b	6号墓壙	67.480	(4.1)	1.7	(2.72)	欠損(下)
299	釘	b	6号墓壙	67.470	(2.3)	1.7	(1.69)	欠損(下)
300	釘	c	6号墓壙	67.474	(2.7)	1.4	(1.73)	欠損(下)
301	釘	直交	6号墓壙	67.463	(1.2)		(0.48)	欠損(上下)
302	釘	直交	7号墓壙	68.315	(2.2)		(2.88)	欠損(上下)
303	釘	−	7号墓壙	67.899			−	サビのみ
304	釘	h	7号墓壙	67.826	(1.1)		(0.25)	欠損(上下)
305	釘	直交	7号墓壙	67.846	(1.9)		(1.35)	やや怪しい・欠損(下)
306	釘	b	7号墓壙	67.740	(3.3)	1.3	(2.62)	ゼ"欠損?(下)
307	釘		7号墓壙	67.620	−	−		遺物なし
308	釘	b	9号墓壙	67.570	(3.3)	1.7	(1.79)	欠損(下)
309	釘	直交	9号墓壙	67.532	(3.8)		(3.19)	欠損(下)
310	釘	f	10号墓壙	67.555	(3.3)	1.6	(2.27)	欠損(下)
311	釘	直交	10号墓壙	67.555	(1.9)		(2.94)	欠損(下)
312	釘	直交	10号墓壙	67.408	(2.9)		(2.25)	欠損(下)
313	釘	直交	10号墓壙	67.520	(1.2)		(1.05)	欠損(下)
314	釘	平行	10号墓壙	67.520	(1.7)		(0.33)	欠損(上)
315	釘	a	10号墓壙	67.461	4.8		2.96	
316	釘	直交	10号墓壙	67.582	(1.6)		(1.81)	欠損(下)
317	釘	直交	10号墓壙	67.674	(1.7)		(1.33)	欠損(上)
318	釘	b	10号墓壙	67.575	4.0	1.4	2.48	
319	釘	c	10号墓壙	67.570	4.3	1.6	1.82	
320	釘	b	10号墓壙	67.557	3.1	1.4	2.34	下端屈曲(直3.8)
321	釘	平行	10号墓壙	67.730	(3.1)		(0.62)	欠損(上)
322	釘	直交	10号墓壙	67.624	(2.3)		(2.74)	欠損(下)
323	釘	直交	10号墓壙	67.624	(2.0)		(2.50)	欠損(下?)
324	釘	直交	10号墓壙	67.512	(2.7)		(2.26)	欠損(下)
325	釘	直交	11号墓壙	67.916	(2.8)		(3.40)	欠損(下)
326	釘	b	11号墓壙	67.932	4.8	1.5	3.21	
327	釘	b	11号墓壙	67.905	(3.2)	1.8	(3.62)	欠損(下)
328	釘	a	11号墓壙	68.208	4.7		2.75	
329	釘	a	11号墓壙	68.119	4.6		3.52	
330	釘	−	11号墓壙	67.899	−	−	−	遺物なし
331	釘	g	12号墓壙	68.015	5.1	1.4	3.19	
332	釘	h	12号墓壙	68.007	4.7		2.65	
333	釘	g	12号墓壙	68.002	4.6	1.3	3.69	
334	釘	b	12号墓壙	68.020	4.6	1.4	3.15	
335	釘	b	12号墓壙	67.955	(3.6)	1.4	(2.18)	欠損(下)
336	釘	直交	12号墓壙	67.055	(2.9)		(2.87)	欠損(下)
337	釘	直交	12号墓壙	67.918	(1.8)		(2.29)	欠損(下)

掲載番号	種類	分類	遺構名	出土位置(標高・m)	長さ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
338	釘	b	12号墓壙	67.878	4.8	1.4	3.24	
339	釘	直交	12号墓壙	67.913	(3.1)		(0.66)	欠損(上)
340	釘	平行	12号墓壙	67.913	(2.6)		(1.08)	欠損(上下)
341	釘	c	12号墓壙	67.857	(3.1)	1.7	(2.57)	欠損(下)
342	釘	g	12号墓壙	67.885	5.2	1.4	3.55	
343	釘	b	12号墓壙	67.844	4.7	1.6	3.49	
344	釘	平行	12号墓壙	67.848	(1.8)		(1.86)	欠損(下)
345	釘	b	12号墓壙	67.813	5.6	1.6	5.51	1.2 cm分割もの付くか?
346	釘	h	12号墓壙	67.883	4.8		2.76	
347	釘	h	12号墓壙	67.883	4.8		2.81	
348	釘	直交	12号墓壙	67.835	(2.3)		(2.34)	欠損(下)
349	釘	d	12号墓壙	67.851	5.0	3.4	2.95	
350	釘	平行	12号墓壙	67.935	(3.3)		(1.63)	欠損(上)
351	釘	a	12号墓壙	67.911	4.4		3.61	
352	釘	直交	12・33号墓壙	67.891	(4.3)		(2.83)	欠損(上)
353	釘	−	12・33号墓壙	67.795	−	−	−	木片?(サビあり)
354	釘	直交	12・33号墓壙	68.207	(3.0)		(4.44)	欠損(下)
355	釘	f	12・33号墓壙	68.022	5.1	1.4	2.61	
356	釘	b	12・33号墓壙	67.846	5.3	1.4	2.92	
357	釘	c	13号墓壙	67.951	5.1	1.4	2.46	
358	釘	直交	13号墓壙	67.697	(2.1)		(2.02)	欠損(ド)
359	釘	c	13号墓壙	68.005	(2.7)	1.6	(1.67)	欠損(ド)
360	釘	c	13号墓壙	67.617	(3.4)	1.7	(2.73)	欠損(下)
361	釘	b	14号墓壙	68.064	(3.6)	1.6	(2.53)	欠損(下)
362	釘	c	14号墓壙		4.4	1.6	2.23	
363	釘	平行	14号墓壙	67.648	(4.4)		(2.53)	欠損(上)
364	釘	c	14・41号墓壙	67.986	(3.3)	1.8	(5.21)	欠損(下)か?
365	釘	h	15号墓壙	68.322	(4.2)		(1.03)	欠損(上)
366	釘	直交	15号墓壙	68.323	(3.3)		(3.86)	欠損(下)・他2本付着か?
367	釘	直交	15号墓壙	68.323	(2.9)		(2.73)	欠損(下)
368	釘	h	15号墓壙	68.206	4.0		1.89	
369	釘	e	15号墓壙	68.135	4.4	(2.0)	2.73	
370	釘	d	15号墓壙	68.094	4.0	2.3	3.80	下端屈曲
371	釘	g	15号墓壙	68.278	(3.0)	(1.8)	(2.57)	欠損(ド)
372	釘	h	15号墓壙	68.273	3.7		6.30	太い(釘か?)・湾曲する
373	釘	e	15号墓壙	68.139	2.8	(2.7)	3.81	下端屈曲(直4.2)(屈曲部にのみ木質付着)
374	釘	直交	15号墓壙	68.115	(2.4)		(1.59)	欠損(下)
375	釘	h	15号墓壙	68.276	(2.1)		(2.51)	欠損(上下)
376	釘	a	15号墓壙	67.999	4.1		3.21	下半屈曲
377	釘	h	15号墓壙	68.150	(2.3)		(1.11)	欠損(上)
378	釘	h	15号墓壙	68.142	3.7		3.64	下半屈曲(直4.3)
379	釘	c	15号墓壙	68.165	4.3	1.9	3.10	
380	釘	c	15号墓壙	68.143	4.7	1.6	1.99	
381	釘	g	15号墓壙	67.993	4.4	(2.0)	2.86	
382	釘	b	15号墓壙	68.232	4.3	1.7～1.3	2.35	
383	釘	b	15号墓壙	67.959	4.1	1.6	1.86	

掲載番号	種類	分類	遺構名	出土位置(標高・m)	長さ(cm)	巾さ(cm)	重量(g)	備　考
384	釘	a	15号墓壙	68.100	4.9		3.67	
385	釘	b	15号墓壙	68.139	3.4	1.3	3.02	
386	釘	c	15号墓壙	68.035	3.9	1.6	2.82	下半屈曲
387	釘	a	15号墓壙	68.002	4.3		4.20	
388	釘	h	15号墓壙	68.002	4.5		3.30	
389	釘	直交	15号墓壙	68.006	(1.8)		(2.24)	欠損(下)
390	釘	c	15号墓壙	68.068	4.6	1.6	4.08	
391	釘	h	15号墓壙	68.068	(3.7)		(1.28)	欠損(上)
392	釘	a	15号墓壙	67.884	4.1		2.84	
393	釘	c	15号墓壙	67.921	4.1	1.2	1.64	
394	釘	c	15号墓壙	67.936	4.3	1.3	3.61	
395	釘	g	15号墓壙	67.815	4.4	(1.5)	1.73	頭部ナシか？
396	釘	b	15号墓壙	67.829	5.3	1.6	3.39	
397	釘	直交	15号墓壙	67.729	(2.5)		(2.40)	欠損(下)
398	釘	直交	15号墓壙	67.696	(2.2)		(1.09)	欠損(上下)
399	釘	h	15号墓壙	67.638	(3.6)		(2.54)	ﾓﾐﾞ欠損？(下)
400	釘	a	15号墓壙	67.655	4.2		2.69	やや屈曲
401	釘	直交	15号墓壙	67.720	(2.2)		(3.53)	欠損(下？)
402	釘	c	15号墓壙	67.676	3.9	1.7	2.13	
403	釘	c	15・13号墓壙	68.056	4.3	1.6	1.92	
404	釘	b	15・13号墓壙	68.106	4.4	1.6	2.58	
405	釘	a	15・13号墓壙	67.746	5.0		5.24	
406	釘	c	15・13号墓壙	67.727	4.8	1.6	2.60	
407	釘	b	16・12号墓壙	68.214	4.6	1.6	3.72	
408	釘	－	遺構外	67.877	－	－		遺物なし
409	釘	b	遺構外	67.703	4.3	1.4	2.33	
410	釘	直交	遺構外	67.703	(2.1)		(2.06)	欠損(下)
501	釘	－	1号墓壙	－	－	－	18.86	7点
502	釘		2号墓壙	－		－	1.15	1点
503	釘		4号墓壙	－		－	0.76	1点
504	釘	－	4～6号墓壙	－	－	－	72.27	40点（破片多い）
505	釘	－	5号墓壙	－	－	－	32.67	21点
506	釘	－	6号墓壙	－	－	－	61.01	11点
507	釘	－	6号墓壙	－	－	－	34.37	13点
508	釘	－	6～8号墓壙	－	－	－	31.94	10点
509	釘	－	7号墓壙	－	－	－	2.74	1点
510	釘	－	7・8号墓壙	－	－	－	54.40	27点（破片多い）
511	釘	－	9・10号墓壙	－	－	－	30.26	13点（破片多い）
512	釘	－	11号墓壙		－	－	38.97	14点
513	釘	－	12号墓壙	－	－	－	76.11	24点
514	釘		13号墓壙	－		－	97.52	36点
515	釘	－	14号墓壙	－		－	8.30	4点
516	釘	－	15号墓壙	－	－		50.86	20点
517	釘	－	16号墓壙	－	－	－	5.99	2点
518	釘	－	墓壙一括	－	－	－	96.84	36点

第15表　遺構別釘出土量一覧表

遺構名	出土地点（計）	出土地点（括弧内は遺物なしもしくは木質のみ） 単独 点数	単独 重量(g)	重複 点数(遺構別)	重複 点数	重複 重量(g)(遺構別)	重複 重量(g)	計 点数	計 重量(g)	一括 単独 点数	一括 単独 重量(g)	一括 重複 点数(遺構別)	一括 重複 点数	一括 重複 重量(g)(遺構別)	一括 重複 重量(g)	一括 計 点数	一括 計 重量(g)	備考
1号墓壙	12	4(+7)	8.37	1	1	3.01	3.01	5(+7)	11.38	7	18.86	－	－	－	－	7	18.86	[地点重複]11号墓壙
2号墓壙	24	14(+1)	49.07	2+7	9	9.35+30.13	39.48	23(+1)	88.55	1	1.15	－	－	－	－	1	1.15	[地点重複]3+4分墓壙
3号墓壙	18	14(+1)	34.23	2	2	9.35	9.35	17(+1)	43.58	－	－	40	40	72.27	72.27	40	72.27	[地点重複]2号墓壙 [一括重複]3・5・6号墓壙
4分墓壙	29	22	40.83	7	7	30.13	30.13	29	70.96	1	0.76	－	－	－	－	1	0.76	[地点重複]2分墓壙
5分墓壙	16	16	36.43	－	－	－	－		36.43	21	32.67	40	40	72.27	72.27	61	104.94	[一括重複]3・5・6号墓壙
6分墓壙	11	11	25.31	－	－	－	－	－	25.31	24	95.38	40+10	50	72.27+31.94	104.21	74	199.59	[一括重複]3・5・6号+6・7・8号墓壙
7号墓壙	6	4(+2)	7.10	－	－	－	－	4	7.10	1	2.74	10+22	32	31.94+54.40	86.34	33	89.08	[一括重複]6・7・8号+7・8号墓壙
8分墓壙	－	－	－	－		－	－	－	0.00	－	－	10+22	32	31.94+54.40	86.34	32	86.34	[一括重複]6・7・8号+7・8号墓壙
9号墓壙	2	2	4.98	－	－	－	－	－	4.98	－		13	13	30.26	31.26	13	31.26	[一括重複]9・10分墓壙
10号墓壙	15	15	29.70	－	－	－	－	－	29.70	－	－	13	13	30.26	31.26	13	31.26	[一括重複]9・10号墓壙
11号墓壙	8	5(+1)	16.50	1+1	2	3.01+ 5.21	8.22	7(+1)	24.72	14	38.97		－	－	－	14	38.97	[地点重複]1号墓壙
12号墓壙	26	21	58.08	4(+1)+1	5	12.80+ 3.72	16.52	26(+1)	74.60	24	76.11	－	－	－	－	24	76.11	[地点重複]13+16号墓壙
13号墓壙	13	4	8.88	4(+1)+4	5	12.80+12.34	25.14	12(+1)	34.02	36	97.52	－	－	－	－	36	97.52	[地点重複]12+15号墓壙
14号墓壙	4	3	7.29	1	1	5.21	5.21	4	12.50	4	8.30	－	－	－		4	8.30	[地点重複]11号墓壙
15分墓壙	42	38	105.14	4	4	12.34	12.34	42	117.48	20	50.86	－	－	－	－	20	50.86	[地点重複]13分墓壙
16号墓壙	1	－	－	1	1	3.72	4.72	1	4.72	2	5.99	－	－	－	－	2	5.99	[地点重複]12分墓壙
墓壙一括	－	－		－	－	－	－	－	0.00	－	－	36	36	96.84	97.84	36	97.84	

種類	出土地点		一括		計	
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
釘	192	511.61	283	719.41	475	1249.94
木片	15	－		－	－	
計	207	－	－		－	－

5　ま　と　め

調査区内より検出された墓壙群の特徴をまとめていきたい。（第 13 表）

〈墓標〉調査区内の墓壙群は、現在使用されていないものの地権者の先祖墓と認知されており、墓標も残存していた。しかし、調査開始時にはすでに改葬が行われた後であった。墓壙自体は、掘方上部が掘削されていただけで、埋葬施設までは攪乱を受けていなかったが、墓標は現在地権者が墓地として使用している近隣の歓喜寺へと移設されていた。地権者に改葬前の状況を聞いたところ、墓標が数基（4 ～ 5 基程度か？）東西方向に一列に並んでいたようである。その位置を推定復元すると 5 ～ 6 号墓壙周辺であろうか。これらの墓標は移設先で下半を埋められ固定された状態で、他の墓標と一括して置かれていた。そのため、長根Ⅰ遺跡より移設した墓標を特定することはできなかった。しかしその中でも、所有者の証言にもっとも近い形状を持つものが第 84 図の墓標である。年号は「文政 5 年（1822 年）」と「元治元年（1864 年）」と記されている。また、地権者が同寺内に墓地を設けた最初の墓標には明治 27 年と記されていた。このため、長根Ⅰ遺跡調査区内の墓地使用下限は明治 27 年以前と推定される。

第 82 図　墓標

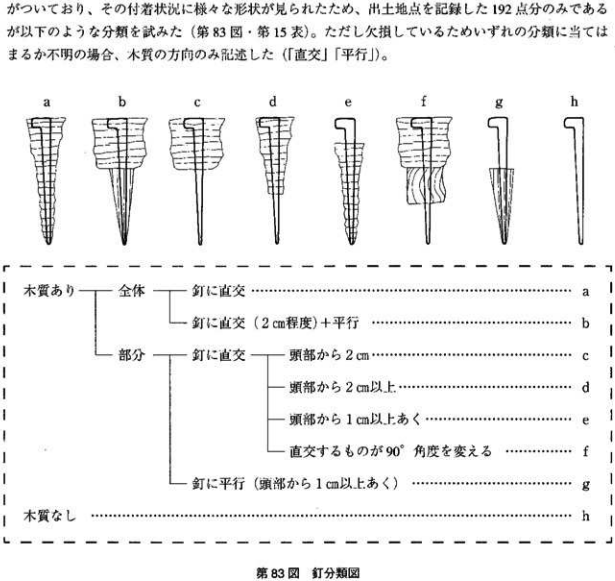
〈規模・形状・主軸方向〉調査上の都合により、重複が激しい墓壙群を同時に掘り下げてしまったため、全形を把握しえたものは 16 基中 10 基である。形状は、長方形 4 基、正方形 6 基である（隅丸もこれに含む）。残りの 6 基も残存部から推定するとおおむね方形で、長方形・正方形のいずれかに属するものと思われる。規模は、長方形のものが長辺 120 ～ 140 ㎝、短辺 90 ～ 100 ㎝程度で、正方形が一辺約 100 ㎝である。検出面からの深さは長方形の墓壙が 50 ～ 65 ㎝、正方形のものが 75 ～ 106 ㎝と、後者のほうが深い傾向がみられる。上記に当てはまらない規模を持つ遺構はいずれも正方形のもので、一辺 150 ㎝の 10 号墓壙、深さ 58 ㎝の 4 号墓壙である。10 号墓壙は前述の通り別遺構との重複が想定され、4 号墓壙は幼児墓のため他と規模を異にする可能性がある。掘方の主軸方向は、1・2・13 号墓壙が西から南を向くが、これ以外は北西、N ― 14° ～ 45° ―W の範囲内におさまる。掘方形状による軸差ははっきりとは認められず、長方形のもののほうが若干真北に近い傾向がみられる程度である。

〈埋葬姿勢・方位・方向〉16 基すべての墓壙で骨片が確認され、そのうち 11 体の埋葬姿勢を確認した。

横臥屈葬6体、このうち仰臥が3体、側臥2体、不明1体である。座葬は5体で、蹲踞姿勢または胡床と思われる。掘方との関係は、長方形が横臥屈葬、正方形が座葬となる。そのため、座葬の6号墓壙は検出面からの深さもあわせて考え、正方形の掘方を持つ墓壙である可能性が高い。横臥屈葬の埋葬方向は、西南西に頭部を置く1・2号墓壙と北北西の3（・16？）号、ほぼ真北に向く1・12号墓壙に分かれる。座葬の5体は、4号墓壙が南南東を背にして北北西を向くのに対し、これ以外はすべてその反対、北北西を背に南南東を向く。以上のように椎骨（と脚部）を基準とした埋葬方向は北から西の範囲におさまるものが多いが、掘方の持つ軸よりもばらつきが見られる。

〈年齢・性別〉12体の年齢が判断できた。4号墓壙が5歳前後の幼児で、これを除きすべて成人である。内訳は壮年6体、壮年以上1体、熟年1体、熟年以上2体、老年1体、成人1体と、壮年期の人骨が半数以上を占める。性別は女性5体、男性4体が確認され、男女比はほぼ同等である。横臥屈葬は女性、座葬は男性が多いものも、性別・年齢による埋葬姿勢の違いは、はっきりとは認められなかった。横臥屈葬には仰向け（仰臥）と横向き（側臥）がみられ、前者が女性2体、後者が男性2体ずつとなる。埋葬方位についても特に年齢・性差は認められなかったが、上述の通り幼児人骨（4号墓壙）が成人のものと反対方向を向き埋葬されていた。

〈釘〉墓壙内より出土した釘は合計475点、1249.94 g（木質部も含む）である（第15表）。このうち、出土地点を記録できたものが192点、一括で取り上げたものが283点となる。ほとんどの釘には木質がついており、その付着状況に様々な形状が見られたため、出土地点を記録した192点分のみであるが以下のような分類を試みた（第83図・第15表）。ただし欠損しているためいずれの分類に当てはまるか不明の場合、木質の方向のみ記述した（「直交」「平行」）。



第83図　釘分類図

192点中木質がつかないもの（h）は20点のみで、このうち欠損のない完形のものはわずか8点であった。これらは、釘山にするために頭部をわずかに折り曲げた形を持ち、長さが4～5㎝前後、重量2～3ｇ程度である。木質が付着するもの（a～g）も断片的に見える形状から推定するとhと同じ形である。木質の付着状況はa～gと6種類に分類され、a 23点、b 42点、c 21点、d 3点、e 3点、f 8点、g 9点を数える。これら6種の本来の木質付着形状は、木質が釘に直交して付着するa、頭部から2㎝程度直交して付着しそれより下は平行するb、直行するものが90°角度を変えて付着するfの3種類であったと考えられる。これ以外は（c）・d・e・hがa、c・g・hがb、（e）・hがfに属する可能性が高い。bは木目の方向が変わることから、方形の棺の側板の接続に使用した可能性が高い。釘頭部に付着している直交する木質は、ほとんどが幅2㎝程度で、これにより棺に使用した板の厚さが推定される。これに対してaは木目が変わらず、fは材自体の角度が変わる。上蓋や底板、または補強材の打ち込みなどに使用した場合このように木質が付着する可能性が考えられるが、出土位置・層位との関係などもあわせて、詳細を調べることができなかった。

〈棺〉上述のとおりすべての墓壙内から釘が出土しており、釘には木片が付着していること、その木質の目の方向などから方形木棺の使用が想定される。横臥屈葬には長方形の棺が想定され、釘の出土位置から推定した規模は、80×45㎝前後が多い。12号墓壙は釘からは復元できないものの、人骨の残存状態が良く、この範囲と他のものとの規模はほぼ同じである。座葬も、人骨を方形に囲むように釘が出土していることから（4・15号墓壙）桶ではなく、板を四角く組み合わせた棺を用いたようである。釘から規模が把握しえたものは4号墓壙（幼児埋葬）のみで、一辺が25㎝程度の正方形の棺に納められていた。このほかは人骨の出土状況から推定すると一辺がおおむね35～40㎝前後に収まる。棺の高さは、埋土の堆積状況から上蓋の崩落が想定されるため、本来の状態は不明であるが、残存する人骨から計測すると座葬の場合、一辺の長さがほぼ等しく立方体となる。棺の規模、埋葬姿勢もあわせて考えると、棺内に遺体を押し込むように埋葬したものと推定される。前述の通り横臥屈葬の場合男性が側臥姿勢であることは、性差というよりも、棺内に遺体を収める際に側臥のほうがより体を折り曲げて納めることが可能で、体の大きい人物（主に男性）がこの姿勢をとったのではないかと思われる。また、椎骨を基準とした埋葬方位にややばらつきが見られるのも、これに起因するのかもしれない。

〈重複関係〉検出時の平面形、断面埋土堆積状況及び人骨の残存状況から判断される新旧関係は次の通りである（旧→新）。14号墓壙←11号墓壙→1号墓壙、3号墓壙？→2号墓壙→4号墓壙、3号墓壙→5号墓壙、6号墓壙←7号墓壙→8号墓壙、10号墓壙→9号墓壙、13・16号墓壙→12・15号墓壙である。

〈遺物出土状況〉各遺構出土の遺物は下表の通りである（第16表）。遺物は種類ごとに副葬位置がある程度決まっていたようにみうけられる。キセルは横臥屈葬では頭部～肩部の左右どちらかに置かれ、吸い口が頭部側となる例が多い。座葬では遺体の片側に立てかけていたようであるが、雁首・吸口の上下はどちらも確認された。鉄製品は2号墓壙では頭部と脚部、3号墓壙では脚部に見られるが、その他は不明なものが多い。銭貨は、いずれの埋葬姿勢においても脚部付近に置かれており、座葬である4号・15号墓壙内では、両脚部の間から出土している。

〈出土遺物・陶磁器〉墓壙内より陶磁器の出土は3基、5点と少ない。このうち、はっきりと遺構に伴うと判断されるのは12号墓壙の頭骨付近から出土した美濃産の小碗（94）のみで、19世紀以降に位置づけられる。

〈出土遺物・キセル〉4号・9号・10号墓壙を除く13基の墓壙内より出土した。このうち14号墓壙

で吸口が2点、16号墓壙では雁首のみの出土となるが、これ以外は一対となるためおおむね各遺構に伴うものと判断したい。キセルの出土していない3基のうち4号墓壙は幼児墓であり、性別を問わず成人墓には副葬されていた確立が高い。これらを形態別に分けると以下のように分類される（古泉1987の分類による。Ⅰ～Ⅲ期は該当遺物がないため省略）。

Ⅳ．河骨形。袖強帯は消失する。（18世紀前半）

Ⅴ．脂返しの湾曲が小さくなる。（18世紀後半）

Ⅵ．火皿は極端に小型化し、逆台形を呈する。脂返しの湾曲はほとんど消失し火皿下に首部が直角に接続する。（19世紀以降）

Ⅳ～Ⅴ期が1号・2号・3号・5号・7号墓壙、Ⅴ期が8号・11号・13号・16号、Ⅵ期が6号・12号・16号墓壙に該当する。

〈出土遺物・その他の金属製品〉鉄製品は火打ち金が3点と最も多く、2号（4号）・6号・15号墓壙より出土した。2号墓壙ではこのほか銹・毛抜きが伴う。これ以外、3号・5号墓壙からも鉄製品が出土しており、12号墓壙人骨は髪飾り（笄・拝）をつけていた。

〈出土遺物・銭貨〉16基中13基の墓壙より出土した（3・14・16号墓壙を除く）。銅銭は合計74枚、内訳は照寧元寶（初鋳1068年）1枚、古寛永15枚、文銭3枚、新寛永50枚、寛永通宝銭種不明2枚、一銭3枚である。また第15表備考欄には参考資料として銹所を記述した（日本銀行調査局1974）。鉄銭は錆びて癒着しているため、枚数が確認できなかったものが多いが、60枚程度、345.51 g出土した。各墓壙内出土銭貨（銭種）を見ていくと、古寛永または文銭のみで構成される遺構はなく、す

第16表　遺構別出土遺物一覧表

遺構名	陶磁器	土製品	キセル	金属製品	玉	銭					鉄銭	その他
						古寛永	文銭	新寛永	不明・その他	計		
1号墓壙	－		Ⅳ～Ⅴ	－	6	－	－	－	1	1	○	
2号墓壙	－		Ⅳ～Ⅴ	毛抜き2・銹・（火打ち金）		（1）	（1）	3	－	3（12）		
3号墓壙	－	－	Ⅳ～Ⅴ	棒状・板状			－	－	－	－		
4号墓壙	－	－		－	－	（2）	（1？）	6（13）	－	6（＋16）		
5号墓壙	－	－	Ⅳ～Ⅴ	リング状・板状	－	3		6	1	10	○	
6号墓壙	○	2	Ⅵ	火打ち金	－	2		3	－	5	○（4文銭）	火打ち石
7号墓壙		－	Ⅳ～Ⅴ	－	－	－	－		－	－	○	
8号墓壙	－	－	Ⅴ	－	－	－	－	－	－	－	（○）	
9号墓壙	－	－	－	－	－	2	－	4		6		
10号墓壙	－		－	－	－	－	－	－		－		
11号墓壙	－		Ⅴ	－	2	1？	－	－	－	1	○	
12号墓壙	○	1	Ⅵ	笄・拝			－	2	1	3		
13号墓壙	○	－	Ⅴ		－	1	1	1	－	3	○	
14号墓壙	－	－	根山のみ		1	－		－	－	－		
15号墓壙		－	Ⅵ	火打ち金	（18）	（3）	－	5（7）	3	8（10）		火打ち石・刃殺
16号墓壙		－	Ⅴ	－	－	－	－		－	－		

べて新寛永もしくは鉄銭を伴う。各遺構出土枚数は、6枚なのが4号・9号墓壙のみでかなりばらつきがみられる。重複が激しく、しかも出土位置・層位を把握しきれなかったために埋葬時に伴うものを厳密に抽出できていない可能性があるが、4～5枚が1号・2号・11号、8枚が15号、鉄銭を含むものは合計枚数10枚を超える遺構が多い。

以下各遺構出土銭種により遺構の上限年代を求めたい。

A．新寛永（1697年以降）－2号・3号・4号・9号墓壙

B．鉄一文銭（1739年以降）－1号・5号・8号・11号・12号・13号墓壙

C．鉄四文銭（1860年以降）－6号墓壙

D．一銭（1882年以降）－15号墓壙

〈墓壙の年代〉上記の出土遺物及び遺構の重複状況から墓壙の上限年代を求めることができる。

1697年（17世紀末葉）以降－2号・3号・4号・7号・9・10号墓壙

1739年（18世紀中葉）以降－5号墓壙

18世紀後半以降－1号・8号・11号・13号・14号・16号墓壙

19世紀以降－12号墓壙

1860年（19世紀後半）以降－6号墓壙

1882年（明治15年）以降－15号墓壙

この中でも、17世紀末葉以降では3号（？）→2号→4号墓壙、10→9号墓壙、18世紀後半以降では11号→1・14号墓壙とそれぞれ重複がみられ、ある程度の時期幅が存在すると思われる。これらの墓壙の下限年代は、所有者が近隣の寺に墓地を設けた明治27年に以前に求められる。

〈墓壙の変遷〉　墓壙の上限年代および重複関係をみていくと、古い時期の墓壙は長方形の掘方を持つ横臥屈葬、新しいものは正方形の掘方を持つ座葬が多い傾向がある。しかし、これらある一定時期を境にはっきりと分かれるものではなかった。これらの墓壙群は18～19世紀の間に少なくとも16基が互いに重なり合って構築されていた。墓壙群は6.0×3.8 m、わずか23 ㎡ほどの範囲に収められており、墓域がかなり限定されていたことが窺える。

Ⅳ　参考文献

前沢町教育委員会　2003　『岩手県前沢町文化財調査報告書第14
東館（赤生津域）遺跡・五反田遺跡発掘調査報告書』
谷畑未帆・鈴木隆雄　2004　『考古学のための古人骨調査マニュアル』学生社
永井久美男　1996　「日本出土銭総覧1996年版」兵庫埋蔵銭調査会
日本銀行調査局　1974　『日本の貨幣3』東洋経済新報社
吉泉弘　1987　『江戸の考古学』

付編　出土人骨について

国際医療福祉大学リハビリテーション学部
奈良貴史

はじめに

2004年、岩手県花巻市長根Ⅰ遺跡の近世後半から近代初頭に属する土坑墓から複数の人骨が出土した。人類学的研究調査をおこなわれず、人骨は発掘調査終了後に再埋葬された。しかし、出土した人骨は、土を丁寧に落とされた後、遺構ごとに発掘担当者により写真撮影されていたので、本編は不十分ながらも、これらの人骨の年齢・性別等を残された写真から推定するものである。

1号墓壙

写真は頭蓋正面観（写真1-1）、側面観（写真1-2）、上面観、底面観、下顎上面観（写真1-3）、頚椎6個と胸椎2個の上面観（写真1-4）と四肢骨の一部が存在する。年齢は下顎の第3大臼歯がすでに萌出完了していることから18歳には達していた。さらに写真で見る限り、冠状縫合の外版の半分以上は癒合していることと、頚椎の椎体には加齢的な骨増殖が見られないことから熟年程度と思われる。性別は乳様突起が比較的小さく、前頭結節が認められ、額が垂直に立ち上がることから女性と推定される。

2号墓壙

写真は頭蓋上面観（写真1-5）、側面観（写真1-6）、底面観、下顎上面観（写真1-7）、左右の寛骨の後面観（写真1-8）と頚椎と指骨の一部が存在する。年齢は下顎の第3大臼歯がすでに萌出完了していることから18歳には達していた。さらに写真で見る限り、頭蓋3主縫合の外版はいずれも癒合していないことから壮年期前半と思われる。性別は乳様突起が比較的大きく、寛骨の大坐骨切痕の形状から男性と推定される。

3号墓壙

写真は左側頭部の側面観（写真3-1）、四肢骨と指骨の一部が存在する。年齢は上腕骨の近位の骨端線が認められないことから成人段階には達していた。さらにラムダ縫合の外板の一部が癒合していることから熟年以上と思われる。性別は乳様突起が比較的大きいことから男性と推定される。

4号墓壙

写真は頭蓋正面観（写真2-1）、側面観（写真2-2）、上面観（写真2-3）、底面観、下顎上面観（写真2-4）、左右の鎖骨、18本の肋骨、11個の椎骨、左右の腸骨、恥骨、坐骨、主な四肢骨と全身骨の俯瞰（写真2-5）が存在する。年齢は下顎の第1大臼歯が萌出途中であることから5歳前後と推定される。この年齢段階の骨からの性別推定は困難であり、不明である。

5号墓壙

写真は頭蓋上面観（写真3-2）、胸椎と腰椎の上面観（写真3-3）、左右の寛骨（写真3-4）と仙骨前・後面観、肋骨と四肢骨の一部（写真3-5）が存在する。年齢は仙骨の横線が閉鎖していることから成

人段階には達していた。さらに頭蓋3主縫合の外版はいずれも癒合していないことから壮年期前半と思われる。年齢は寛骨の大坐骨切痕の形状が放物線を呈することから女性と推定される。前頭縫合が認められる。左右の寛骨の耳状面前方に出産の際に生じるとされる溝、いわゆる出産痕が見られる。腰椎の椎体に変形性脊椎症と思われる骨増殖が認められる。

6号墓壙a

頭頂部の上面観の写真のみが存在する（写真3-6）。年齢は冠状・矢状縫合の外板において癒合し始めているので、成人段階に達していた。性別に関しては判断できる材料がなく不明である。

6号墓壙b

写真は頭蓋正面観（写真3-7）、側面観、上面観、底面観と下顎上面観（写真3-8）が存在する。年齢は下顎の第3大臼歯が萌出途中であることから15歳以上と推定される。さらに写真で見る限り、頭蓋3主縫合の外版はいずれも癒合していないことから壮年期前半までの20歳前後と思われる。性別は眉間が隆起し、額が垂直に立ち上がらないことから男性的である。

6号墓壙c

写真は頭蓋正面観（写真4-1）、側面観、上面観、底面観と下顎上面観（写真4-2）、側面観、底面観、6個の胸椎の上面観、左右の鎖骨と肋骨片、左右の寛骨の後面観と四肢骨の一部が存在する。年齢は大腿骨の近位の骨端線が認められないことから成人段階には達していた。さらに写真で見る限り冠状・矢状縫合の外板において半分程度癒合しているので、熟年程度と思われる。前頭縫合が認められる。性別は乳様突起が比較的小さく、額が垂直に立ち上がることから女性と推定される。第1・2小臼歯以外のすべての歯が脱落し、歯槽が閉鎖しており骨吸収が進んでいる。また、下顎右骨体臼歯部外側面に直径3cmにも及ぶ球状の骨増殖が認められる。

7号墓壙

写真は頭蓋上面観（写真4-3）、4個の歯冠の上面観と四肢骨の一部が存在する。年齢は冠状縫合の外板において癒合し始めているので、壮年以上の成人と思われる。性別に関しては判断できる材料がなく不明である。

8号墓壙

写真は頭蓋上面観（写真4-4）、下顎の正中部と4本の歯冠と四肢骨の一部が存在する。年齢は小臼歯の歯根が完成していることから15歳以上と推定される。性別に関しては判断できる材料がなく不明である。

9号墓壙

写真は3本の歯と頭蓋と四肢骨の10破片が存在するだけである。現存する写真からは年齢・性別の推定は困難である。

11 号墓壙

写真は右下顎対の体の一部と歯 5 本（写真 4-5）と四肢骨の一部が存在する。年齢は下顎の第 2 大臼歯が萌出終了していることから 12 歳以上と推定される。性別に関しては判断できる材料がなく不明である。

12 号墓壙

写真は頭蓋側面観（写真 4-6）、下顎上面観、7 個の頸椎と 1 個の胸椎の上面観（写真 4-8）、左右の寛骨の後面観（4-9）と四肢骨の一部が存在する。年齢は下顎の左第 3 大臼歯がすでに萌出完了していることから 18 歳には達していた。さらに大臼歯の咬耗がそれほどでもないので壮年程度と思われる。性別は寛骨の大坐骨切痕の形状が放物線を呈することから女性と推定される。

13 号墓壙

写真は頭蓋正面観（写真 5-1）、側面観、上面観、底面観と下顎上面観（写真 5-2）と四肢骨の一部（写真 5-3）が存在する。年齢は大腿骨の近位の骨端線が認められないことから成人段階には達していた。さらに冠状・矢状縫合の外板において癒合が認められず、壮年程度と思われる。性別は乳様突起が比較的大きく、額が垂直に立ち上がらないことから男性と推定される。

14 号墓壙

写真は頭蓋側面観（写真 5-4）、11 本の歯、環椎と四肢骨の一部が存在する。年齢は大腿骨の近位の骨端線が認められないことから成人段階には達していた。さらにラムダ縫合の外板において癒合が認められず、壮年程度と思われる。性別に関しては判断できる材料がなく不明である。

15 号墓壙

写真は頭蓋正面観（写真 5-5）、側面観、上面観、底面観と下顎上面観（写真 5-6）と環椎、軸椎と癒合した椎体（写真 5-7）と四肢骨の一部（写真 5-8）が存在する。年齢は大腿骨の近位の骨端線が認められないことから成人段階には達していた。さらに冠状縫合の外板がほとんど癒合しているうえに、下顎の左犬歯を除いてすべての歯が脱落し、歯槽が閉鎖していることと椎体に加齢性と思われる骨増殖が見られることから老年と思われる。性別は乳様突起が比較的大きく、眉間が隆起し、額が垂直に立ち上がらないことから男性と推定される。

16 号墓壙

写真は 12 本の歯と四肢骨の一部が存在する。年齢は上顎の歯冠が完成していることから 7 歳以上と思われるが、詳細は不明。性別に関しては判断できる材料がなく不明である。

写　真　図　版

遺跡全景（空中写真）

調査区全景（西から）

写真図版 25　遺跡・調査区全景

調査区全景（東から）

調査前風景（西から）

試掘（南から）

検出（南から）

基本層序（北から）

写真図版 26　調査風景、基本層序

柱穴列（西から）

柱穴列（北から）

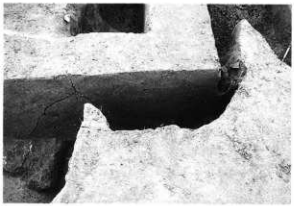
墓壙群　検出状況（南から）

墓壙群全景（西から）

墓壙群全景（南から）

写真図版 27　柱穴列・墓壙群

1号墓壙断面（南から）



11号墓壙断面（南から）

2号墓壙断面（南から）

4号墓壙断面（南から）

2・3・5号墓壙断面（西から）

6号墓壙断面（南から）

9・10号墓壙断面（西から）

作業風景（11～15号墓壙付近・南から）

写真図版28　墓壙断面

1号墓壙全景（東から）

1号墓壙出土人骨（東から）

2～4号墓壙全景（西から）

2～4号墓壙出土人骨（南から）

2号墓壙出土人骨（北から）

4号墓壙　出土人骨（南東から）

3号墓壙出土人骨（南西から）

2～6号墓壙出土人骨（北から）

写真図版29　1～6号墓壙

5～8号墓壙全景（北東から）

5号墓壙出土人骨（北から）

6号墓壙出土人骨（北から）

6号墓壙作業風景（南から）

6号墓壙・遺物出土状況（南から）

9号墓壙全景・出土人骨（西から）

10号墓壙全景（東から）

10号墓壙出土人骨（北から）

写真図版30　5～10号墓壙

1・11号墓壙出土人骨（南から）

11号墓壙出土人骨（南から）

12～16号墓壙全景（南から）

12～16号墓壙全景（東から）

12墓壙出土人骨（東から）

12号墓壙出土人骨頭部近景（西から）

12号墓壙遺物出土状況（南から）

12号墓壙遺物出土状況（西から）

写真図版31　1・11～16号墓壙

7・8号墓壙出土人骨（南から）

11～16号墓壙作業風景（南西から）

12・13号墓壙出土人骨（南から）

13号墓壙出土人骨（北から）

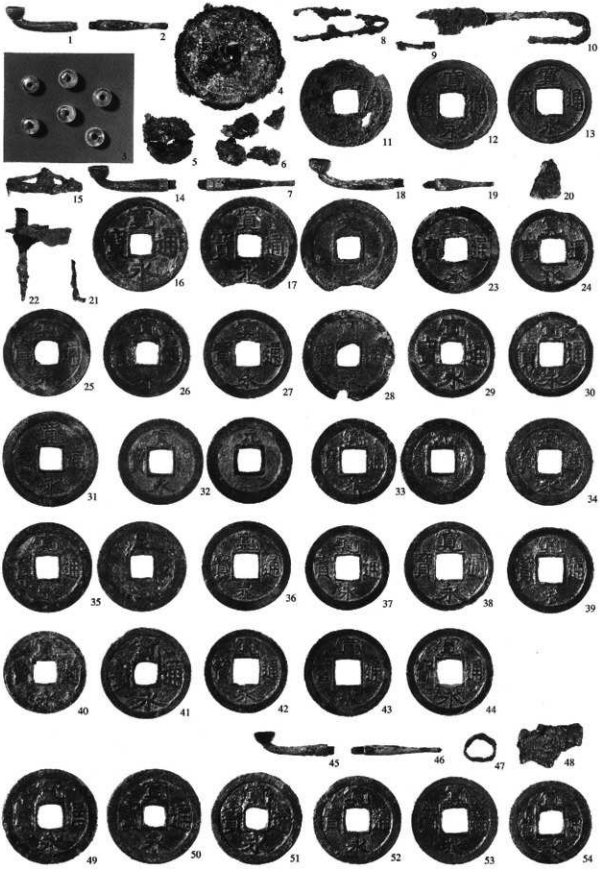
14・15号墓壙出土人骨（西から）

15号墓壙出土人骨（南東から）

16号墓壙出土人骨（東から）

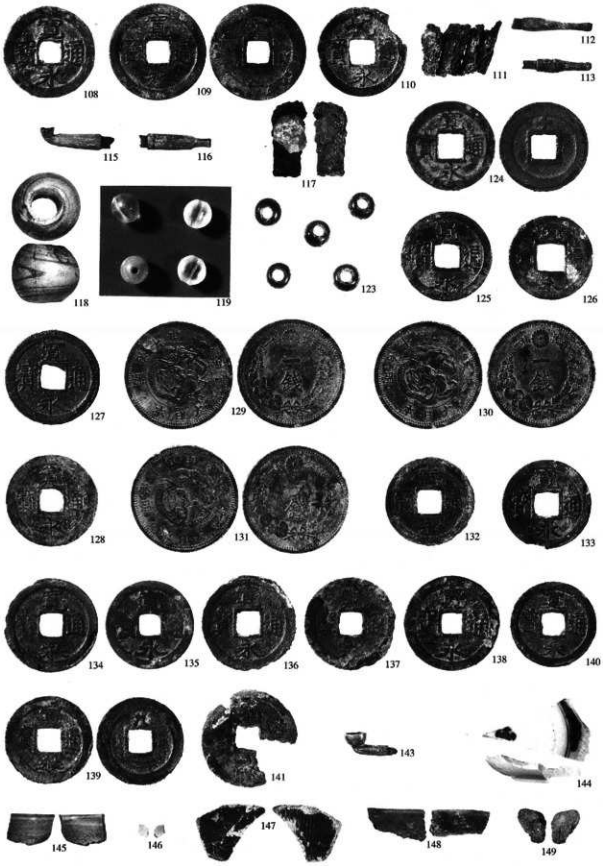
墓標

写真図版32　7・8・11～16墓壙・墓標

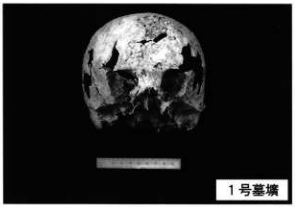


写真図版 33　出土遺物(1)

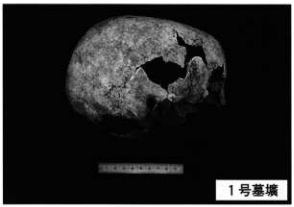
写真図版 34　出土遺物(2)



写真図版 35　出土遺物(3)

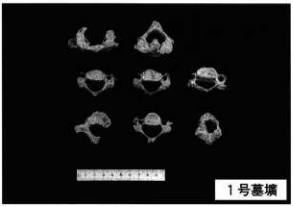


1－1



1－2

1－3



1－4

1－5

1－6

1－7

1－8

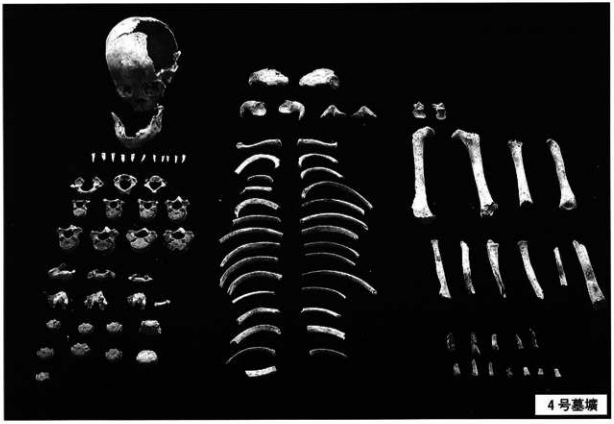
写真図版 36　出土人骨(1)

2－1

2－2

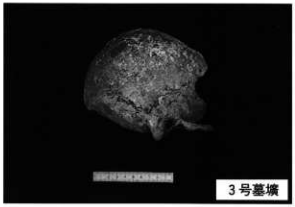
2－3

2－4

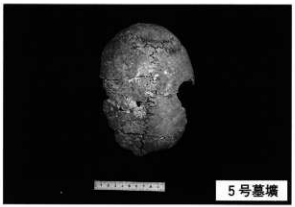


2－5

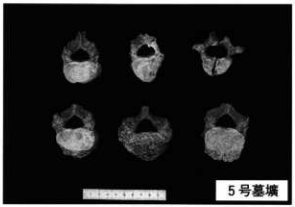
写真図版 37　出土人骨(2)



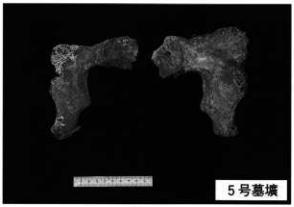
3－1



3－2



3－3



3－4

3－5

3－6

3－7

3－8

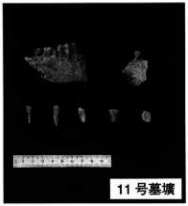
写真図版 38　出土人骨(3)

4－1

4－2

4－3

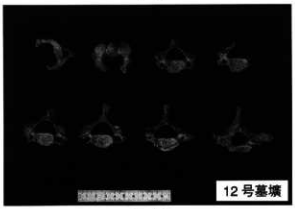
4－4



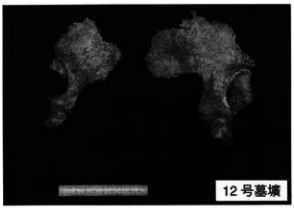
4－5

4－6

4－7



4－8



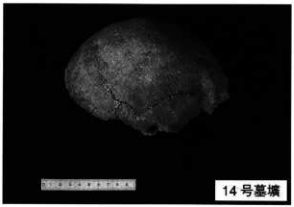
4－9

写真図版 39　出土人骨(4)

5－1

5－2

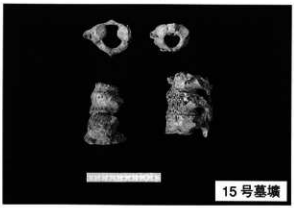
5－3



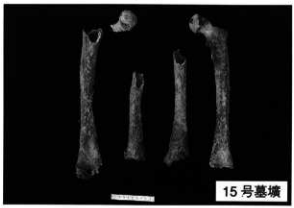
5－4

5－5

5－6



5－7



5－8

写真図版 40　出土人骨(5)

報告書抄録

ふりがな	たかぎこだていせき・ながねいちいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	高木古館遺跡・長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書
副書名	国道4号花巻東バイパス建設工事関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第472集
編集者	阿部徳幸・中村絵美
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL 019（638）9001
発行年月日	2006年3月14日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
高木古館遺跡	岩手県花巻市高木第20地割88－10ほか	03205	ME26－2089	39度22分57秒	141度08分34秒	2003.06.09～2003.10.24 2004.04.13～2004.06.30	11,962㎡	「国道4号花巻東バイパス建設事業」に伴う緊急発掘調査
長根Ⅰ遺跡	岩手県花巻市東十二丁目第1地割65－1ほか	03205	ME36－1213	39度22分13秒	141度08分04秒	2004.08.19～2004.09.03	931㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高木古館遺跡	集落跡 城館跡	縄文時代 中世	竪穴住居跡　1棟 陥し穴状遺構　11基 竪穴状遺構　1棟 土坑　7基 曲輪　2カ所 テラス状遺　2カ所 犬走り　2カ所 馬場跡・溝跡　4条	縄文土器 弥生土器 土師器・須恵器 磁器 石器 金属製品2（鏡・錫杖） 古銭2	
長根Ⅰ遺跡	墓地跡	近世 時期不明	墓壙　16基 柱穴列　3列	近世陶磁器 土製人形 金属製品 玉 銭貨	

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第472集

高木古館遺跡・長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書

国道4号花巻東バイパス建設工事関連遺跡発掘調査

印　刷　　平成18年3月8日

発　行　　平成18年3月14日

発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話(019)638－9001
FAX(019)638－8563

印　刷　第一印刷有限会社
〒020－0122　岩手県盛岡市みたけ四丁目6－40
電話(019)646－6001

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006